
新生連合艦隊

天嶽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新生連合艦隊

【Nコード】

N8595N

【作者名】

天嶽

【あらすじ】

2024年4月1日、大日本帝国海軍の血を引く日本国海上自衛隊は、中国人民解放軍海軍の巡航ミサイルによって壊滅した、その後日本は連合艦隊の再建を世界に宣言し、陸自、海自、空自を陸軍、海軍、空軍と改名し、憲法第9条も破棄し、軍備を増強した、だが日本には、まだやらねばならないことがあった、日本をあの悲惨な敗戦から守るために…。

主要人物紹介

天嶽

「さうで、今回は、まだやっていなかった、（今頃！？）主要人物紹介です！」

翔平

「今頃かよ作者?!」

天嶽

「そつだ今頃だ!!」

啓太

「わあ、開き直っちゃったよ・・・まあいいけどな」

天嶽

「ちようど夏休みも近いしな」

播磨

「関係あるの？」

天嶽

「ない!では行くぞ」

啓太

「ほい」

主要登場人物

林 翔平
はやし しょうへい

役職 大日本帝国海軍第二連合艦隊司令長官

階級 大将

出身地 神奈川県横須賀市

身長 172cm

体重 53kg

年齢 24歳

誕生日 8月31日

趣味 ジェットスキー

好きなもの 海 艦船

嫌いなもの 机仕事

我らが主人公（多分）、沖縄沖で艦隊が全滅したため、日本国海軍の連合艦隊司令長官に就任、その後、神々に力によりタイムスリップしたため、現在は、大日本帝国第二連合艦隊司令長官を務めている、大の机仕事嫌いでも何時も長官執務室を抜け出して、参謀の葵を困らせている、ちなみに、少年時代は、かなりのやんちゃ坊主で、夜中によく家を向けだしては、港に遊びに行っていた、記念館三笠にも侵入したことがあり、そのとき、初めて艦魂を見た。

啓太

「翔ちゃんこんなことしてたんか・・・」

翔平

「いや、懐かしいな・・・ここだけの話、アメリカ海軍基地にも入ったことがあるぞ」

播磨

「え？」

天嶽

「ま、それは置いて次！」

栗須くりす 啓太けいた

役職 大日本帝国海軍第二連合艦隊参謀

階級 中将

出身地 兵庫県神戸市

身長 168cm

体重 50kg

年齢 24歳

誕生日 9月17日

趣味 ゆっくりと小説を読むこと

好きなもの 肉料理 小説（ミステリー、サスペンス以外） 平穏な毎日

嫌いなもの 野菜（特に茄子） 過剰な運動 面倒事

真面目にしなければならぬときは真面目にしようとしている、出てくるかどうかは別として（翔平に会ってから、しようとしていない）

夢は、定年後、平和にまったりボケ々と毎日を過ごすこと

播磨

「ある意味夢がないというか・・・」

天嶽

「次！」

清水 しみず 葵 あおい

役職 大日本帝国海軍第二連合艦隊参謀

階級 中将

出身地

身長 159cm

体重 42kg

年齢 26歳

誕生日 1月10日

趣味 料理

好きなもの 家族

嫌いなもの 特になし

生真面目な性格のため翔平や啓太に振り回される苦労人

最近の悩みは、上司が机仕事を嫌って抜け出してしまうこと

十六夜

「苦労してますね、葵・・・」

播磨

「胃薬飲む？」

葵

「ありがとう・・・」

天嶽

「次！」

林武 はやし たけし

役職 大日本帝国海軍技術士官 林重工株式会社社長兼設計主任

階級 中将

出身地 神奈川県横浜市

身長 170cm

体重 53kg

年齢 48歳

趣味 船や海を眺めること

誕生日 8月8日

好きなもの 船 妻

嫌いなもの 早口で喋る人

主人公の父親、会社の利益の90%をつぎ込んで、第二連合艦隊の艦艇を造りだした、本人、何故造り出したかというところ。ある日、階段から滑って落ちた時に、造れとお告げが来た感じがしたそうだが、最近の悩みは、腰痛

翔平

「そんな適当な理由で作ったのかよ」

武

「そつだ、日本を守るためならな」

天嶽

「次！」

堀井 弘明
ほりい ひろあき

役職 大日本帝国海軍第二連合艦隊参謀

階級 中将

出身地 京都府舞鶴市

身長 169cm

体重 51 kg

年齢 24 歳

誕生日 3月15日

趣味 映画鑑賞

好きなもの ほのぼのした雰囲気映画や小説

嫌いなもの ホラー物の映画や小説

真面目でいい人なので、いじられやすい

葵に次ぐ苦労人

山口 昇 やまぐち のぼる

役職 大日本帝国海軍第二連合艦隊航空母艦鳳翔制空隊長

階級 中佐

出身地 千葉県木更津市

身長 190 cm

体重 68 kg

年齢 22 歳

誕生日 6月6日

趣味 野良の犬や猫に餌をあげること

好きなもの 動物

嫌いなもの 爬虫類

寡黙で体が大きいので恐がられやすいが実はすごく優しい人
哲也のストッパー・・・だが時々一緒に暴走する・・・

木ノ本 きのもと 哲也 てつや

役職 大日本帝国海軍第二連合艦隊航空母艦鳳翔制空隊

階級 少佐

出身地 北海道札幌市

身長 174 cm

体重 55kg

年齢 20歳

誕生日 10月13日

趣味 人をからかうこと

好きなもの かつ丼

嫌いなもの 1つの事に長時間集中すること

テンションの高いムードメーカー

よく暴走するのでストッパーが必要

天嶽

「さて、これで主要的な人物は一応全員です・・・また増やすかも
すれませんが」

播磨

「私達は？」

天嶽

「へ！？・・・あつ！・・・また次回！」

艦魂達

『忘れてたのか！！馬鹿作者！！』

ズツドオオオオオオオ~~~~ン

天嶽

「ギヤアアアアアアア！！！」

翔平

「また次回お会いしましょう！」

啓太

「ご意見・ご感想」

艦魂達

「お待ちしています！」

ブローグ

20XX年4月1日、大日本帝国海軍の血を引く日本国海上自衛隊は、中国人民解放軍海軍の巡航ミサイルによって壊滅した、日本国民は、壊滅した日が、4月1日だったため、初めに聞いたときは、悪い冗談だと思っていた、だが翌日になっても、まだ報道されているので真実だと悟った、このニュースは、世界中で報道された。

4月4日海上自衛隊呉基地、ここに、一隻の護衛艦が入港した、艦名は「こんごう」今現在、日本に残された唯一のイージス艦であった、こんごうの艦首には、一人の少女が立っていた。

4月1日海上自衛隊は、米海軍との演習のため、南西諸島に向かって、米海軍といったん沖縄で合流するためだ、沖縄まであと100海里その時だった、潜水艦から巡航ミサイルが一発発射された、そのミサイルは、艦隊の中央で炸裂、ここに壊滅した、なぜ、こんごうが無事なのか、それは、機関の不具合が発生し呉に向かっていたからだ。

「どうしたんだ、こんごう？」

と陽気に声をかけるのは、こんごう艦長の林 翔平一佐この艦で、艦魂が見える唯一の人間だ

「どうしたって、仲間が大勢死んでしまったのに、よくそんなに能天気でいられるわね」

きつめに答えるのは、護衛艦「こんごう」艦魂こんごうであった、

翔平

「すいませんちょっと励まそうと思ってな」

こんごう

「まあいいわ…はあーこれからどうなるんだろう」

翔平

（なんか軽くスルーされた）

こんごう

「ねえ聞いているのか翔平」

翔平「えっ何の話だっけ」

こんごう

「人の話はちゃんと聞て」

翔平

「はい」

こんごう

「これからどうなるんだろう、という話よ」

翔平

「それは、作者に聞かないと」

えっ俺

こんごう

「コラいきなり作者お引つ張り出さない」

そうだそうだ俺なんか気にせずに話を進めろ

翔平

「ハイわかりましたー、でもさーこんごうまずやるのは、艦隊の再建だろ」

こんごう

「いやその話じゃなくて中国の話」

翔平

「さーどうなるんだろうな」

こんごう

「知らないの」

翔平

「ああ、まだ混乱していてまともな情報が入ってこない」

この二人はまだ自分たちが歴史を変える重要な任務をすることなど夢にもおもはなかった。

プロローグ（後書き）

作者「どうも、こんにちは天嶽です、今回は、翔平のプロフィールを紹介したいと思います。

名前 林 翔平

身長 172cm

体重 53kg

年齢、24歳ぐらい

好きなもの 海

嫌いなもの 机仕事

容姿 典型的な日本人

性格 正義の味方

です。」

ご意見、ご感想お待ちしております。

初めての小説挑戦なのでよろしくお願いします。

第一話 最新鋭イージス戦艦金剛誕生

海上自衛隊壊滅から3カ月後、中国人民解放軍海軍は米海軍に敗れ、中華人民共和国は、日本に謝罪した、日本は賠償金を要求し、その賠償金を使い日本は、連合艦隊を再建する計画を立てた。

日本国海軍呉基地

翔平

「なんですって！」

翔平が突然大声をあげる

「おいおいそんなに驚かなくてもいいじゃないか」

翔平

「ですがこんごうを解体するって司令、上の連中は何を考えているんですか」

司令

「大丈夫だ、君の乗る艦はあと一か月で完成する」

翔平

「ですが今のこんごうは」

司令

「それも心配するな、そういえば君は艦魂が見えるそうだね」

翔平

「はい、見えますが」

司令

「いま、こんごうは、君が乗る艦の隣のドックにいる、それと新造艦の名はイージス戦艦金剛だ、これで君も分るだろ」

翔平

「はっ？ちよつと待ってください司令、今なんと自分の耳がおかしくなかったらいま戦艦と言いましたよね？」

司令

「ああ確かに言っただぞ」

翔平

「しかも金剛つてまさか司令今のこんごうの艦魂をその金剛に転移される気ですか？」

司令

「ああその通りだ、実は昨日こんごうに会って話をつけてきた、そろそろ転移するだろう」

翔平

「いつそんな話をしたのですか・・・」

ドッカン バリバリ ガラガラ

翔平

「ってなんの音だ！」

ピリリリ ピリリリ ピ ガチャ

司令

「私だが、どうしたんだ」

電話の相手

「司令大変です、ドックに入居していた、こんごうが突然真つ二つに折れてしまいました」

司令

「わかったすぐ行く」

ガチャ と司令は電話を切った

司令

「どうやら転移に成功したようだ、さあ新しい艦を見に行くか」

翔平

「ちょっと待ってください司令」

司令

「なんだ？」

翔平

「いつ戦艦を建造したのですか？」

司令

「ああ、君のお父さんの会社が建造してドックに隠していたそうだ」

翔平

「親父が…」

司令

「それじゃ、艦を見に行こう」

日本国海軍呉基地秘密ドック

司令

「どうだこれが、日本の誇る最新鋭の艦だ」

司令と林が見るその先には鋼鉄の城があつた

翔平

「でかいなー」

司令

「全長が335m全幅47m基準排水量9万5千トンだ」

翔平

「大和型以上か、よくこんなもんを作つたなー」

司令

「兵装が81式460mm60口径滑空砲が3連装3基、OTOM
ラ127mm速射砲が2連装8基、20mmフランクスイ
S×10基、Mk57VLS 80セル×4基、RAM近接対空
ミサイル：10連装4基だ」

翔平

「化け物だな」

こんごうを改めて金剛

「誰が化け物なのかしら？」

翔平が振り向くとそこには、引きつった笑みを浮かべた金剛がいた、

翔平

「ひっ！や、やあ金剛久しぶり」

金剛

「毎日あっているでしょ」

翔平

（いかんここは話の流れを変えねば）

翔平

「金剛どうだった新しい艦は」

金剛

「広くてとてもよかったわよ」

翔平

「そりゃよかった」（ほっよかった話の流れを変えれたようだ）

金剛

「ところで…誰が化け物なのかしら？」

翔平

（全然変えられていない）

金剛

「ちよっとこっちでオハナシシマシヨ」

翔平

「たすけてー司令たすけてーっていない」

金剛

「さあここに来なさい」

翔平

「ぎゃあああー」

この夜ドックの端っこでうずくまっている翔平が発見されたのは別の話。

第一話 最新鋭イージス戦艦金剛誕生（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

第二話 連合艦隊再建計画

9月17日、呉に一隻の大型空母が入港した、その空母はキティホーク、日本はアメリカと交渉し、この空母を手に入れた、だが手に入れたのは、艦体のみ乗せる航空機は、購入と言ってきた、だが日本に自前の艦載機を作る時間は皆無に等しい、仕方なく日本はキティホークに積む艦載機を購入し、空母乗組員を育成する予定だ。

空母キティホーク飛行甲板

金剛

「キティ久しぶりね」

キティ

「やあ、金剛久しぶり」

金剛

「これからよろしくね」

キティ

「こちらこそよろしくね」

流石は元在日米軍の旗艦、日本語は堪能だ

翔平

「おい、金剛おいてくなよ」

金剛

「ああ、ごめんねーすっかり忘れてた」

翔平

「がーん、俺ってそんなに影が薄いのか、艦長なのに」

金剛

「おい、どこ行こうとしてるんだーもどつてこーい」

翔平がふらふらとどこかに行くのを止める金剛

キティ

「ねえ、金剛この人だれ、私たちが見えるみたいね」

金剛

「ああ、あれはこれでも私の艦長よ」

キティ

「へえーそうなんだ」

翔平

「はじめまして、自分が、イージス戦艦金剛艦長林翔平一佐です、これからよろしく鳳翔」

金剛

「おい！鳳翔ってなんなの、翔平」

翔平

「なんだー知らなかったのか、空母キティホークの、新しい艦名だよ」

金剛

「聞いてないぞそんな話」

翔平

「うん、今はじめて言った」

金剛

「…と言つことらしい、鳳翔これからよろしくね」

鳳翔

「こちらこそよろしく」

林

「金剛、俺ちよつと司令部に行つてくる」

金剛

「なんで？」

翔平

「司令に呼ばれている」

金剛

「左遷だつたらどうする？」

翔平

「そんなこというな！」

金剛

「まあ、早く行つたほうがいいよ」

翔平

「ああ、そうだったなじゃあ行つてくる」

金剛

「行つてらっしゃい」

鳳翔

「なんか夫婦みたいね」

スツ バタン 滑つてこける金剛

金剛

「鳳翔な、な、何を言っているのよ」

鳳翔

「そのまま見た感想だ」

金剛

「くつまぁいいわ」

鳳翔

「いいんだ」

金剛

「で、これから何をするの」

鳳翔

「うゝん何をしようか」

日本国海軍呉基地司令本部

コンコン

司令

「どうぞ」

翔平

「失礼します」

「待っていたぞ」

翔平

「親父なんでここに」

司令

「私が呼んだ」

翔平

「なぜですか司令」

司令

「今、建造している艦の話を聞きためだ」

親父

「そつだぞ、お前も見ろ」

と父からUSBメモリを渡された

翔平

「司令これだけですか」

司令

「ああこれだけだが、そういえば鳳翔は、どうかね」

翔平

「とてもいい艦でした」

司令

「それは、よかった」

翔平

「これから鳳翔をどうするんですか」

司令

「ドックに入れて改造する」

翔平

「そうですかー」

司令

「もう話は終わりだ帰っていいぞ」

翔平

「はっわかりました司令」

親父

「またな」

翔平

「おうまた今度な、でわ失礼しました」

イージス戦艦金剛艦長室

翔平

「なんで金剛と鳳翔がいるんだ」

金剛

「なんでって見てわからんのか遊んでいるんだよ」

翔平

「そりゃ見たらわかる、なぜこの部屋で遊んでいるか聞いているんだ」

金剛

「気分よ」

翔平

「はあゝそうですか」

金剛

「なによその溜息は」

翔平

「気にするな、ちょっと仕事をするから静かにしてくれ」

金剛「わかったわ」

翔平は、パソコンを起動し、USBメモリを差し込み中身を見た、

翔平

「親父、これ本当に作っているのか・・・」

パソコンの画面には、今建造中の艦艇の計画が載っていた。

第二話 連合艦隊再建計画（後書き）

作者「どうも、こんにちは天嶽です、今回は、鳳翔のプロフィールを紹介したいと思います。」

名前 キティフォーク 鳳翔

身長 130cm

体重 に「死にたいのか」・・・

見た目の年齢、10歳ぐらい

好きなもの 日本の景色、囲碁

嫌いなもの 朝

容姿 金髪の足首あたりまで伸びたロング、碧眼
性格 基本いい人

です。」

ご意見、ご感想お待ちしております。

第三話 三笠 爆誕！

10月12日、横須賀林重工ドック

翔平

「親父、なんで俺を呼んだんだ」

親父

「ちよつとこれを見てくれ」

と親父はドックの中で建造中のものを指差した

翔平

「これが、ん、これは、金剛そっくりだな、まさかもう二番艦が完成するのか？」

親父

「ああ、正確には、三カ月後には完成する予定だ」

翔平

「いつから、作っているんだ？」

親父

「三年位前からだったかな」

翔平

「なんで作ろうと思ったんだ」

親父

「決まっている、日本を守るために作ろうと思ったんだ」

翔平

「そうか、進んだ道が違えども、親子ってことだな」

親父

「そうだな」

翔平

「で、親父何のために俺を呼び出した？」

親父

「あつすっかり忘れてた」

翔平

「で、頼みたいことってなんだ？」

親父

「この艦の艦名のことだけど」

翔平

「なににするんだ」

親父

「三笠」

翔平

「三笠かいいい名じゃないか」

親父

「そこでだ、いまから三笠公園に行ってくれないか？」

翔平

「はあ、なんで」

親父

「三笠公園には、記念艦の三笠がいるからさ」

翔平

「なんとなく親父の考えていることが、読めたけど本気か」

親父

「本気だ」

翔平

「はあ、じゃあちよっくら行ってくる」

親父

「頼んだぞ」

横須賀三笠公園

三笠

「今日も、暇ねーうん」

三笠があくびをしてると何かにきずいた

三笠

「あの人どこかで見たような」

三笠は、自分の記憶の中から一人の少年を思い出した

三笠

「そうか、あの少年か」

そのころ翔平は

翔平

「そついや、何年ぶりだ三笠と会つのは」

翔平

「覚えてるかな」

と言いながら翔平は三笠艦内に入っていった

記念艦三笠艦内

翔平

「三笠いるか」

翔平は三笠艦内で艦魂の三笠を探していた

翔平

「どこにいますんだよ」

三笠

「私のことを呼んだか翔平」

翔平

「三笠久しぶり」

三笠

「大きくなったわね、翔平」

翔平

「最後にあつた日から何年経っていると思ってるんだ三笠」

三笠

「そうね、…ところで今日は何のために私に会いに来たの？」

翔平

「三笠新しい艦に乗る気はないかい？」

三笠

「それってここから離れろってこと？」

翔平

「そうだ、三笠も知っているだろういま日本を守るために連合艦隊を再建していることを」

三笠

「そのことは聞いたことあるけど」

翔平

「なら三笠、これから一緒に日本を守るために働いてくれないか」

三笠

「そういうことなら……いいわ一緒に日本を守りましょ」

翔平

「よっしゃー交渉成立、今夜迎えに来るから、転移の準備をしていてくれ」

三笠

「わかったわ」

その夜

翔平

「三笠」

三笠

「待っていたわよ」

翔平

「準備は、できたか」

三笠

「できたわよ」

翔平

「分かった、始めてくれ」

このとき三笠の中からは、展示品などすべて撤去されていて、艦

内は空であつた

三笠

「うん、けどなぜ展示品を出したの」

翔平

「親父が、いつの間にかこの三笠を完全コピーしたものを作つてな、三笠が転移したらこの艦体は、折れてしまつたろ、だからそのコピー版を展示しようつてわけだ」

三笠

「用意がいいわね」

翔平

「確かに」

三笠

「じゃあ始めるわよ、危ないから下がつて」

翔平

「分かった」

三笠は、翔平が下がるのを確認すると、転移を実行した、三笠がいなくなると、記念艦三笠は、激しい轟音を立てて二つに折れてしまった、

翔平

「成功だ、それじゃ親父後よろしく頼んだぜ」

親父

「分かった」

翔平

「三笠に会ってくる」

横須賀林重工ドック

翔平

「三笠どうだ」

三笠

「さすが最新鋭艦ね」

翔平

「完成は三ヶ月後らしい、これからよろしく」

三笠

「こちらこそよろしく」

翔平

「それじゃ、俺は呉に帰るまたな」

三笠

「またね」

日本国海軍呉基地 イーゼス戦艦金剛艦長室

翔平

「ただいまー」

金剛

「おかえり」

翔平

「金剛、変わったことはないか？」

金剛

「なにもないわよ」

翔平

「分かったありがとう、じゃ俺は寝るおやすみ」

金剛

「ちょっと待ちなさい、今までどこに行っていたの？」

翔平

「軍機です聞かないでください」

金剛

「そう、ならこっちで、O H A N A S I しましょう」

翔平

「ヒッヒイイイイ」

そののち、日本国海軍呉基地から悲鳴が響き渡った。

第三話 三笠 爆誕！（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

第四話 練習航海

11月5日

日本国海軍呉基地からイージス戦艦金剛が練習航海のため出航しようとしていた、

金剛

「やっと外洋にでられる」

翔平

「たしかに」

金剛は、乗組員が定数に達していないため、今まで瀬戸内海から出たことがなかった

??

「艦長誰と話しているのですか」

翔平

「おお、副長か気にするな」

今翔平に話しかけたのは、清水葵二佐イージス戦艦金剛の副長をしている

翔平

「副長、出航準備はできたか」

葵

「はっ、すでに完了しております」

翔平

「よし、出航用意」

水兵1

「出航用意 舳い放てーッ」

翔平

「両舷前進微速」

水兵2

「両舷前進微速」

艦底から心地よい機関音が響き金剛は滑らかに出航していった

葵

「航海長、この艦の艦長あの人で大丈夫ですか」

葵が今話しかけたのは、海上自衛隊幹部候補生学校からの翔平の友であり、金剛の航海長を務めている、栗須啓太二佐

啓太

「うん、なんでそう思うん？」

葵

「独り言というか、見えない誰かと話しているような感じです」

啓太

「見えない誰かが、副長の考えは、半分正解で半分外れだ」

葵

「航海長、どういう意味ですか？」

啓太

「艦に乗っていたらそのうち分るさ」

翔平

「副長、CICに行ってくるから操艦を任せるぞ」

葵

「はっ分かりました」

イージス戦艦金剛CIC

翔平

「砲雷長、どうだ新イージスシステムは」

今、将兵が話しかけたのは、護衛艦の時から翔平と一緒に艦に乗っている、この艦の砲雷長の、堀井弘明二佐

弘明

「護衛艦の時とは、大違いですまったく化け物です」ふんぐは

ボタン

翔平

「砲雷長！！金剛何をするんだ」

金剛

「私のことを化け物なんていうからよ」

翔平

「艦魂も似たようなものだろう?」

金剛

「なんですって!」

翔平

「!?!」

金剛の顔を見た途端、翔平は脱兎のごとくCICから飛び出したが、見つかった。

金剛

「見つけたわよ」

翔平

「金剛さん、ここは、冷静に話し合いましょう」

金剛

「ごめんそれは無理」

翔平

「金剛さん上陸の時好きなもの買ってきてあげるから」

金剛

「……いいわよ、今回だけ許してあげる」

翔平

「ふー助かった」

イージス戦艦金剛艦長室

葵

「艦長お呼びですか」

翔平

「ああ、早いなちょっと待っていてくれ」

啓太

「翔平呼んだ」

弘明

「艦長呼びましたか」

翔平

「よしそろつたな、実は明後日に戦闘訓練をやるつもりだ」

葵

「かつ艦長」

啓太

「ええんちゃうか」

弘明

「いいですよ」

翔平

「決まりだな」

葵

「艦長！」

翔平

「副長どうした」

葵

「艦長戦闘訓練なんて早すぎます」

翔平

「副長、ならいつやるんだ」

葵

「それは・・・」

翔平

「では、明後日に戦闘訓練を行う、以上解散」

11月7日

イージス戦艦金剛CIC

水兵3

「対空レーダーに感あり、敵対艦ミサイル高速で接近！方位124

。距離10万機影6確認」

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「機関最大戦速、取舵20°。」

水兵1

「機関最大戦速、取舵20°。」

イージス戦艦金剛CIC

水兵3

「目標よりアクテェブ・レーダー！完全にロック・オンされています！」

弘明

「VLS発射用意、イルミネーター^{リンク}連動！」

弘明

「発射5秒前、4…3…2…1…発射」

翔平

「いいぞ」

水兵4

「5機命中確認、一機接近」

弘明

「127mm速射砲迎撃用意！」

水兵4

「よしそろそろ、127mm速射砲打ち方用意！」

弘明

「打ち方はじめッ！」

水兵5

「命中、全機撃墜確認」

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「よし、訓練終了」

金剛

「まあまあね」

翔平

「厳しいな」

水兵1

「艦長、司令部より緊急入電です」

翔平

「うん？」

金剛

「なんて書いてあるの？」

翔平

「副長、今すぐ針路を尖閣諸島へ」

葵

「は？艦長何を言って…」

翔平

「尖閣諸島で、海保の巡視船が中国海軍に拘束されかけている」

艦橋一同

「なんですって」

翔平

「そういうわけだ、副長針路を尖閣諸島へ」

葵

「よーそろー」

翔平

「航海長、最大戦速」

啓太

「よーそろー、中国海軍に本艦の健脚を見せてやります」

イージス戦艦金剛は、純水素タービンエンジンを6基搭載し馬力は35万馬力最大速度は、50ノットを超える

啓太

「機関最大戦速、針路尖閣諸島へ」

水兵 1

「よーそろー」

3 時間後

水兵 2

「艦長、あと 30 分で尖閣諸島海域に入ります」

翔平

「早っ何ノット出したん」

金剛

「52、07ノット出たわ」

翔平

「この艦体で…」

水兵

「艦長、巡視船もとぶ視認、さらに後方に中国海軍駆逐艦！」

翔平

「巡視船と駆逐艦の間に入る、取舵 20°。」

水兵 1

「よーそろー」

イージス戦艦金剛は、中国海軍駆逐艦の進路をふさぐ形の針路をと
り、

巡視船もとぶの盾になるように、中国海軍駆逐艦と睨み合っていた。

翔平

「さあ、どう出る中国海軍」

葵

「艦長、もし中国海軍が攻撃してきたらどうするんですか？」

翔平

「そしたら、本艦の主砲が動く」

葵

「撃沈するんですか？」

翔平

「状況次第だ」

その時、

ドン…ガァァン

翔平

「どうした！」

水兵

「中国駆逐艦発砲、第一主砲塔に命中」

翔平

「被害状況報告！」

葵

「えー被害らしき被害はありません」

翔平

「そうか、砲雷長、一、二番主砲射撃用意！」

弘明

「了解、弾種はどうしますか？」

翔平

「とりあえず空砲でよろしく頼む」

弘明

「了解」

グイーン ガシンッ

水兵

「発射準備完了」

翔平

「撃てっつー！！」

ズドオオオオオーンッ！！

啓太

「でっかいおとやなっ翔ちゃん」

翔平

「あはははっ…」

葵

「艦長！ 航海長！ バカやってないで働いてください！！」

翔・啓

「「ごめんなさい」」

水兵

「報告！！ 中国駆逐艦撤退していきます」

翔平

「分かった、本艦も30分後に基地に帰投する！」

イージス戦艦金剛艦長室

金剛

「それにしても、中国海軍は、何故こんなことをしたのかしら？」

翔平

「さあ中国人の考えることは、分からん」

金剛

「そういえば、連合艦隊はいつ再建されるの？」

翔平

「うん？ 来年の2月には、全艦そろそろそうだ」

金剛

「早やつ！！いつからそんなに建造してるのよ」

翔平

「5年位前からだそうだ」

金剛

「何をどのくらい作っているの？」

翔平

「戦艦6隻、空母6隻、巡洋艦12隻、駆逐艦48隻、輸送艦30隻、軽空母5隻、

大型自走浮きドック6隻、小型自走浮きドック8隻、工作艦6隻、強襲揚陸艦10隻、病院船3隻、計137隻こんなもんだ」

金剛

「多いわね、乗組員はどうするの？」

翔平

「そこの所は作者の力だろう」

はいはい任しとけ

翔平

「そつえば、金剛さっき撃たれたとこ大丈夫か？」

スルーされた

金剛

「大丈夫よ」

コンコン

翔平

「入れ」

葵

「失礼します」

翔平

「副長か、どうしたんだ？」

葵

「艦長、まもなく呉基地に入港します」

翔平

「そうか、艦橋に戻るか」

イージス戦艦金剛は、無事呉基地に到着した。

第四話 練習航海（後書き）

作者「お久しぶりです、中間テストで勉強していたので、パソコンを起動できませんでした。」

金剛「作者、本当に勉強していたのかしら？」

作者「ギクッ、何ヲ言ッテイルノデスカ、金剛サン」

金剛「何か怪しいわね、鳳翔こっちに来て」

鳳翔「金剛よんだか」

金剛「ねえ、鳳翔作者が、三週間も何をやっていたか知ってる？」

鳳翔「ああ、知ってるぞ、作者が何をやっているかE-2Dで監視していた」

作者「ギクッ、ヤバイ（こういう場合は逃げるが吉だ）」

ガシッ

金剛「待ちなさい」

鳳翔「…話していいか」

金剛「おねがい」

鳳翔「作者は、学校から帰ったら、まずゲームに飛びついている」

金剛「こんの…バカ作者ッ！」

ゴスッ

作者「ぐふっ…」

バタッ

金剛「さ、帰りましょ鳳翔」

鳳翔「まだ作者が倒れたまm「帰りましょ」はい」

「ご意見」ご感想お待ちしております。

第五話 連合艦隊集結そして・・・

2月23日

日本国海軍呉基地司令本部

コンコン

司令

「どうぞ」

翔平・金剛・啓太・葵・弘明

「」「」「失礼します」「」「」

司令

「待っていたぞ」

翔平

「司令何のために私たちを呼んだのですか？」

司令

「今日君たちに来てもらったのは、君たちにこれを渡すためだ」

司令が渡してきたのは、4通の封筒であった

翔平

「なんですかこれは」

司令

「中を見たらわかる」

翔平たちが、中身を見たら、そこには、辞令が入っていた。

翔平

「司令、何故私なんかが連合艦隊司令長官なんですか!!」

司令

「お前しか適切な人物がいなかったからだ」

啓太

「何故、俺が参謀長」

司令

「ほか三人は、長官の補佐を頼んだぞ」

三人

「了解」

司令

「よし、戻っていいぞ」

全員

「」「」「失礼しました」「」「」

イージス戦艦金剛長官室

金剛

「昇進おめでとう翔平」

翔平

「ありがとう金剛」

金剛

「さあ、みんなに挨拶してこないと」

翔平

「みんなって？」

金剛

「決まっているじゃない、連合艦隊艦艇の艦魂たちの所によ」

翔平

「もう全員集まっているのか？」

金剛

「当たり前じゃない、さあ早く着替えて！」

翔平

「何に？」

金剛

「今月から軍服が変わったでしょ」

翔平

「ああ、あの旧海軍の軍服か？」

金剛

「そうよそれ」

翔平

「分かった3分待っていてくれ」

イージス戦艦金剛士官室

翔平

「多いな」

金剛

「全員呼んだからね」

三笠

「翔平、おめでとう」

翔平

「三笠久しぶりだな」

金剛

「翔平、早くみんなに挨拶を」

翔平

「分かった」

翔平

「えー今回連合艦隊司令長官になってしまった、林翔平だ以後よろしく、まあ堅苦しいことはこの辺で以上終わり」

??

「「「長官」「」」

翔平

「うん、誰か呼んだか」

紀伊

「初めまして、私は金剛型戦艦3番艦戦艦紀伊です」

尾張

「同じく、4番艦戦艦尾張だ」

駿河

「・・・同じく、5番艦戦艦駿河・・・です」

常陸

「同じく、6番艦戦艦常陸です」

翔平

「おう、これからよろしくな」

全員

「「「「よろしくお願いします」「」」」

翔平があたりを見て回っていると、いかにも不機嫌そうな鳳翔がいた

翔平

「うん？鳳翔なんでそんなに機嫌が悪そうな顔をしてるんだ？」

鳳翔

「うるさい、うるさい、うるさい」

ゴスッ

翔平

「ぐふっ…」

紀伊

「長官!!」

翔平

「大丈夫だ」

??

「長官、今鳳翔に話しかけないほうがいいですよ」

翔平

「もう少し早くいつてほしかったな、って誰だ？」

鳳凰

「自己紹介が遅れました、鳳翔型空母2番艦の鳳凰です」

翔平

「これからよろしく」

鳳凰

「こちらこそよろしくお願いします」

翔平

「鳳凰、なんで鳳翔はあんなに不機嫌だったんだ？」

鳳凰

「それは私にも分かりません」

翔平

「そうか、よし常陸」

常陸

「お呼びですか長官」

翔平

「常陸、鳳凰と一緒に鳳翔の機嫌がなぜ悪いかわ調べてくれ」

常陸・鳳凰

「了解」

翔平

「これで鳳翔のことは、心配ないな」

翔平が腕時計を見ると時間は午後3時を回っていた

翔平

「おつと金剛、俺は仕事があるから戻るぞ」

金剛

「翔平、もう帰るの？」

翔平

「長官になってしまったからな」

金剛

「そうなの」

翔平

「また用があつたら呼んでくれ」

金剛

「分かった」

イージス戦艦金剛長官室

翔平

「あゝ畜生、手が痛い」

連合艦隊司令長官になると翔平の嫌いな机仕事もちろん増える

翔平

「うるさい作者」

すいません

翔平

「ちよつと息抜きに出かけるか」

翔平がこつそり部屋を出ようとしたところ

葵

「長官、どこへ行くつもりですか」

翔平

「（見つかったか）ちょっと息抜きに」

葵

「だめです、行くのなら全部終わらせてからにしてください」

翔平

「え」

部屋に戻される翔平

翔平

「はあ」

常陸

「長官、いますか」

常陸が翔平の前に現れた

翔平

「あ、常陸かちょうどよかった」

常陸

「え？」

翔平

「常陸、転移だ、急げ」

常陸

「へ？あつ、はい」

イージス戦艦常陸甲板

常陸

「長官何があつたんですか？」

翔平

「ふう常陸のおかげで、助かった、実はなかなくしかじか」

常陸

「だいたい事情が分かりました」

翔平

「しばらく金剛には戻れないな」

その頃、葵がもぬけの殻の長官室を見て、人が変わったように翔平を探していた。

常陸

「分かりました、しばらく間の視察でもしますか？」

翔平

「そうだな」

常陸

「それでは行きましょう」

翔平

「どこへ？」

常陸

「巡洋戦艦天羽の所、まだあったこと無いでしょう」

翔平

「ない」

常陸

「それでは行きましょう」

イージス巡洋戦艦天羽後部甲板

天羽

「暇だわ」

天月

「暇ね」

十六夜

「二人ともしゃきつとして、長官が来るわよ」

天羽

「へ？長官が来るの？」

翔平

「もう来てるけどな」

天月

「長官来るのなら予告してからにしてください」

翔平

「そんなこと言われてもな」

十六夜

「長官、今日は何の用で」

翔平

「視察と自己紹介つてとこかな、じゃ改めまして、今日から連合艦隊司令長官に就任した林翔平だ、以後よろしく頼む」

天羽

「天羽型巡洋艦1番艦天羽です」

天月

「同じく2番艦天月です」

十六夜

「同じく3番艦十六夜です」

天羽・天月・十六夜

「これからよろしくお願いします」

翔平

「さてと、これからどうするか」

金剛

「しよっっへっいっ」

翔平

「やばい、常陸、転移だ逃げるぞ」

常陸

「アイ・サー」

翔平

「天羽達はここで金剛の足止めを頼む」

天羽・天月・十六夜

「了解」

金剛

「翔平、待ちなさい」

天羽

「金剛さん落ち着いて」

天月

「そうです落ち着いてください」

十六夜

「長官今のうちに」

翔平

「ありがとう、常陸行くぞ」

常陸

「はい」

大型自走浮きドック呉

翔平

「常陸、どこだ、ここは？」

常陸

「ここは、私たちの病院呉です」

翔平

「呉？ああ自走ドックのことか」

常陸

「そうです」

??

「だれかおるん？」

翔平

「うん？呉か？」

呉

「そつや、うちが呉や」

翔平

「今日から連合艦隊司令長官に就任した林翔平だ、以後よろしく頼む」

呉

「長官、こちらこそよろしく願いします」

常陸

「長官！金剛さんたちが来ます」

翔平

「なんだと！！」

翔平は今、気が付いた自分が仕事をすっぱかして、艦隊視察に来て
いるということ

戦艦・巡洋艦の艦魂達

「長〴〵官」

翔平

「ひつ常陸」

常陸

「りよ、了解」

金剛

「だめよ、常陸」

血も凍り付きそうな目で常陸をにらむ金剛

常陸

「はいいいー」

翔平

「（ヤバイ、どうするこの危機的状況を回避するには、どうすればいいんだ）」

戦艦・巡洋艦の艦魂達

「長〴〵官〴〵」

この時、翔平の頭の中にふと名案（？）をひらめいた

翔平

「そつだ今夜はみんなで宴会をしよう」

全員

「「「「「「「「「「「「「へ？」「」「」「」「」「」「」

翔平

「それじゃ、今夜の１９００に金剛甲板に集合、そついうことで」

翔平は脱兎のごとく、呉の艦橋に行き、内火艇を借りて金剛に戻った。

イージス戦艦金剛長官室（夕方）

翔平

「終わった、もうこんな時間か」

金剛

「翔平、どこで宴会するの？」

翔平

「なじみの店」

金剛

「ふうん」

翔平

「準備するか」

金剛

「はい」

イージス戦艦金剛甲板

翔平

「これで、全員か」

艦魂達

「」「」「はい！」「」「」

翔平

「じゃ行くか」

啓太

「長官、どこ行くん？」

翔平

「参謀長、ちょうどよかった、飲みに行くか？」

啓太

「行く」

呉市市内

翔平

「ここだ」

つと、翔平は、一軒の中華料理店を指差した。

啓太

「ここか」

金剛

「ここなの？」

翔平

「そうだ」

と、言つて翔平は、店の中に入つていった

翔平

「お久しぶりです」

店主

「おお、来たか、二階に上がつて待っていてくれ」

翔平
「は〜い」

二階

翔平

「さっ、みんな座って」

啓太

「翔ちゃん、やっぱり連れてきたんか」

翔平

「うん、分かるか」

啓太

「やって、ほら」

啓太が指をさした先には、コップが浮いた、

翔平

「あははは」

一時間後

金剛

「翔平」

翔平

「どうした、金剛」

金剛

「旗艦をだれにするのかな、と思って」

常陸

「長官、まだ旗艦を決めてないんですか！」

翔平

「そうだけど」

常陸

「なら、私を旗艦にしてください」

翔平

「なんで」

常陸

「私は、金剛型の中で情報戦の能力が一番すぐれているんです」

翔平

「そうなのか？」

三笠

「翔平、なら私は、どうですか」

翔平

「三笠か」

三笠

「私は、基本的な性能は、金剛と同じです、けど対空戦闘能力が若干上がっています」

翔平

「ほう」

紀伊・尾張

「「長官、私は、対艦攻撃力が若干上がっています」」

翔平

「へ」

金剛

「翔平、反応が薄いわよ」

翔平

「なんか、どうでもよくなった」

常陸・三笠・紀伊・尾張

「「「長官（翔平）！」「」「」」

さらに1時間後

途中で葵も加わり

船魂達は皆酔いつぶれ眠ってしまい、

翔平、啓太は正座して葵に説教をされていた。

何故こんなことをしているのかと言うと…、

葵が部屋に入って来た時フワフワと浮いているコップを見て

葵

「何これ…幻覚？長官しばらくの間」「とあえず飲もう」「え！」

二人して酒をすすめて落ち着かせようした…ところが
一口飲ませたらすぐに酔いが回ったらしく顔を赤くし…

葵

「長官！何故仕事をほったらかして逃げたのです（ゴク）そんなことでは部下に示しがつきません（ゴクゴク）演習の時もそうですあなたは参謀長とタメ口でふざけ合って―」

啓太

（雲行きが怪しくなってきたな）今のうち逃げよ「参謀長あなたもです！」遅かった）

葵

「演習中にふざけ合うとは、なにを考えているのです！だいたい、あなたたちは…」

・・
（説教中）・・
・・

・・
にいますからああ言うことはひかてください。」

翔平・啓太

「「はい」「

葵

「よろしい」

バタッ

翔平

「寝てるよ」

啓太

「なあ翔ちゃんこれからあんまりふざけんようにしよな」

翔平

「ああ…にしても」

翔平・啓太

「「恐かったな」」

2月25日

横須賀林重工

翔平

「親父どうした？」

翔平は親父に呼ばれてはるばる横須賀の林重工業株式会社の本社ビルに来ていた

親父

「実は、見てもらいたいものがあってな」

翔平

「ほう、何を見てほしいんだ？」

親父

「こっちにきてくれ」

親父に言われて親父についていく、翔平

数分後

翔平は親父に連れられて、地下に来ていた、

翔平

「親父どこだ、ここは？」

親父

「地下の兵器の実験所だ」

翔平

「へっ」

親父

「翔平、これは、なんだか分かるか？」

翔平

「金剛型に搭載されている46センチ滑空砲と天羽型30センチ砲だろ」

親父

「はずれっ」

翔平

「じゃあ、なんだよ」

親父

「こいつは。新兵器のEMLだ」

翔平

「EML?どつかで聞いたことあるな・・・っあー」

親父

「分かったか、こいつは、新兵器46センチレールガンと30センチレールガンだ」

翔平

「えゝゝ、レ、レールガン!!」

親父

「正式名称は、91式460mm60口径電磁投射砲と78式305mm60口径電磁投射砲だ」

翔平

「エ、SF」

親父

「SFじゃない、現実だ」

翔平

「じゃあ、ビリビリ」

親父「それを言ったら・・・まあいい、今頃、金剛型全艦と天羽型全艦の主砲改装も始まっているだろう」

翔平

「そういえば、書類に書いてあったなー」

親父

「大丈夫か？そんなので」

翔平

「大丈夫だ！問題ない！」

親父

「・・・そうか」

翔平

「なあ、親父、レールガンを撃つ時の電力は、どうするんだ？」

親父

「そのことなら心配ない、金剛型、天羽型は、設計時から、電力には充分の余裕を持っている」

翔平

「あつ、そう」

親父

「まだ見せたいものがあるこっちに来てくれ」

移動中

翔平

「親父、いつまで歩くんだ、もう30分も歩いてるぞ」

親父

「もう着くから、ほらあそこだ」

翔平

「うん？航空機研究所」

親父

「・・・これだ、見てくれ」

翔平

「F-22ラプター、何故こんなところに」

親父

「ロッキード・マーティンとボーイングと我が社で共同開発した、F-22ラプターの艦上機型だ」

翔平

「だけど、F-22は海外輸出禁止政策だったはず」

親父

「この機体はロッキード・マーティンとボーイング社でF-22ラプターを基にして艦上戦闘機として開発した機体だから問題ない！」

翔平

「あつ、そう」

親父

「この機体は、来月各空母に配備する予定だ」

翔平

「聞いてないぞ!!」

親父

「極秘だったから」

翔平

「あつ、そう」

親父

「翔平、どうするこれから」

翔平

「明日は、また仕事だから帰る」

親父

「そうか、また来いよ」

翔平

「またな」

3月27日

イージス戦艦金剛長官室

金剛

「翔平、おきて」

翔平

「あと、5分」

金剛

「いい加減に起きなさい」

ゴスッ

翔平

「がはっ……」

金剛

「ほら早く、着替えて、きょうは艦隊演習の日でしょ」

翔平

「そうだった！！今何時だ」

金剛

「5時30分」

翔平

「った、大変だ、急げ」

数時間後

翔平

「艦長、出港準備は？」

艦長

「すでに整っています」

翔平

「参謀長、全艦の様子を確認を」

啓太

「はっ、分かりました」

しばらくして

啓太

「長官、全艦、出港準備完了です」

翔平

「よし、連合艦隊出航せよ」

全員

『了解』

水兵1

「全艦出港、第一駆逐艦隊より出港せよ」

水兵2

「第一戦隊、第一航空艦隊、機関始動。第二戦隊、第二航空艦隊序
列に従い出港せよ」

水兵3

「第二駆逐艦隊抜錨。第三戦隊、第三航空艦隊泊地より移動、水道
に向かえ」

翔平

「艦長、軍楽隊を準備させてくれんか、せつかくの門出だ。軍艦行
進曲を流してもらおう」

艦長

「はい、分かりました」

翔平の言葉に従って、金剛座乗の軍楽隊が、急ぎ後甲板に集合した。

水兵4

「駿河、動きます！」

見張り員が叫ぶと同時に、軍楽長がタクトを振り上げた

波を豪快に踏み分けて水道に向かう第三戦隊の戦艦群、駿河、常陸
次いで、第三航空艦隊の翔龍、瑞龍が続いて第二戦隊の紀伊、尾張、
第二航空艦隊の萃鶴、勇鶴が、巨体を滑るように進みだす。

翔平

「よし俺たちの番だな、抜錨、前進微速！」

続いて、第一戦隊の金剛、三笠、と第一航空艦隊の鳳翔、鳳凰も出
港していった

4月1日

太平洋

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「順調だな」

金剛

「そうね」

水兵1

「前方に積乱雲」

翔平

「・・・一雨来るな」

金剛

「そうね」

しばらくして

翔平

「むっ思ったより揺れるな。気象レーダー、雲の様子は？」

気象長

「特に変わった様子は・・・あ、いえ、雲量急増！」

気象長の声が少々うわずった、翔平が気になりスクリーンをのぞき込む。

翔平

「なんだ、こりゃ？」

スクリーンの上半分がみるみる白くなっていった。

翔平

「通信士、各艦へ緊急連絡！」

水兵2

「・・・電波状態不良、交信できません」

翔平

「なら、発行信号で連絡だ、急げ！内容は、各艦艦隊針路を維持せよ、だ」

水兵3

「了解」

金剛

「翔平、一雨どころの騒ぎではないようね」

翔平

「思ったより、荒れそうだな」

言うなり、横殴りの動揺が艦隊を襲った。

水兵4

「長官！前方に雷雲・・・竜巻の発生を確認！」

啓太

「なんだ、この絵に描いた様な、天災のフルセットは」

水兵5

「先頭艦、駆逐艦秋月、針路変更」

翔平

「続け」

艦長

「了解、機関全速、面舵」

水兵

「だめです、秋月、渦に飲み込まれます」

翔平

「なんだと」

水兵1

「本艦も、渦に飲み込まれます」

翔平

「総員何かにつかまれ！」

日本が世界に誇る大艦隊は、木の葉のように次々と渦に飲み込まれていった、その先にあるものは、

金剛

「白い・・・闇？」

明らかにおかしいその形容が、なぜか、金剛の頭の中に自然に浮かんだ。

数分後

金剛

「翔平、翔平」

翔平

「うん？うん、なんだったんだ、あれは？」

金剛

「分からないわ」

話しているうちに、艦橋の全員が目を覚ました

翔平

「急ぎ、全艦との連絡と、現在位置の確認を」

水兵 6

「了解」

金剛

「みんな無事かしら」

翔平

「今、連絡を取っている」

水兵 6

「長官、全艦、無事です」

翔平

「そうか」

水兵 7

「長官、GPSの信号が受信できません」

翔平

「アンテナの故障じゃないのか」

水兵 7

「いえ、すでに調べたのですが、故障はありません」

翔平

「ほかの艦は、どうなのだ」

水兵1

「今、連絡を取っているところです」

翔平

「そうか」

水兵1

「長官、確認しましたが、本艦と同じで、GPS信号が受信できないみたいです」

翔平

「なんだと!」

啓太

「ここは、一旦日本に寄港しませんか?」

翔平

「そうだな、全艦、進路変更」

艦長

「了解、面舵、機関全速」

数時間後

葵

「長官、日本領海に入りました」

翔平

「そうか、まだ呉基地は、応答しないか」

弘明

「はい、沈黙しています」

翔平

「そうか」

水兵

「長官、前方に大型艦」

翔平

「なに！米海軍か？」

水兵

「いえ、無線に応答しません」

翔平

「レーダー、照合だ」

水兵 8

「了解」

水兵 8

「照合不能・・・いえ、こいつは、旧海軍の金剛型戦艦？」

翔平

「はあ？」

水兵 1

「先頭艦、駆逐艦秋月より入電」

翔平

「内容は」

水兵 1

「我、不明艦より停船命令を受けた」

翔平

「全艦停止、ただし、本艦はこれより不明艦に接触する」

全員

『了解』

第五話 連合艦隊集結そして・・・（後書き）

ご意見 感想お待ちしております

第六話 帝国海軍艦艇改造計画

4月1日(?)

日本近海

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「あの艦は、なんだ？」

金剛

「分からないわ」

翔平

「話し合いで済みますよ」に

イージス戦艦金剛は、駆逐艦秋月に接近する不明艦の針路を邪魔するような針路をとっていた、

水兵

「長官！不明艦より発光信号！『こちらは帝国海軍所属 戦艦金剛。貴艦は日本帝国の領海を侵犯している。速やかに所属を連絡されたし。』です」

翔平

「こりゃ、本格的にやばいことになってきたな」

啓太

「長官、どうする？」

翔平

「どうするも、正直に答えるしかないだろう、発光信号用意！内容は・・・」

戦艦金剛

水兵

「不明艦より、発光信号！『こちらは日本海軍所属 イーリス戦艦金剛』です」

??

「い、いーじす？なんだ、それ？」

今、イーリスという言葉は疑問を持ったのは、岸本 鹿子治大佐、戦艦金剛の艦長だ

副長

「艦長、停船させて、武装解除しましょう」

岸本

「その手で行こう」

イーリス戦艦金剛

水兵

「長官！不明艦より再び、発光信号！『停船せよ』です」

翔平

「艦長、停船だ」

艦長

「りよ、了解、機関停止」

水兵

「機関停止」

イージス戦艦金剛は機関を止め、惰性で進んでいた

戦艦金剛

副長

「艦長、不明艦が停船しました」

岸本

「よし、臨検隊の準備だ」

イージス戦艦金剛

水兵

「内火艇、接近、臨検隊の模様」

翔平

「艦長、ラッタルを下ろせ」

艦長

「了解」

金剛

「翔平、どうするの？」

翔平

「・・・」

内火艇

水兵

「艦長、まもなく不明艦に乗り込みますが、」

岸本

「そうか、君は、あの艦をどう思う？」

水兵

「実に奇妙な艦だと、思います」

岸本

「君も、そう思うか」

水兵

「艦長は、あの艦が、アメリカの偽装艦だと思いますか？」

岸本

「アメリカはこんな、ことはやらん、それに、あの艦と後方の艦の艦尾には、旭日旗が、掲げられているし、さっきから向こうで波を切る音が聞こえる、たぶん10隻以上いる」

実際に、連合艦隊の各艦は、微速で、イージス戦艦金剛に接近していた

水兵

「艦長！不明艦のラッタルが下されています」

岸本

「そうか、よしラッタルから、不明艦の調査のため乗艦する」

イージス戦艦金剛艦橋

啓太

「長官、内火艇が接近してきます」

翔平

「じゃあ、行くか」

甲板に行こうとする翔平

葵

「長官！何処へいくのですか？」

翔平

「甲板に行く、お茶の用意を」

葵

「はあ？」

翔平

「じゃあ、そういうことで」

翔平は、数人の水兵を引き連れて、艦橋から駆け足で出て行った

イージス戦艦金剛甲板

岸本

「でかいな」

水兵

「はい」

金剛の甲板に上がった、臨検隊

岸本

「軽く、300mはあるな」

水兵

「誰かきます」

岸本

「うん？」

キイイツと扉が開き、そこから翔平たちが出てきた

翔平

「イージス戦艦金剛へ、ようこそ私がこの艦隊の、司令官林 翔平です」

岸本

「戦艦金剛艦長岸本 鹿子治です」

翔平

「立ち話もあれですからとりあえず艦内へどうぞ」

岸本

「は、はい」

イージス戦艦金剛長官室

翔平

「遠慮せずかけてください」

岸本

「失礼します」

翔平

「大佐、質問ですが、今日は何年何月何日ですか？」

岸本

「今日？1935年4月1日だ」

翔平

「・・・そうですか」

岸本

「長官、あなた方は、何者ですか？」

翔平

「・・・我々は、90年後の未来から来ました」

岸本

「長官、からかっているのですか？」

翔平

「・・・そうですか、大佐一寸ついてきてください」

岸本

「はい」

イージス戦艦金剛CIC

岸本

「これは・・・」

翔平

「ここは、戦闘指揮所です」

岸本

「戦闘指揮所？」

岸本が瞠目するのも、無理もない、岸本の目の前には、いかにも未來的な光景が広がっていた

翔平

「これで、私たちが未来から来たと、信じてもらえました？」

岸本

「確かに、この装備を見ればな・・・分かった、信じよう」

翔平

「ありがとうございます」

イージス戦艦金剛長官室

翔平は、これから日本で起こることを、連合艦隊のことを、岸本に話した

岸本

「日本が・・・米国と戦争をして負ける・・・」

翔平

「・・・そうです」

岸本

「そうか・・・あなた方は、これからどうするんですか？」

翔平

「私は、これからも、日本を守るために働くつもりです」

岸本

「日本を守るために？」

翔平

「はい」

岸本

「では、行きましょう」

翔平

「どこへ、ですか？」

岸本

「呉に」

翔平

「はい」

この会談の後、岸本は、戦艦金剛に、戻っていった

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「参謀長、各艦への回線を開いてくれ」

啓太

「了解」

翔平は岸本との会談の内容を、連合艦隊各艦へ伝えた

翔平

「・・・それで、これからも日本を守るために、一緒に働いてほしい、」

数分後

葵

「長官、全艦から、旗艦と行動を共にすると、返電が来ました」

翔平

「よし、戦艦金剛に信号」

水兵

「了解」

1分後

水兵

「長官、戦艦金剛から返信『我に続け』です」

翔平

「よし、艦隊の陣形を単縦陣にする」

弘明

「了解」

翔平

「艦長、戦艦金剛の後に続け」

艦長

「了解」

帝国海軍柱島泊地

戦艦長門の防空指揮所で二人の少女が、瀬戸内海を眺めていた
もちろん、この二人は、普通の人には見えない

??

「姉さん」

今喋ったのが、戦艦陸奥の艦魂の陸奥だ

??

「うん？なに」

今喋ったのが、戦艦長門の艦魂の長門だ

陸奥

「金剛さんが、もうすぐ帰ってくるよ」

長門

「例の、気象異常の調査が終わったの？」

この気象異常とは、連合艦隊が巻き込まれた、嵐のことだ

陸奥

「そうみたい、なんかお土産があるそうよ」

長門

「お土産？」

陸奥

「うん」

そのとき、汽笛の音が聞こえた

長門

「金剛さんが帰ってきたみたいよ」

陸奥

「あつ本当だ・・・っえ」

陸奥が戦艦金剛を見ていると、島影から連合艦隊旗艦イージス戦艦
金剛の艦体が姿をみせた

長門

「なに・・・あれは」

絶句する長門

陸奥

「と、とりあえず金剛さんの所に行こう」

長門

「わ、分かったわ」

戦艦金剛防空指揮所

長門と陸奥が驚いている頃、戦艦金剛の艦魂金剛は連合艦隊の駆逐艦秋月と二人でお茶を飲んでいた

秋月

「…というわけです」

金剛

「へーそうなの」

なぜか、すっかり仲良くなっている二人

長門

「金剛さん」

金剛

「あら、何の用かしら」

陸奥

「なにかつて、あの艦隊は、なんですか！」

金剛

「90年後の未来から来た艦隊」

長門

「へー未来から・・・どっかで頭打ちました？」

確かにこんな話をまともに聞きつける人はいない

金剛

「私は、至って正常よ」

陸奥

「なら・『あの』うん？」

秋月

「あの、私邪魔ですか？」

長門

「そつえば、あなた誰？」

秋月

「私は、連合艦隊の第一駆逐艦隊旗艦、駆逐艦秋月です」

秋月は椅子から、立ち上がり直立不動の態勢で自己紹介をした

長門

「本当なの、あなた達が未来から来たということは」

秋月
「はい」

イージス戦艦金剛艦橋

金剛

「翔平、」

翔平

「なに」

金剛

「翔平、私の艦名が、向こうとかぶることに気づいてる？」

翔平

「あつ・・・もちろん気づいてたさ」

金剛

「本当に？」

翔平

「もちろん、え〜と、新しい艦名は、播磨だ」

金剛改めて播磨

播磨

「今思いついたでしょう」

翔平

「ソナナコトナイヨ」

播磨

「まあ、いいわ」

4月2日

帝国海軍柱島泊地

イージス戦艦播磨長官室

との会議の結果、連合艦隊は、大日本帝国海軍に籍を置くことになった（指揮系統などは別）また、帝国海軍の艦船を改造すること、これから日本は、どうなるかを伝えた、帝国海軍は1936年に起こる二・二六事件を止めることと、陸軍の暴走を抑えることに頭を抱えていた、

翔平

「ふゝ疲れる」

播磨

「おつかれさま」

翔平

「一寸、宗谷に行ってくる」

翔平は、必要な書類を鞆に入れ扉に向かった

播磨

「送っていいこうか」

翔平

「頼む」

工作艦 宗谷

翔平

「ありがとう」

播磨

「どういたしまして」

翔平

「じゃあ、ちょっと親父と話してくる」

播磨

「え？なんで翔平のお父さんがいるの？」

翔平

「出港前日に、宗谷に来て、降り遅れたらしい」

播磨

「・・・」

翔平

「播磨、言いたいことは、分かる」

播磨

「わ、私は、艦に戻るわ」

翔平

「分かった」

工作艦 宗谷 設計室

設計室、ここは、文字どおり、艦船の設計をする部屋だ、そこで翔平の親父、林 武は、何やら嬉しそうに、パソコンに向かっていた

翔平

「親父、楽しそうだな」

武

「おお、翔平か、今ちょうど長門の改造図面ができたところだ」

翔平

「そうか」

林重工が、わずか5年で、連合艦隊、全艦を作り上げたのは、設計の早さからきている、

武

「今、伊勢の図面を作っている」

翔平

「やる気満々だな」

武

「いや、宗谷にも手伝ってもらってるからな」

翔平

「そういえば、宗谷は？」

武

「昨日は、徹夜だったからな、今自分の部屋で寝ている」

翔平

「そうか」

武

「あと3日もあれば、全艦艇の、図面ができるから」

翔平

「そうか、でも無理するなよ、もう歳なんだから」

武

「お前もな」

翔平

「分かっている」

武

「頼んだぞ、司令長官」

翔平

「はい、はい」

第六話 帝国海軍艦艇改造計画（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

第七話 運命の開戦

1941年10月23日

帝国海軍柱島泊地

ここ、柱島泊地は、今、艦艇で埋め尽くされていた、その中には、改名し第二連合艦隊となった旗艦の、イージス戦艦播磨、史実より早く、そして強力になって、生を受けた、第一連合艦隊旗艦、戦艦大和、武蔵、そして、強化された、長門、陸奥を始めとする、戦艦群、さらにその後方には、アングルドデッキに、なった、赤城、加賀、蒼龍、飛龍、さらに、新造空母の、翔鶴、瑞鶴がいた

イージス戦艦播磨 長官室

今長官室では、二人の人物が話していた

翔平

「山本さん、我々が来てしまったことで、今の日本は、史実よりやばいことになっています」

山本

「君たちのせいではない」

今話したのは、山本五十六大將だ

翔平

「ですが、日独伊三国同盟を結ばなかったことにより、独国は、英国と組みました、それによって、独国

は、全力でソ連と戦って、そのソ連は、今は、冬將軍の、支援を待っている有様ですよ」

山本

「そりゃひどいな」

翔平

「アメリカは、日本の海軍力に危機感を募らせているし」

山本

「確かに、今の日本の海軍力は、世界第二位だが、君らがいるから日本は、負けんさ」

翔平

「そうですが…」

山本

「それにだ、何ために、君達は、今までやってきたのかね」

翔平は笑い出してしまった

翔平

「はははっは、そうですね、ここまで来たら、あとは全力を尽くすのみです」

山本

「その通りだ、ところで、今日は、宴会を開く日だったな」

翔平

「はい、そうです」

山本

「そうか、おっと、もうこんな時間がそろそろ、おいたましよう」

翔平

「長官、今夜、播磨の、予備士官室で」

山本

「分かった」

イージス戦艦播磨 長官室

播磨

「翔平、そろそろ時間よ」

翔平

「そうか、じゃあ行くか」

播磨

「行きましよう」

イージス戦艦播磨 予備士官室

山本

「おっ長官遅かったな」

翔平

「そちらが早すぎるでは、ないでしょうか」

山本

「そうか？」

翔平

「そうです」

山本

「ふつ、まあ、そんなこと気にしない」

翔平

「じゃあ、始めますか」

山本

「そうしよう」

その時、扉が開き、武と啓太、葵が入ってきた

武

「翔平、遅れてすまん」

啓太

「ごめんな」

葵

「すみません」

ちなみに、堀井弘明は、現在、海軍省で勤務中であった

翔平

「やっと来たか、まあ、座って」

山本

「全員、集まったな」

翔平

「はい、人間、艦魂、全員集合しております」

山本

「よし、全員集まったということで、宴会を始める、皆今夜は無礼講だが、飲みすぎで、次の日は、二日酔いにならないようにな」

全員

『はい』

それから宴会が始まった、ちなみに、啓太と葵はなぜか、艦魂が見えるようになっていた

啓太

「将ちゃん、飲もうぜ」

翔平

「おう、任しとけ!」

数時間後

播磨

「翔平、そんなに飲んで大丈夫？」

翔平

「大丈夫だ、問題ない！！ヒック」

播磨

「全然大丈夫じゃないでしょう！」

啓太

「まあ、ヒック、播磨いいじゃねえか」

播磨

「参謀長も飲みすぎですよ」

翔平

「細かいことは気にするな」

啓太

「そうだ、そうだ」

まあ、こんなことをやっているうちに、ほとんどの、艦魂、人間が酔いつぶれてしまった

残っているのは、翔平、山本、武、播磨、大和、そして第二連合艦隊一の酒豪、空母萃鶴の六人だけであった、

山本

「こんな平和がいつまでも続けばいいんだが」

翔平

「そうですね、長官」

山本

「君たちが未来から、来なければ、今頃はこんなことはしてなかっただろうな」

翔平

「はい」

山本

「これから、どんな、事があっても我々は、この日本を守り続けよう」

翔平

「はい!!」

萃鶴

「長官、お酒もっとう」

翔平

「飲みすぎだぞ、萃鶴、お前一人で人の何倍飲むつもりなんだ？」

萃鶴

「えーと、・・・いっぱい」

翔平

「だめだこりゃ」

山本

「はっはっはっは」

こうして宴会も終わり、大日本帝国は、戦争という、嵐の中へと飲み込まれて行った

11月30日 単冠湾

ここには、史実の、第一機動部隊ではなく、第二連合艦隊の戦艦6隻、空母2隻、巡洋艦8隻、駆逐艦12隻、総合輸送艦4隻が、今まさに、真珠湾に向けて、出撃の時を待っていた、

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「いよいよだな」

播磨

「うん」

翔平

「それにしても・・・寒い」

啓太

「長官、全艦出撃準備完了です」

翔平

「そうか」

播磨

「翔平、外務省への連絡体制は？」

翔平

「その事なら大丈夫だ、宣戦布告したら、外務省から連絡が来る」

播磨

「そうそれなら大丈夫ね」

葵

「長官そろそろ」

翔平

「おう、分かった・・・第二連合艦隊全艦出撃せよ」

全員

『了解』

第二連合艦隊は、北太平洋の荒波を超えて、ハワイ真珠湾へと針路を向けた

12月8日（日本時間）

ハワイ諸島近海

第二連合艦隊旗艦播磨に「ニイタカヤマノボレ」二〇八という電文が届いた、在米大使官が、米国に宣戦布告通知書を渡し、同時に各マスコミに声明を発表したのだろう、

イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、真珠湾までの距離240kmです」

翔平

「よし、萃鶴、勇鶴に、発光信号！」

葵

「了解」

旗艦播磨から、の信号で、2隻の空母は、飛行甲板に並べられていた機体を、発進させていた、カタパルトから、F-22、F-2、E-2D、が発艦していた、

水兵

「長官、空母萃鶴、勇鶴から信号「ワレ、コウゲキタイノカイシユウチテンニムカウ、キカンノケントウヲキタイスル」以上です」

空母萃鶴、勇鶴、そして、護衛の駆逐艦8隻は攻撃隊の回収地点に向かった

翔平

「よし我々も真珠湾に向かうぞ、艦長！機関一杯、進路真珠湾へ」

艦長

「よーそろー」

第二連合艦隊は、真珠湾に針路をとった

第七話 運命の開戦（後書き）

作者「いよいよ開戦だ」

播磨「今回は、更新が早かったわね」

作者「その代わり、話が短いけどな、ハッハッハ」

播磨「一回、飛ばしてやるうかしら」

作者「なんか、聞こえたけど気にしない」

播磨「そう、じゃあ、心の準備はいいわね」

作者「えっ・・・冗談デスヨネ・・・」

播磨「残念ながら、冗談ではないわ」

播磨の46センチールガンが、作者に照準を合わせる

作者「オ、オチツキマシヨ」

播磨「こんの・・・バカ作者ッ！」

作者「ギヤアアアッ」

播磨「やりすぎたかしら、うん？」

作者の落としたプリントを播磨が拾って読む

播磨「え」と、作者は来週から期末考査に入るそうです・・・ということは、小説の更新できないことなの・・・えっ戻ってきて説明しなさい、作者」

ご意見、ご感想お待ちしております。

第八話 真珠湾奇襲

12月8日（日本時間）

真珠湾

現在真珠湾に近い空域には、第二連合艦隊の艦載機であるF-22、80機、F-2、60機、E-2D、6機が編隊を組み、真珠湾に近づいていた、攻撃隊の隊長は山口昇中佐である、

山口

「そろそろ見えるはずだが」

??

「隊長見えてきました」

今喋ったのは、二番機の木之本哲也少佐だ

山口

「いよいよだ、各機打ち合わせ道理にやれよ」

全員

『了解』

山口

「全機攻撃開始」

全員

『了解』

山口は、機体を旋回させ、攻撃目標のヒツカム飛行場へと向かった
30分後、真珠湾は、地獄に変わっていた、艦船は、沈み、飛行場の滑走路には大穴があいていた、無事な所は、燃料タンク群と3隻の戦艦と駆逐艦数隻であった、

戦艦メリーランド 艦橋

「抜錨だ！急げ、ジャップの戦艦が来るぞ」

ここ、戦艦メリーランド艦内は、大慌てで出港準備をしていた

「艦長、ジャップの戦艦は、どうやら新型のハリマクラスの模様です」

「何！じゃあ、あのGF2が来てるのか！？」

米国を、始め、連合国軍は第二連合艦隊の事は名前だけは、知っていた、

「艦長どうしますか？」

メリーランドの副長が尋ねる

「このまま、いてもただの的だ、出港する」

「アイアイサー」

10分後戦艦メリーランドは、生き残った、戦艦テネシー、カリフォルニア、駆逐艦数隻を連れて、真珠湾から出港した、

イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、主砲射程内に入りました」

今、第二連合艦隊は、真珠湾から120キロ離れた海上を、航行していた

翔平

「よし、全戦艦砲撃開始！弾種榴弾！目標燃料タンク群！」

艦長

「撃ち方始め！！撃~~~~っ！！」

カツ ズドオオオン

播磨の主砲の先の方が光り、光線を放った

翔平

「そういえば、レールガンに変わったんだよな」

播磨

「そつよ」

カツ　ズドオオオン

翔平

「早いな、まだ5秒も経ってないぞ」

播磨

「日本の技術の結晶ね」

翔平

「そうだな」

カツ　ズドオオオオン

レールガンが3回目の光線を放った

戦艦メリーランド　艦橋

「なんだ！？何が起こった」

あわてる艦長理由は、いきなり真珠湾の燃料タンク群が凄い勢いで燃え始めたからだ

「わ、分かりません、しかし見張り員からの報告では西の方から青白い光が見えたそうです」と報告する

副長

「西？その方角は、ジャップの艦隊がいる方向だが、偵察機からの

報告だと100キロ以上距離があるはずだ」

艦長は疑問に思う

「ロケットかもしれません」

副長が言う

「うむ、そうだとしても、このままでは、真珠湾は、もっとひどいことになるぞ、」

艦長が言う

「はい、急ぎましょう」

と副長

「機関室、出せるだけでいい、罐をめいっぱいたいてくれ」

戦艦メリーランドの速力は23ノットに近づいていた

イージス戦艦播磨

葵

「長官！E-2Dから報告！真珠湾から戦艦3隻を含む艦隊が出港したそうです」

翔平

「そうか、・・・よし艦隊決戦だ、」

啓太

「やるんか？」

翔平

「そつだ、」

啓太

「よつしゃ、操艦の事なら任せてや」

翔平

「なんで、そんなに気合が入るんだか？」

播磨

「さあ？」

翔平

「とりあえず、最大戦速」

啓太

「よくそろ、最大戦速」

オワフ島近海

戦艦メリーランド 艦橋

「敵艦隊視認！戦艦6いや10？」

これは、播磨に、随伴する巡洋戦艦天羽を戦艦と見間違えたのだ

「戦艦が10隻！？」

呆然とするメリーランド艦長

「か、艦長」

副長が艦長に話し掛ける

「くそ、差し押さえてでも一隻は貰っていくぞ」

艦長の決意に艦橋が凍りついた

「か、艦長？！正気ですか」

副長が尋ねる

「ああ、俺は、正気だ、」

艦長が答える

「了解しました」

イージス戦艦播磨 艦橋

葵

「CICより報告、敵戦艦、針路変更！巡洋戦艦十六夜に艦首を向
けました」

翔平

「何！体当たりする気か、啓太！針路変更だ、急げ！！」

啓太

「了解！面々舵、機関一杯」

艦長

「よゝそろゝ」

翔平

「間に合えよ」

イージス巡洋戦艦十六夜

??

「く、ぶつける気か、取舵一杯！最大戦速！」

今喋ったのは、イージス巡洋艦十六夜艦長、山崎雄哉大佐だ

副長

「了解」

巡洋艦十六夜は、急速に針路を変えたが、敵戦艦メリーランドの主
砲弾が命中した

十六夜

「くっ……このくらいで……私は、死にません」

雄哉

「被害報告急げ」

副長

「後部甲板エレベーターに被弾！甲板直下の艦載機格納庫大破！火災発生！現在全力で消火中です」

雄哉

「そうか、浸水は？」

副長

「ありません」

機関長

「艦長！」

機関長の大西秀介中佐があわてて、報告をしだした

雄哉

「どうした！？」

秀介

「今の衝撃で、燃料タンク破損、安全のため、主機関を止めます」

巡洋戦艦天羽型は、イージス戦艦播磨と同じ純水素タービンエンジンを、使用している、水素燃料の引火

点が低く、爆発の恐れがあるために、機関長は主機関を止めたのだ
った

雄哉

「なんだと！」

秀介

「現在、副機関のディーゼルエンジンを起動しましたが、現在の出
せる速力は半分の32ノットです」

雄哉

「そつか……………反撃だ、主砲射撃始め、目標敵戦艦、艦橋」

砲雷長

「了解、主砲射撃始め、目標敵戦艦、艦橋…射撃準備完了」

十六夜の30センチレールガンが、回頭した

雄哉

「撃ち方始め！！撃……………！！」

カッ ズドオオオン

十六夜の主砲が9本の光線を放った

砲雷長

「敵戦艦艦橋に命中確認」

副長

「敵戦艦、速力低下」

雄哉

「よし、火災の方は？」

副長

「あと、10分ほどで消火する見込みです」

雄哉

「そうか」

戦艦メリーランド

その頃メリーランドは、大混乱であった、艦橋が被弾し艦長以下、艦橋に居たものは、全員戦死し、おまけに米旧式戦艦独特の籠型マストは折れて指揮系統が麻痺していた、その艦橋に艦魂が一人転移してきた、

??

「メリーランド、大丈夫ですか!!」

メリーランド（以下長いのでメリー）

「…テネシー…さん」

どうやら、メリーが心配で飛んできたみたいだ

テネシー

「手当てしなきゃ」

その頃、テネシーが降伏し、それに続いてカリフォルニア、メリーランドも降伏した、各戦艦の乗組員は、生き残った駆逐艦に全員を乗せオアフ島に帰還させた、

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「さて、捕獲した戦艦をどうするか・・・そうだ神戸がいるじゃん」

播磨

「そうね、ちょうど3隻がきてるはずよ」

神戸とは、呉型自走浮きドックの小型のドックであり艦隊随伴型でもある、補給艦隊として、もうじき来るはずだ、ちなみに、呉型が出せる速力は、25ノット、神戸型は35ノット出せる

翔平

「さて、じゃあ、合流地点まで曳航するか」

播磨

「疲れそうね」

翔平

「播磨、十六夜の所まで連れていてくれ」

播磨

「いいわよ」

イージス巡洋戦艦十六夜

雄哉

「十六夜、大丈夫？」

十六夜

「大丈夫よ」

雄哉

「そうか、よかった」

十六夜

「誰か来たみたいよ」

雄哉

「誰が？」

翔平

「邪魔するよ、おっと山崎艦長もいたのか」

雄哉

「長官！いつ本艦にいらしてっただんですか」

翔平

「何時って、ついさっきだけど、十六夜大丈夫か？」

十六夜

「大丈夫です、長官私のためにわざわざ来たんですか？」

翔平

「そうだけど？」

十六夜

「ふっ、そうですか」

翔平

「一体どうしたんだ？」

雄哉

「長官、そろそろ仕事に戻った方がいいと思いますよ」

翔平

「なんで」

雄哉

「清水参謀長が、「分かった、今すぐ戻る、播磨……っっていない」……」

翔平

「十六夜……」

十六夜

「分かりました、送りましょう」

翔平

「ありがとう」

こうして真珠湾奇襲は成功し第二連合艦隊は空母部隊との合流地点

に向かった

第八話 真珠湾奇襲（後書き）

作者「テスト期間中なのに更新だ」

十六夜「今日のテストはどうだったの？」

作者「オワタ」

十六夜「ちなみに明日は」

作者「はっはっは、聞かないでくれ」

播磨「え」と明日は、作者の苦手な英語みたいよ」

作者「え……なぜそれを……」

十六夜「英語くらいでできなきゃいけません、こっちに来なさい」

作者「え、だ、誰か助けてくれ」

作者は十六夜に襟首をつかまれて部屋に戻った

播磨「ご意見、ご感想お待ちしております」

第九話 合流

12月9日

イージス戦艦播磨 長官室

翔平

「・・・」

作戦報告書黙読中だ

翔平

「・・・よし、上々だ」

その時、長官室の扉がノックされた

翔平

「どうぞ・・・どなたですか？」

翔平は長官を任されてから、ほとんどの、人、艦魂と話してきたので、顔は覚えていた、が入ってきた、少女は、全く見たことがなかった

テネシー

「私は、戦艦テネシーの艦魂テネシーです」

翔平

「テネシーさん何か御用ですか？」

テネシー

「この、艦隊の司令官に挨拶をと、・・・あなた本当に司令官？」

ガッタン

翔平

「な、何を言ってるんですか」

テネシー

「若すぎる」

翔平

「・・・俺は、正真正銘、この第二連合艦隊の司令長官です」

テネシー

「・・・」

その時、播磨がやってきた

播磨

「翔平、神戸達が来たわよ・・・誰？」

翔平

「そうか、播磨、テネシー、最上甲板に行くぞ」

播磨

「ちょ、ちょっと待ちなさい」

テネシー

「あゝ」

播磨

「うん？あなた誰？」

テネシー

「テネシーです」

播磨

「へーあなたが、私は、播磨この艦の艦魂よ」

イージス戦艦播磨 最上甲板

翔平

「来たか」

補給艦隊が護衛の駆逐艦に守られてやってきた

翔平は、艦内電話を取り、艦橋へ連絡した

翔平

「・・・艦長、対潜、対空警戒を厳重に、・・・よし分かった」

播磨

「翔平」

翔平

「播磨か」

テネシー

「長官、何をするつもりですか？」

翔平

「見たらわかる、テネシーあの艦はなんだと思う」

テネシー

「特大の油槽艦ではないのですか」

播磨

「翔平、横から見たら誰だって油槽艦だというわよ」

翔平

「あたりまえだ、そう思うように設計されているんだから、テネシーあれは、浮きドックだ」

テネシー

「え〜〜」

自走浮きドック神戸 艦橋

今神戸は、鹵獲艦メリーランド後方800mまで接近していた

水兵

「艦長、目標艦まで800を切りました」

艦長

「速度5ノット、針路このまま、ドック注水」

水兵

「ようそろ」

神戸のドックが注水された

水兵

「ドック注水完了、目標艦まで500」

艦長

「機関停止」

神戸の機関が止まり、惰性で進んでいた

水兵

「目標艦まで100」

艦長

「ゲート開け」

水兵

「ゲート開きます」

神戸のゲートがゆっくりと開かれた

水兵

「目標艦まで50…40………10…入渠確認」

艦長

「機関後進、速度2ノット」

神戸が後進をかけて、停止した

艦長

「機関停止、ゲート閉め、艦固定」

水兵

「よゝそろゝ」

戦艦メリーランドの艦体が固定された

水兵

「艦固定完了」

艦長

「ドック排水、作業員作業開始」

鹵獲艦メリーランドに続いてテネシー、カリフォルニアもドック入りし改装が始まった

翔平

「テネシー、驚いたか？」

テネシー

「正直、日本がこんなに技術が高いとは思わなかったです」

翔平

「そうか、そりゃあ、そうだよな、」

何やら一人で納得していた

テネシー

「？」

翔平

「テネシー、この艦の中は自由に見学していいが、迷うなよ」

テネシー

「長官は、私をバカにしているのですか」

翔平

「いや本気で言っている、本艦は上下12層に分かれている、しかも各層が、2000くらいの区間に区部されているから、迷子にならない方がおかしい」

テネシー

「・・・」

播磨

「どうしたのテネシー」

テネシー

「あ、いや複雑すぎでは、ないでしょうか？」

翔平

「そつだな、よく迷子になるやつもいるくらいだ」

テネシー

「水兵泣かせの艦ですね」

播磨

「なによ、それ」

翔平

「はっはっはっは」

その後、第二連合艦隊は、補給をしてウェーク島攻略支援のため、艦隊を分散した、日本に帰還する艦は、日本に針路をとり、本隊から離れていった

イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、強襲揚陸艦新宿より無線連絡です」

新宿とは、第二連合艦隊が未来から持ってきた艦の一隻であり艦内には、L C A C 4 隻、20式戦車20輜、155mm自走砲20輜、諸車両100輜が、積み込まれている

翔平

「うん、私だ」

??

「長官、支援に感謝します」

無線の向こう側で話しているのは、上陸隊隊長の野村純平大佐だ

翔平

「早いところ、終わらして次に行きましょう」

純平

「分かりました」

無線が切れた

翔平

「10分後に砲撃を開始する」

全員

「了解」

10分後

翔平

「全艦砲撃開始」

艦長

「撃ち方始め！！撃つ！！」

カツ
ズドオオオン

ドン
ドン
ドン

播磨を始めとする戦艦隊から駆逐艦部隊の秋月までの全艦が砲撃を

していた

播磨

「このままだと、島の形が変わっちゃうわよ」

すでに砲撃を開始して20分が経っていた

翔平

「ふっ、そうだな、砲撃止め、上陸開始」

啓太

「了解」

この上陸作戦は成功の内に終わり、第二連合艦隊は帰投した

第九話 合流（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております

第十話 フィリピン攻略

12月11日

フィリピン沖

現在フィリピン沖120キロの海上には、戦艦大和を旗艦とする第一連合艦隊がいた、

旗艦 戦艦大和 艦橋

山本

「向こうの作戦は、大成功だったようだな」

宇垣

「はい」

水兵

「電探室から報告！接近中の航空機あり！偵察機の様」

山本

「林君からもらった、誘導弾を試すか」

宇垣

「はい長官、一式対空誘導弾発射用意」

砲術長

「了解、一式対空誘導弾発射用意、電探と連動！」

大和に配備されている、一式対空誘導弾は、大和以下主力艦に配備されている、ちなみに、大和型戦艦は、史実とは違い、51cm砲を9門、完全防御方式を採用している、大和型と同じように、長門型もワンランク上の主砲つまり46cm主砲9門を搭載し、ほかの戦艦は41cm砲9門に統一されている

水兵

「電探と連動、目標補足」

砲術長

「発射」

ゴウウウ

誘導弾は轟音を立てて、敵機に向かって飛んで行った

宇垣

「長官、誘導弾は当たるんでしょうか」

山本

「分かん、だが未来では、こういった兵器が使われている」

宇垣

「恐ろしいものですね」

山本

「そうだな、だが誘導弾を使いこなせれば、空襲にもびくつかなくて済む、もしこれがだめでも、今日の艦は対空火器の城だ」

宇垣

「そうですね、対空火器の方は兵たちも慣れております」

水兵

「敵機視認、……………誘導弾命中確認！」

山本

「うまくいったようだ」

宇垣

「はい」

水兵

「長官、誘導弾命中の前に敵機からの電波を観測しました」

山本

「どうやら、招待されない客が来そうだ」

宇垣

「戦闘機部隊をだしますか？」

山本

「ああ、そうしてくれ、後ろの輸送船隊はどうしても守らなければ

な」

宇垣

「はい、各空母に打電、護衛戦闘機隊発艦せよ」

現在第一連合艦隊には、第二連合艦隊の空母鳳翔、鳳凰の二隻が派遣されていた

空母鳳翔、鳳凰の飛行甲板からF・22ラプター発艦した、

空母赤城 防空指揮所

??

「F・22ラプターか、日本名を考えないとね」

??

「ふつ、そうね、赤城」

赤城

「加賀、何時の間に」

加賀

「今来たところよ」

赤城

「さて、どんなのがいいかしら」

加賀

「そうね」

??

「なにをしてるんだ？」

赤城

「小沢、艦橋に居なくていいの」

小沢

「いいんだよ、ところで何をしてたんだ？」

加賀

「ラプターの日本名を考えていたところです」

小沢

「そうか、で何にするんだ？」

赤城

「まだ考えている途中です」

小沢

「じゃあ一緒に考えよう」

加賀

「いいんですか、作戦の途中ですよ」

小沢

「おっと、そうだった、また後でな」

小沢中将は、艦隊指揮のため、艦橋に戻っていった

赤城

「さて考えるか」

赤城からも、防空戦闘機の零戦52型が飛び立っていった、この零戦52型も史実とは違い、F6Fなら互角に戦える性能を持っていた、

旗艦 戦艦大和 艦橋

宇垣

「長官、戦闘機隊の発艦完了しました」

山本

「そうか」

水兵

「電探室より報告、敵機来襲！数約80機」

山本

「対空戦闘用！意！」

宇垣

「長官、戦闘機隊が全部落としますよ」

山本

「いや、あらかじめ、10分の1は残すように言っている」

宇垣

「なぜですか？」

山本

「まだ、速射砲や機関砲の操作に慣れていない者もいるからな、訓練は十分したが、実戦と訓練違うからな」

宇垣

「そうですね」

B - 17を含む攻撃隊は第一連合艦隊近づきつつあった

爆撃機機長

「偵察機からの報告だとこの辺のはずだが」

戦闘機隊隊長

「敵戦闘機接近！な、速い！」

ゴ——、F - 22が高速で敵攻撃隊に接近し、攻撃を開始した
F - 22の20ミリ機関砲が命中し米軍のP - 40は、爆散した、
F - 22が護衛戦闘機の相手をしているうちに、零戦52型がB - 17に挑んでいた

零戦のパイロットはB - 17を半分撃墜したところで、旗艦戦艦大和から通信が入った

『旗艦大和より、戦闘機隊へ、これより本艦は対空戦闘を行う、至急退避せよ』

戦闘機隊は、敵機から離れ米軍搭乗員は、疑問に思ったが目の前の、大艦隊が見をみると、そんな疑問は、飛んで行った。

爆撃機隊 隊長

「あの、でかいやつをやるぞ、全機ついてこい」

旗艦 戦艦大和 艦橋

砲術長

「主砲射撃用意！電探と連動、弾種三式弾」

大和の51cm主砲が敵機に照準を定める、ちなみに三式弾は近接信管になっている

水兵

「射撃準備完了」

砲術長

「撃ち方始め！！撃~~~~っ！！」

ズドオオォーン

三式弾は、見事に敵機の周辺で炸裂し、10機のB-17のうち、7機がジユラルミンの塊となって落ちて行った

砲術長

「ちっ、まだ残ってるな、127mm速射砲射撃開始！」

大和に装備された、速射砲が敵機に照準を定め射撃を開始する

ドン、ドン、ドン

砲弾が敵機に命中した

山本

「これほどの命中率とは」

宇垣

「はい、私もこれほどまでとは思いませんでした」

山本

「よし、マニラへ急ぐぞ」

宇垣

「了解」

その後、第一連合艦隊は、マニラを砲撃しマニラを占領し、マツカ―サー元帥は、捕虜となり、その後捕獲した輸送艦で、米本土へと送られた。

第十話 フィリピン攻略（後書き）

作者「更新！」

播磨「作者が壊れた」

作者「はっはっは」

播磨「次回の更新はいつになるのかしら」

作者「分らん！」

十六夜「へー、私を被弾させておいてね」

作者「げっ・・・（十六夜がなぜここに）」

十六夜「・・・何回死にたいですか？」

作者「できれば生涯で一回がいいな」

言い終わると同時に、全力で逃げる作者

十六夜「逃がしません」

十六夜も全力で作者を追いかけた

播磨「・・・ご意見ご感想お待ちしてます」

第十一話 シンガポール攻撃

1月12日

ブルネイ

現在ブルネイでは、第一、第二連合艦隊が集結していた、第一連合艦隊の艦艇はブルネイ産の石油で腹を満たしていた、

第一連合艦隊旗艦 戦艦大和

山本

「林君、いよいよシンガポールを攻略するぞ」

翔平

「いよいよですか」

山本

「陸軍が新型戦車配備が完了したからな」

翔平

「一式中戦車の事ですか？」

「いまでてきた、一式中戦車とは、第二連合艦隊の技術が提供され生まれた、中戦車であり、M4なら、互角以上に戦える性能を持っている」

山本

「3日後に出撃する予定だが、英独東洋連合艦隊の陣容は、分かるか」

翔平

「はい、暗号無線解読、偵察機による航空写真で確認しましたが、大艦隊です、英戦艦2隻、独戦艦2隻、英戦艦はキングジョージ5世型が2隻、独戦艦はビスマルク型だと思われます、ほかに

は、英巡洋戦艦フッド、レパルス、レナウン、独巡洋戦艦シャルンホルスト型が2隻他巡洋艦、駆逐艦多数・・・どう思います山本長官、ヒトラーは何を考えているのでしょうか？」

山本

「確かに、英国ならまだしも、独国の艦隊は、これは独海軍の水上艦艇の8割以上だな」

??

「大方、英国のチャーチルに対抗したんでしょう」

翔平

「うわ！や、大和急に出てきて、びつくりするじゃないか」

大和

「別に驚かしたつもりは、有りませんけど」

山本

「いきなり出てきたら、どんな人間でも驚くさ」

翔平

「うん、そうだぞ大和」

大和

「そうですか、これから気負つけます」

山本

「よし三日後に出撃する、大和も各艦魂に伝えてくれ」

大和

「宜候」

大和は光とともに消えていった

翔平

「では、長官私も準備があるんで」

山本

「揺動の方は頼んだぞ」

翔平

「任してください」

1月15日

第一、第二連合艦隊は出撃した、なお第一連合艦隊の第二戦隊つまり、扶桑、山城、伊勢、日向は、護衛の巡洋艦、駆逐艦にも守られ本土防衛のために帰還した、これは、第二連合艦隊の常陸が、ここ最近で米国の無線情報が活発化しているのを、キャッチしたからだ、

第二連合艦隊旗艦 イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「順調だ」

播磨

「そうね」

水兵

「ソナーに感あり、11時方向」

翔平

「対潜戦闘用意！数は」

水兵

「一隻です」

翔平

「友軍ではないのか」

水兵

「いえ、この音は、たぶんUボートです」

翔平

「そうか、駆逐艦秋月に打電、五式対潜ミサイル発射だ」

水兵

「了解」

駆逐艦秋月

艦長

「旗艦から発射命令が来たぞ」

砲雷長

「はい！五式対潜ミサイル発射用意」

水兵

「VLS、五式対潜ミサイル、データ入力完了！」

艦長

「発射！」

グワツ　ズツシャアア——

砲雷長

「五式対潜ミサイル、目標に向かって飛翔中」

水兵

「敵潜からの電波を受信しました」

艦長

「旗艦へ報告」

水兵

「宜候！」

イージス戦艦播磨　艦橋

翔平

「そうか、シンガポールの飛行場には航空機何機あった？」

葵

「えーと、重爆撃機が60機、軽爆撃機が40機、戦闘機多数だそうです」

翔平

「ほー、英国も結構やるな」

播磨

「そつね」

葵

「長官、なんで他人事みたいに言っているんですか!」

翔平

「え、……………なにが?」

播磨

「まあまあ、参謀落ち着いて」

葵

「播磨! 貴女もです!」

播磨

「え、……………私ちよつと、鳳翔の所に行ってくる」

翔平

「へ!? 播磨なら俺も行……………措いてかれた」

葵

「長官」

翔平

「う……………(播磨後で覚えてろよ)」

こうして、翔平は、清水参謀長の説教を小一時間ほど聞かされた、

啓太

「長官、偵察に出ていた幻夜が敵の大編隊を発見しました、てつ、

長官まだ怒られてたんですか」

幻夜とは、E-2Dの日本名だ、

翔平

「そんなことは、どうでもいい、何機見つけたんだ!」

啓太

「はっ、敵爆撃編隊接近! 数約140」

翔平

「来たか、各空母に連絡、攻撃隊発艦せよ」

啓太

「宜候」

空母 鳳翔 飛行甲板

鳳翔

「久しぶりの出番だ」

鳳凰

「そうね」

播磨

「敵が来たみたいよ」

鳳翔

「くくく」

鳳凰

「どうしたのよ」

鳳翔

「全機発艦！敵を蹴散らせ！！」

鳳凰

「・・・（変なスイッチが入ったみたいね）」

この会話の間に攻撃隊の音神という名になった、F-22、さらに蒼山という名になったF-2、がシンガポール攻撃のために飛び立っていった、

イージス戦艦播磨 C I C

攻撃隊が発艦して30分後、播磨の電探が140機の編隊を探知した水兵

「対空レーダーに感、機影多数発見！戦闘機30、大型爆撃機60、小型爆撃機40、本艦隊に向かって急速接近中！接敵まで約1時間です」

砲雷長

「対空戦闘用意！」

ウ~~~~、ウ~~~~、ウ~~~~

警報が艦隊のいたるところで鳴り響いていた

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「全艦対空戦闘用意！一式対空ミサイル、射程圏内に入り次第発射せよ、ただし、発射弾数は、全艦5発までだ、いくらこの時代でも、弾薬の生産ができるように、なったとはいえ、まだ大量生産ラインに乗っていないからな」

日本各地で増設された、兵器工場で、各種ミサイル、砲弾、機関砲弾などを増産体制を調経つつある。

啓太

「了解、各艦へ、連絡します」

このことが、各艦へ連絡された、

イージス戦艦播磨 CIC

水兵

「敵編隊、一式対空ミサイルの射程圏内に入りました」

ちなみに、一式対空ミサイルの射程距離は、200kmだ

砲雷長

「一式対空ミサイル発射用！意！弾数5！後部VLS発射用意！VLS発射用！意、イルミネーター連動！」
リンク

砲雷長

「発射5秒前、4…3…2…1…発射」

グワツ ズツシャアアア——

白い煙を噴き上げて発射される、一式対空ミサイル、その数は、90本、90本の矢が今、敵編隊に襲いかかろうとしていた。

水兵

「一式対空ミサイル着弾まで5秒…3…2…1…着弾！」

砲雷長

「敵編隊90機を撃墜、敵残機50機」

水兵

「敵編隊針路変えません、接敵まで残り30分、まもなく主砲の射程圏内に入ります!」

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「全艦主砲射撃用意!」

46センチレールガンの射程は120キロ、もちろんいくら優秀なレーダーがあっても、そう簡単に命中するわけない

播磨

「翔平、こんなに遠くからじゃ、私も充てる自信はないわよ」

翔平

「それは承知の上さ、射撃は、距離が8万になったら射撃開始」

艦長

「宜候」

イージス戦艦播磨 CIC

砲雷長

「主砲射撃用意!弾種三式弾!」

水兵

「データ入力、距離8万1千、射撃準備完了!」

砲雷長

「距離8万で射撃を開始せよ」

水兵

「宜候:距離8万撃ち方用意!」

砲雷長

「主砲、撃ち方始め、撃つ!」

カッ　ズドオオオーン

播磨の主砲の先の方が光り、光線を放った

上空

英爆撃隊は、先ほどまで順調に飛行していたが、先ほどの攻撃「？」によって既に90機を失っていた、

爆撃機隊　隊長

「くそ、何故だ、何故いきなり90機も墜落したんだ！！」

その時、米軍から貸し出された、B-17の機体が大きく揺れた

爆撃機隊　隊長

「なんだ、何がおこ『ドーン』……」

後方を飛んでいたB-17が爆散した

爆撃機　機長

「隊長！、後方を飛んでいた、B-17がやられました、本機も第一エンジンがやられました」

レールガンの斉射で編隊の半分つまり20機前後が墜落した、ほかの機体も、少なからずの損傷を受けていた。

爆撃機隊　隊長

「くつ、全機基地へ帰投せよ」

英爆撃隊は、第一連合艦隊を見ることがなく基地へ帰投したが今その基地が攻撃を受けている最中であつた。

シンガポール要塞

英軍兵1

「段幕を密にしろ！くそ、あんなに敵機が速いなんて聞いてないぞ、情報部は何をしていた！」

英軍兵2

「くつ、銃身が焼ける、水だ」

英軍兵3

「おい、弾もつてきてくれ、急げ！」

英軍兵4

「くつ、何が優秀なドイツの高射砲だ、全然当たらないじゃないか」
シンガポールには、英、独、米の混合部隊が必死に、弾幕を張っていた。だが音神が速すぎて、照準が全然合ってなかった。

英軍兵1

「ああ、飛行場が……」

この時すでに飛行場には大穴があき、燃料タンク、弾薬集積所で誘爆が起こっていた、

英軍兵4

「敵機が引き揚げます」

音神と蒼山は風のように母艦に帰って行った。

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「そうか、シンガポールに艦隊はいなかったか」

啓太

「長官、第一連合艦隊から入電です！」

翔平

「内容は？」

啓太

「え、本艦搭載電探二感アリ、英独東洋連合艦隊ト判断ス、コレヨリ本艦隊ハ。敵艦隊 二、突撃セントス』以上です」

翔平

「そうか、艦隊を分けるぞ、第一、第二、第三航空戦隊は、第三、第四、第五駆逐艦隊とともに、北へ退避、ほかは、全部ついてこい」

啓太

「宜候」

翔平

「さて、艦隊決戦と行きますか、全艦最大戦速」

播磨以下戦艦5隻、巡洋戦艦6隻、駆逐艦12隻は、50ノットを超える速度で、敵艦隊との会敵予想地点に向かった。

第十一話 シンガポール攻撃（後書き）

作者「ふう、疲れる…」

播磨「こんな程度で疲れてどうするの作者」

作者「やってゝ、冬休みに入っていないのに、冬休みの宿題が出たんだぜ」

播磨「もうやってるの？」

作者「当たり前だ、このままじゃ冬休み遊べないからな」

十六夜「へゝ遊ぶんですかゝ更新じゃなくて」

作者「もちろん遊ぶに決まって…十六夜さんいつの間に」

十六夜「・・・心の準備はいいですか？」

作者「よくない！播磨助けてっていない！」

十六夜「さようなら・・・」

作者「ナイフはいいとしても、レールガンは人に向けたら、ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア」

十六夜「ご意見、ご感想お待ちしております」

第十二話 マレー沖海戦

1月15日

マレー半島沖

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

現在大和以下第一連合艦隊は、英独東洋連合艦隊に向けて針路をとっていた、

山本

「敵艦隊との距離は」

宇垣

「約6万です」

山本

「そうか、距離4万になり次第砲撃開始だ」

宇垣

「了解」

山本

「第二連合艦隊はこの海戦に間に合うかな」

宇垣

「どうでしょう、第二連合艦隊の戦艦は50ノットを超えるそうですね」

山本

「そうだ、俺も一回、演習につきあったことがあるが、あれは高速戦艦の枠を超えている早さだった」

宇垣

「そうですね、本艦も未来のエンジンの採用により、最大速力は35,46ノットを出せる高速戦艦ですが、本艦と比べたら、播磨型

は化け物ですよ」

山本

「それもそうだな」

水兵

「電探に感あり、偵察機の模様、まもなく一式対空誘導弾の射程に入ります！」

艦長

「一式対空誘導弾発射用意！」

砲術長

「宜候、一式誘導弾発射よーい、電探と連動！」

水兵

「電探と連動、目標補足」

砲術長

「発射」

グワツ　ズツシャアア——

誘導弾は轟音を立てて、敵機に向かって飛んで行った

水兵

「一式対空誘導弾着弾まで5秒…3…2…1…着弾！」

水兵

「敵機撃墜、確認！」

山本

「ほう、結構なれたみたいだな」

宇垣

「そうですね」

艦長

「現在、敵艦隊との距離4万8千を切りました」

山本

「全艦砲撃戦用意！目標、英独東洋連合艦隊」

宇垣

「宜候！」

砲術長

「砲撃戦用意！」

水兵

「主砲、電探と連動：よし！」

水兵

「光学照準いつでも行けます！」

砲術長

「弾種徹甲弾！射撃用意！」

大和の主砲に51cm徹甲弾が装填される

水兵

「射撃用意よし！」

砲術長

「距離4万まで待機せよ」

水兵

「了解」

水兵

「距離4万2千」

砲術長

「まだだ」

水兵

「距離4万1千・・・距離4万！」

山本

「艦長。撃ち方始めだッ！」

艦長

「撃ち方始めッ！」

砲術長

「撃ええー！ッ！」

ズドオオオー！ッ！！

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 CIC

翔平

「始まったな」

播磨

「始まったわね」

翔平

「艦長、あと何分で射程圏内に入るか」

艦長

「あと約5分です」

翔平

「そうか」

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェールズ

水兵

「敵艦隊発砲ッ!!」

見張り員の報告に防空指揮所にいたウェールズが笑う。

ウェールズ

「ふん。あんな距離から当たるもんですか」

ヒュウウウーーンッ!!

ズシュウウウーーンッ!!

ズシュウウウーーンッ!!

この時、プリンス・オブ・ウェールズ以下の戦艦は主砲塔を右舷側へと旋回中であつた。

同航戦の体勢となつた敵の単縦陣へと主砲塔を向けてたのだ。

そこへ、四隻から放たれた砲弾36発が時間差をつけて落下してきた。

それらは、一瞬で海面を沸騰させ、巨大な水柱を立ち上げた。しかも――

ウェールズ

「初弾から夾叉ですってッ!!」

ウェールズは愕然とした。

大和、武蔵、長門、陸奥の放った砲弾は一斉射目から夾叉――つまり、その落下範囲内にウェールズを捉えていのだ。
水兵

「敵先頭艦再び発砲ッ!!」

見張り員の悲鳴みたいな報告にウェールズは顔を青ざめた。

そして51cm砲弾が再びウェールズを襲った。

ズガアアアー――ンッ!!

戦艦プリンス・オブ・ウェールズに51cm砲弾が命中した。

ズガアアアアー――ンッ!!

ズガアアアアー――ンッ!!

旗艦プリンス・オブ・ウェールズの艦首から黒煙が吹く。

ウェールズ

「キャアアアアアアッ!!」

防空指揮所でウェールズが絶叫した。

辺り一面に血が飛び散る。

トーマス

「ひ、被害報告ッ!!」

艦橋でトーマスが焦りながら副官に命令する。

水兵

「被害報告ッ！！A主砲塔に敵砲弾二発命中ッ！！A主砲及びB主砲は射撃不能、弾薬庫誘爆の危険があります！！」

トーマス

「なんだと、主砲が2基も使えないというのか！！」

キング・ジョージ？世型は前部の所に6門後部に4門という、変則的な主砲のレイアウトをしている、いま、ウエールズは、A主砲塔に大和の51センチ徹甲弾が命中してA砲塔はくだけ、爆発の衝撃でB砲塔の主砲が曲がってしまった、

リーチ艦長

「提督！このままでは、いずれ弾薬庫に引火し大爆発を起こしてしまいます、弾薬庫に注水します！」

トーマス

「仕方あるまい、指揮を2番艦のキング・ジョージ？世に渡す、本艦は戦闘海域をり・・・」

トーマスは次の言葉が言えなかった、長門が放った、46センチ徹甲弾が命中し機関室から火災が発生したからだ、

水兵

「艦中央に敵弾命中！敵弾は装甲を貫通！機関室火災発生！」

トーマス

「馬鹿な！装甲を貫通だと・・・」

水兵

「機関室連絡途絶！」

水兵

「艦停止します！」

水兵

「後方より、キング・ジョージ？世接近！衝突コースです！」

リーチ艦長

「総員衝撃に備えろ！」

戦艦キング・ジョージ？世 艦橋

水兵

「旗艦に命中弾！火災を確認！」

艦長

「これより指揮を継承する、全艦最大戦速！各個自由射撃せよ！」

水兵

「プリンス・オブ・ウェールズの機関停止を確認！このままでは、衝突します！！」

艦長

「面舵一杯！！右後進！左前進一杯！急げ！」

水兵

「ア、アイ・サー」

キング・ジョージ？世は急速に針路を右に変えたが、プリンス・オブ・ウェールズもこの時、針路を右にとって惰性で進んでいた、

水兵

「プリンス・オブ・ウェールズ面舵を取りました！」

艦長

「なんだと！」

水兵

「駄目だ、ぶつかるぞ！」

艦長

「総員衝撃に備えろ！」

ガッコン——ガガガッギギ

キング・ジョージ？世は、プリンス・オブ・ウェールズの艦尾に衝突した

独逸戦艦ビスマルク

水兵

「キング・ジョージ？世、プリンス・オブ・ウェールズ衝突しまし

た！」

砲術長

「艦長！あと少しで本艦の射程圏内に入ります！」

艦長

「機関最大戦速！ドイツ海軍の意地を見せてやれ！」

艦橋に居た、水兵たちは、声にならない声で叫ぶ

砲術長

「主砲！射程内に入りました！」

艦長

「主砲射撃用意！目標敵超戦艦！撃て——」

砲術長

「撃ええー！ーッ！！」

ズドオオオー！ーッ！！

ビスマルクの38センチ主砲が火を噴く

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵

「英戦艦2隻戦闘力を損失した模様、独戦艦2隻突っ込んできます」

砲術長

「射撃目標変更！目標独戦艦！」

水兵

「あつ、敵艦発砲確認！敵弾来ますっ！」

艦長

「取舵20度！転舵急げっ！」

ガッキン

ビスマルクの38センチ主砲弾が大和甲板中央部分に命中した

艦長

「被害報告急げっ！」

水兵

「甲板中央に被弾！されど戦闘航行に支障ありません、ですが5番速射砲射撃不能！他機銃座が吹っ飛びました！」

山本

「砲術長！反撃だ目標独逸戦艦！主砲射撃準備急げっ！」

砲術長

「宜候！主砲射撃準備・・・完了！」

山本

「撃ええー！ーッ！！」

ズドオオオー！ーッ！！

大和、武蔵が独逸戦艦に向けて射撃を開始した

独逸戦艦ビスマルク

水兵

「敵先頭艦に命中弾確認！」

艦長

「やったか？」

水兵

「敵艦、速度針路共に変化なし、本艦の攻撃効いてません！」

艦長

「なんだと！38センチ砲が直撃したんだ、効いていないわけが」

水兵：敵艦発砲「面舵一杯！機関最大戦速！」

グッワアアア

大和が放った51センチ徹甲弾は9発のうち3発が命中した、被弾箇所は艦首、後部艦橋、4番砲塔であった

艦長

「ひっ被害報告急げっ！」

水兵

「艦首に敵弾命中！浸水発生！」

水兵

「後部艦橋被弾！副長以下後部艦橋に居たもの全員戦死！」

水兵

「4番砲塔被弾、射撃不能！付近にて火災が発生中です」

艦長

「ダメージコントロール急げっ！」

グッワアアア

艦長

「どうした！？」

水兵

「後続のティルピッツ艦橋に被弾を確認！速力低下落後していきま
す！」

これは、武蔵の砲弾が命中したのだ

艦長

「なんだと！！」

水兵

「シャルンホルスト、グナイゼナウ、英巡洋戦艦、敵艦隊へ向かっ
ていきます」

艦長

「まさか、本艦とティルピッツの盾になるつもりか！」

巡洋戦艦シャルンホルスト 艦橋

水兵

「後方より、英巡洋戦艦接近！」

艦長

「ふっ、考えることは、皆同じか…機関室出せるだけでいい速度を
上げてくれ」

機関室

「了解！いきます！」

艦長

「砲術長射程に入り次第撃て、弾薬庫が空になるまでだ」
砲術長
「了解」

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵
「敵巡洋戦艦多数接近！」

艦長

「長官、敵もなかなかやりますな」

山本

「そつだな」

水兵

「後方に艦影多数確認！」

山本

「敵の増援か！」

水兵

「いえ、あれは播磨です第二連合艦隊の到着です」

水兵

「長官、林大将より無線です」

山本

「わかった・・・山本だが」

翔平

「長官、遅くなりました」

山本

「いや丁度良かったよ」

翔平

「では、これから作戦を開始します」

山本

「宜しく頼む」

翔平

「はい、ではまた」

山本

「これより、戦術Fを展開する、各艦に連絡！」

宇垣

「了解！戦術F展開！」

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 CIC

翔平

「戦術F展開！最大戦速！敵艦隊の後方に回る」

啓太

「宜候！」

播磨

「翔平、こんなの、成功するの？」

翔平

「人間やれば何でもできる！」

播磨

「そうね」

翔平

「各艦砲撃戦用意っ！」

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェールズ

トーマス

「被害報告っ！」

水兵

「艦尾にキング・ジョージ？世、衝突っ！推進軸、舵、大破！」

水兵

「火災！消火不能っ！応急指揮所にまで広がりましたっ！」

リーチ艦長

「なんだと、それでは自沈もできんのか!？」

水兵

「はい・・・残念ながら」

トーマス

「C砲塔はまだ使えるか？」

水兵

「はい、照準さえ出来ればいつでも使えます!」

トーマス

「よし、ロイヤルネービーの意地を見せるぞ」

リーチ艦長

「はい!C砲塔旋回!照準を敵艦隊へ!」

砲術長

「イエッサーッ!」

戦艦キング・ジョージ?世 艦橋

艦長

「被害状況報せっ!」

副長

「艦首大破!浸水により前進不能!」

艦長

「主砲は無事か!」

副長

「はい、大丈夫です、何時でも撃てます」

艦長

「撃ち方始めっ!」

砲術長

「撃ええーッ!」

ズドオオオーッ!」

第二連合艦隊 巡洋艦 十六夜

水兵

「敵巡洋戦艦接近シャルンホルスト型です！」

雄哉

「面白い！主砲射撃用意！十六夜行くぞ」

十六夜

「はい」

砲雷長

「主砲射撃準備完了！」

雄哉

「主砲撃ち方始め！！撃~~~~っ！！」

カッ ズドオオオン

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 CIC

啓太

「敵艦隊の後方約30キロ地点です」

翔平

「全艦回頭180度！回頭が終わり次第、各艦自由射撃！作戦道理に行動せよ」

葵

「宜候！」

第二連合艦隊各艦は回頭を終えて射撃に移ろうとしていた
啓太

「回頭完了！」

砲術長

「主砲撃ち方始め！！撃~~~~っ！！」

カッ ズドオオオン

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェールズ

戦艦プリンス・オブ・ウェールズは停船してもなお、後部に残された主砲で第一連合艦隊へ砲弾を放っていた

水兵

「右舷に敵艦隊！戦艦5いや6巡洋戦艦6駆逐艦を前衛にして高速接近中！っあ敵艦発砲敵弾きますっ！！」

リーチ艦長

「なに！」

ガン グッワアアアン ズッシャアアア

ウェールズ

「ギャアアアアア、つく何・・・かん・・・つつ・・・した？」

トーマス

「被害報告！」

水兵

「敵弾艦尾に命中、艦尾大破、装甲を貫通し左舷へ抜けました」

リーチ艦長

「提督・・・」

トーマス

「分かった、残存艦艇へ連絡戦闘行為を終了せよ」

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵

「敵巡洋戦艦シャルンホルスト級轟沈！」

水兵

「長官、敵艦より発行信号です」

山本

「なんだ」

水兵

「敵艦隊降伏しました」

山本

「そうか、砲撃止め、本艦は敵艦隊旗艦に接近する、他の艦は脱走艦がないように、敵艦隊を囲め、あと対潜、対空警戒を密にしろ」
宇垣

「宜候！」

こうして海戦は終わり、大和と播磨は英独連合東洋艦隊、旗艦、戦艦プリンス・オブ・ウェールズに向かった。

第十二話 マレー沖海戦（後書き）

作者

「遅くなりましたが、新年あけましておめでとございます」

播磨

「作者、今頃出てきて・・・」

作者

「あ、え、その、あれですね、冬休みの宿題とか山ほど出ていて、ですね・・・」

常陸

「あれね、でも作者は年末東京にいたみたいだよ5日間も」

作者

「げっ常陸」

十六夜

「たしかに作者の部屋には誰もいなかったわ」

作者

「つく・・・」

鳳翔

「私もE-2Dを飛ばしていたが、確かに作者は東京にいたぞ」

播磨

「どういことなのか、説明してくれるよね、作者」

作者

「ひっい、」

作者ダツシュ

常陸

「あっ逃げましたね」

鳳翔

「逃げたな」

第十三話 船団護衛

1月15日 午後2時30分

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェールズ 艦橋

水兵

「日本戦艦2隻接近中！」

トーマス

「艦型は分かるか？」

水兵

「左舷から接近中の艦は、ハリマクラス、右舷からののは、識別表にありません、新型戦艦でしょう」

右舷から接近中の戦艦は山本長官座乗の戦艦大和であった
水兵

「日本戦艦2隻とも停止しました・・・っあ、内火艇接近中！」

トーマス

「艦長、ラッタルを下ろせ、私は甲板へ行く」

リーチ艦長

「提督危険です！」

トーマス

「大丈夫さ、日本海軍は我らの弟子みたいなものだからな」

リーチ艦長

「では、私も一緒に」

トーマス

「では、行くか」

戦艦プリンス・オブ・ウェールズ ラッタル

翔平

「よつと、わあ、想像以上にひどいことになっている」

山本

「何言っているんだ、林君、我々が破壊したんだろう」

翔平

「そうでしたね」

ラッタルを上りながら翔平と山本はそんな会話をしていた

甲板

トーマス

「私が英独連合東洋艦隊司令長官トーマス・フィリップス大将だ、」

山本

「私は、大日本帝国海軍第一連合艦隊司令長官山本五十六大将」

翔平

「大日本帝国海軍第二連合艦隊司令長官林翔平大将」

トーマス

「え！若いが幾つですか？」

翔平

「今年で24になりますが」

トーマス

「若い若すぎる」

翔平

「そうですか？」

山本

「ゴホン、えゝこれから、貴方たちをどうするかだが」

トーマス

「ジュネーブ条約道理に扱ってもらいたい」

山本

「いや日本にそんな経済力はないから、貴方たちは駆逐艦、巡洋艦、輸送艦に乗って母国に帰ってもらいます」

トーマス

「え！」

翔平

「意外ですか？」

トーマス

「いや、こんなこと言われるとは、思っ、て、なかつたからな」

翔平

「そうですか」

山本

「では、さつそくですが」

トーマス

「わかつた、また会おう」

林

「はい」

こうして、英独連合東洋艦隊の艦艇に乗っていた将兵は駆逐艦、輸送艦に移りオーストラリアに向かった

山本

「さて、捕獲した艦艇をどうするか」

翔平

「もうすぐ、第一支援艦隊が来ますからそつちに任せましょう」

啓太

「林長官」

翔平

「うん？なんだ」

啓太

「設計主任から無線連絡です」

翔平

「親父から、分かつた、出よう、何だ親父」

武

「翔平、捕獲艦はなんだ」

翔平

「いきなりだな、え〜と、キング・ジョージ？世型が2隻これは両方大破している」

武

「ほう」

翔平

「次にレパルス、レナウン、フッド、ビスマルク、ティルピッツ、シャルンホルスト以上」

武

「ほう大漁だな」

翔平

「字が違うぞ」

武

「いいじゃねえか、細かいことは気にしない」

翔平

「ふっ、じゃあ早く回収してくれよ」

武

「任しとけ」

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 長官室

長官室では翔平がこれからのことを話していた

翔平

「本艦隊はこれより第一支援艦隊と第三輸送艦隊を護衛しつつ日本に帰還する」

第三輸送艦隊には、南方の物資、主に石油等の戦略物資を満載した輸送艦隊であり、輸送船20隻、油槽船10隻、護衛駆逐艦35隻、護衛空母2隻、輸送船と油槽船は戦時標準船でわずか、3ヶ月で完成する船であった、もちろん。脆性破壊については解決されている、護衛駆逐艦も短期工事で就役できるように設計されている。

啓太

「はい分かりました」

翔平

「なお、帰還途中に潜水艦、による攻撃が行われる可能性が高い対潜哨戒を厳重にしてくれ」

葵

「はい」

翔平

「以上だ、では解散」

啓太

「はい」

参謀達が持ち場に戻った

翔平

「この輸送艦隊無事に持って帰れるかな」

播磨

「翔平気にしすぎよ」

翔平

「播磨か、捕獲艦の様子はどうだった？」

播磨

「呉の大きさに目を丸くしていたわ」

翔平

「そうか、よし日本へ帰還するか」

播磨

「はい」

1月17日午後7時

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

第二連合艦隊は第一支援艦隊と第三輸送艦隊を護衛しながらバシー

海峡を通過していた、

翔平

「順調だが、なんか嫌な予感がするな」

播磨

「そう？」

翔平

「来るぞ、間違いなく」

その時艦隊全体に警報が鳴り響いた

翔平

「どうした！？」

艦長

「ソナーに感あり！待ち伏せですっ！」

翔平

「数は？！」

艦長

「10隻以上おそらくUボートですッ！」

翔平

「対潜戦闘用！意！」

艦長

「宜候」

翔平

「そつえば、啓太は」

艦長

「それが・・・」

翔平

「どうしたんだ？」

葵

「栗須参謀長なら、お酒の飲みすぎで寝てますよ」

スッベン！ 艦橋に居た全員が滑ってしまった

翔平

「酒の・・・まあいいだろう、寝かせておけ」

水兵

「魚雷注水音、感知！」

翔平

「駆逐艦部隊に命令！攻撃せよ」

葵

「宜候！」

駆逐艦秋月

水兵

「攻撃命令来ました」

砲雷長

「五式対潜ミサイル発射用意」

水兵

「VLS、五式対潜ミサイル、弾数5、データ入力完了！」

艦長

「発射！」

グワツ　ズツシャアア——

この時、5隻の秋月型駆逐艦から各5発の五式対潜ミサイルが発射された

砲雷長

「五式対潜ミサイル、目標に向かって飛翔中」

水兵

「着水確認、命中まで、15秒」

水兵

「命中確認！圧壊音撃沈です！」

艦長

「旗艦へ報告」

水兵

「宜候！」

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵

「敵潜の機関音消失しました」

翔平

「そうか」

水兵

「長官！第一連合艦隊から入電！シンガポール制圧に成功したそうです」

翔平

「いまごろ、英米各国では大騒ぎしてるだろうな」
播磨

「いろんな意味でね・・・」

この後、潜水艦の襲撃もなく無事日本の呉に入港した

第十三話 船団護衛（後書き）

作者

「ふゝ最近ネタがわいてこない」

播磨

「だからこない遅いのね」

作者

「それだけではないぞ、学校が始まってネタを考える暇は授業中しかない！」

播磨

「作者、授業中何やっているの」

作者

「なにつて、もちろん勉強だよ」

播磨

「・・・もういいわ、なんか疲れた」

作者

「そう？」

播磨

「ご意見ご感想お待ちしております」

第十四話 改造終了

3月24日

呉

現在、呉海軍工廠では、戦艦、プリンス・オブ・ウェールズ以下3隻の英国戦艦、巡洋戦艦を改造中で、大いに活気づいていた、このほか、ビスマルクほか3隻の、独逸艦は大分の大神海軍工廠で、米戦艦は、神戸以下3隻の自走浮きドックで改造を受けている、

自走浮きドック神戸

翔平

「親父どうなんだ、何時になったら、改造が終わるんだ？」

武

「こつちの方は予定道理に進んでいる、それと護衛の駆逐艦やら、巡洋艦、空母等は現在、各国内の工廠、造船所で急ピッチで建造中だ、だが、こんなに艦が有っても、乗せる将兵がいなきゃ意味がないけどな」

翔平

「そつちの方は心配ない、ちゃんと手を打ってある」

武

「どんな？」

翔平

「機密だ」

武

「ふっ、まあいい、俺はこれから、横須賀に行ってくる」

翔平

「なぜ？」

武

「新鋭空母が来月就航するからな、その様子を見る」

翔平

「ああ、大鳳のことか」

武

「そうだ」

大鳳は史実なら川崎重工業神戸造船所で就航する予定であったが、工場等に優先して設備配備した結果、民間の造船所は1930年代のままで止まっていた、だが現在は、工作艦宗谷型を各地に派遣し、各民間造船所の整備、指導を行っている。

翔平

「つで、なにで、横須賀まで行くつもりだ」

武

「え、電空で」

翔平

「そうか」

電空それは、V-22オスプレイの日本名だ

翔平

「気負つけてな」

武

「分かっているって」

第一連合艦隊旗艦 戦艦大和

会議室

翔平

「山本長官、捕獲艦の事ですが、予定道理、4月には全艦の改造が終わります」

山本

「早いな、そろそろ各艦がどう改造されるか教えてくれてもいいだろう」

翔平

「そうでしたね、え」とまず、米戦艦3隻は主砲を41センチ3連装4基に統一しまして、もちろん艦幅と全長は伸ばしましたそして速力は30ノットに、英戦艦は、これも米戦艦とほとんど変わりません、レナウン型巡洋戦艦は、主砲が41センチ2連装、3基に改造し、機関、装甲等を少々いじりました、フッドも同じような感じで改造しました、次に独戦艦ですが、こいつは主砲が41センチ2連装、4基に改造しています、ですが、巡洋戦艦は主砲を、30、5センチ砲に変更して、対潜、対空、ミサイルを装備し、護衛戦艦として、今再編成中の第一護衛艦隊旗艦になつてもらいます」

第一護衛艦隊とは旧式巡洋艦などを、超近代改装しそれらの艦を艦隊に編入させた艦隊である、いわゆる寄せ集め？

山本

「長々と説明ありがとう」

翔平

「いえ、」

山本

「本土の防衛の方はそちらはどうするつもりなんだ」

翔平

「はい、各航空基地には、海軍の零戦、陣風、紫電、陸軍の疾風等の迎撃戦闘機を各30機以上配備し、さらに重要都市の基地には、音神を5機配備します」

山本

「音神、搭乗員は育成済み聞いているが、整備員の方はどうなんだ」

翔平

「そちらの方も、すでに育成済みです」

山本

「やるのが早いな」

翔平

「それが仕事ですから」

山本

「そうか」

翔平

「そうです、おっともこんな時間ですか」

時刻は午後7時を回っていた

翔平

「そろそろ帰ります、そちらの出撃は明後日でしたね」

山本

「そうだ、ちよつと横須賀へ」

翔平

「こちらは、1週間後に横須賀に」

山本

「では、また1週間後に会おう」

翔平

「はい」

翔平は大和の会議室を後にし、内火艇で播磨へと戻っていった

3月27日

イージス戦艦播磨 会議室

翔平

「遅れてすまん、」

会議室には、第二連合艦隊の全艦魂と英戦艦、米戦艦、独戦艦の艦魂がいた

そこに、啓太、葵、武、翔平の4人がはいってきた

翔平

「播磨、全員の自己紹介は終わったか？」

播磨

「終わったわ」

翔平

「そうか、では、改めてようこそ大日本帝国海軍へ、私は、本艦隊の司令長官、林翔平です、以後よろしく」

プリンス・オブ・ウェールズ

「私は元英独東洋連合艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズです、こちらこそよろしくお願いします」

翔平とプリンス・オブ・ウェールズ握手をする。

プリンス・オブ・ウェールズ

「長官、ちよつと聞いていいですか」

翔平

「うん、なんだ」

プリンス・オブ・ウェールズ

「長官、貴方たち第二連合艦隊は未来から来たというのは本当ですか」

翔平

「うつ、事実だ」

テネシー

「本当ですか」

翔平

「我々は西暦2025年の日本からやってきた日本人だ、我々は太平洋上で奇妙な嵐に会い、この時代に飛ばされたんだ」

プリンス・オブ・ウェールズ

「長官たちがこの時代に来なかったら、今頃世界はどうなっていたんですか」

翔平

「啓太、例の映画の準備だ、俺が話すより、直接見てもらった方が早いからな」

啓太

「了解、1分待ってください」

翔平

「分かった」

1分後

会議室に隠されていた、大型液晶テレビが姿を現した

翔平

「今から、俺たちが、過ごしてきた、歴史の映像を見てもらう、主に第二次世界大戦から現代までの、歴史の映像、写真を編集して作ったやつだ、小1時間で終わる、見ていてくれ」

翔平がBDレコーダーにBDをいれ、映画がスタートする、

一時間後

翔平

「どうだったか」

プリンス・オブ・ウェールズ

「原子爆弾・・・あんな恐ろしい兵器が・・・」

翔平

「そうか・・・我々は原爆の開発も阻止しなければならぬ、このことは、我々がこの時代に来た、時から決まっていた、君達の力私に預けてくれないか？」

ビスマルク

「祖国残酷なことをしていたんだ、協力しよう」

この残酷なこととは、ナチスドイツの強制収容所の事だ

テイルピッツ

「私も協力してあげるよ」

テネシー

「私も」

カリフォルニア

「協力させていただきます」

メリーランド

「協力しよう」

プリンス・オブ・ウェールズ

「私達、英国艦も日本海軍に協力します」

翔平

「ありがとう、全艦の同意が確認されたところで、全艦に新しい艦名にする、まず、プリンス・オブ・ウェールズには、上総、キングジョージ？世には下総、レパルスには豊前、レナウンには豊後、フツドには対馬、次にカリフォルニアは相模、メリーランドには甲斐、テネシーは淡路、次にビスマルク、丹波、ティルピッツ、丹後、シヤルンホルストは、磐城以上、これからよろしく頼む」

全員

『こちらこそよろしく願います』

翔平

「以上！では解散！」

翔平以下、3人は仕事に戻った

長官室

翔平

「さて・・・やる気なくすな・・・」

翔平は目の前の執務机に置かれているパソコンを見ていった、これは、家に帰る前までは、宿題をやる気でいた、小学生みたいな感じだと思ってくれればいい

翔平

「はあ～～、逃げるか・・・」

翔平は回れ右をして長官室から出ようとしたが・・・

播磨

「どこに行こうとしているのかしら、翔平」

翔平

「播磨！どうしてこんな所に立っているんだ」

播磨は長官室の前の通路で立っていた

播磨

「翔平がサボらないように、交代での見張りが今日からされるの」

翔平

「へーそれでこんな所に立っているのか」

播磨

「そうよ、さあ、早く仕事に戻りなさい」

翔平

「はい」

翔平は長官室に戻され、播磨以下第二連合艦隊各艦魂の監視下で仕事をすることになった

4月4日

呉

第二連合艦隊は午前2時に静かに出撃した、夜中に出撃したのは、敵の諜報員にきずかれないためだ、史実道理なら、4月18日に帝都初空襲があるはずだ、帝都初空襲を阻止するために、出航し、太平洋洋上で米艦隊を迎撃する作戦が軍令部にいる堀井弘明参謀によって立案され、実行するために、2日後に横須賀からは第一連合艦隊が出撃する手はずになっている。

水兵

「水道抜けました、これより外洋に入ります」

翔平

「全艦巡航速度へ、」

艦長

「宜候！」

こうして、第二連合艦隊が出撃し、作戦の準備が整いつつあった。

第十四話 改造終了（後書き）

作者

「ふゝ疲れた」

播磨

「作者なにもやっていないでしょう？」

作者

「なに言っているんだ、今日も大変だったんだぞ、いろいろと」

播磨

「なにやっていたの？」

作者

「朝起きて、宿題して、飯食って、勉強して、予習して、まあいろいろとしていたんだよ」

播磨

「それは大変ね」

作者

「なんだその、気の向けた返事は」

播磨

「どうでもいいわそんなの」

作者

「はあゝそうですか、まあいいです」

播磨

「では、ご意見ご感想お待ちしております」

第一五話 日本本土初空襲

4月17日（日本時間午後6時）

太平洋洋上

現在、第二連合艦隊は太平洋洋上を囑進していた、幻夜による、敵艦隊探索の結果、米艦隊の陣容は、空母4、巡洋艦8、駆逐艦12隻から編成された艦隊であることが分かった、米艦隊は、史実道理の針路をとり、日本本土へ近づきつつあった、

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、敵艦隊を発見しました」

翔平

「よし、作戦道理、艦隊を分離する」

啓太

「了解、各艦に通達、支持道理にペアを組んで航行、各部隊は指定海域に移動！米艦隊を追い返せ！！」

翔平

「帝都防空基地に打電、航空隊の発進準備、敵さん、明日来るぞ」

「了解、暗号回線で打電します」

翔平

「よし、常陸に打電！電子戦用意！」

水兵

「了解！」

第二連合艦隊 イービス戦艦常陸

常陸には、2025年の米軍を凌ぐ、電子戦用の機器が満載されていた

水兵

「旗艦より、入電、電子戦用意、です」

ちなみに、艦長は、釘宮信也大佐である
信也

「電子戦用意！いよいよだ、本艦の能力を見せてやれ！」

砲雷長

「了解、電子戦用意！」

水兵

「用意よし！」

砲雷長

「ECM攻撃開始！」

常陸

「電子戦専門戦艦の名は、伊達じゃありません！その力見せてあげ
ましょう！」

イービス戦艦常陸から強力な妨害電波が実施された

第二連合艦隊 イービス巡洋艦十六夜

副長

「艦長、電波妨害が始まりました」

雄哉

「うん、米艦隊の位置は特定できているか？」

副長

「はい、現在史実道理の針路を航行中、50ノットで行けば明日の朝に会敵するでしょう」

雄哉

「よし、雪月に通達、速度50ノット本艦の後方200につけよ」

雪月とは、秋月が駆逐艦の6番艦である

水兵

「宜候！」

イージス巡洋艦十六夜と駆逐艦雪月は50ノットの速力で暗い闇の中に入っていた。

4月18日（日本時間午前7時）

第18任務部隊 空母エンタープライズ

現在、米艦隊はレーダーが突然真っ白になり混乱していた

士官

「レーダーはまだ復旧しないのか？」

水兵

「はい、調べてみたところ、アンテナにも異常はありません」

士官

「だったらなぜ、レーダーが真っ白なんだ」

水兵

「分かりません」

士官

「くっ、早急に復旧しろ」

水兵

「了解」

士官

「提督、爆撃隊の発艦準備完了しました」

ハルゼー提督

「全機発艦だ、ジャップに真珠湾のお返しをしろ!!」

士官

「サー・イエッサー!!」

その命令の後、空母エンタープライズから、16機のB-25が発艦しようとしていた、ちなみに、B-25を搭載している空母は、史実とは違い、エンタープライズの他に、ヨークタウンである、あとの2隻、ホーネットとワスプは、護衛機や哨戒機を搭載している。エンタープライズの艦橋トップ、マストには、一人の少女が腰を掛けていた、この少女はもちろんエンタープライズの艦魂である。

エンタープライズ

「見てなさいジャップ、今アメリカからのプレゼントを届けるから」

爆撃隊の最後の機体が発艦したのは、史実と同じ、8時18分であった

士官

「提督、全機発艦しました」

ハルゼー提督

「・・・全艦回頭、これより帰還する」

その時

水兵

「左舷に艦影を視認・・・あれは、テンワクラス巡洋戦艦!!」

ハルゼー提督

「なんだと、何故気づかなかった」

士官

「それが、レーダーが故障してしまいました」

ハルゼー提督

「糞！全艦対艦戦闘用意！いくら巡洋戦艦と言っても一隻だ、数で押さえる！！」

水兵

「敵艦発砲！」

ズドーーーン

水兵

「重巡ノーザンブトン、爆沈！」

重巡洋艦ノーザンブトンは十六夜の一齐斉射により艦中央に30、5センチ徹甲弾が命中、爆沈した

ハルゼー提督

「重巡が一発でしかも初弾命中だと・・・」

士官

「提督・・・」

ハルゼー提督

「くっ、全艦回避行動をとりつつ、東へ退避しろ」

士官

「了解」

空母エンタープライズから、発行信号が打たれた

第二連合艦隊 イージス巡洋艦十六夜

水兵

「米艦隊、退避していきます」

雄哉

「うっん、なんか張り合いがないな」

十六夜

「それを言ったら可哀そうよ」

雄哉

「それもそうか」

天羽型巡洋戦艦の30.5センチレールガンの威力は、通常の艦砲に直すと42センチ砲と同等らしい

雄哉

「よし、最後に七式魚雷発射用意」

砲雷長

「宜候！・・・発射用意よし」

雄哉

「発射！」

パツシュ

乾舷のシャッターから隠されていた魚雷発射管から4本の魚雷が米艦隊に向けて放たれる

雄哉

「さて、戻るか、雪月に打電、本艦についてこい」

第18任務部隊 空母エンタープライズ

水兵

「敵艦反転、退避していきます」

ハルゼー提督

「おかしい、こんな簡単に引き上げるわけが・・・」
ズガン！

水兵

「艦尾に被雷しました」

ハルゼー提督

「おちつけ、被害報告急げ！」

水兵が艦橋に走ってきた

水兵

「報告！艦尾に被雷、第一スクリュー損傷、艦尾から若干の浸水があります」

さらに、見張り員からの報告が来た

水兵

「空母ヨークタウン、ホーネット、ワスプも被雷しました」

ハルゼー提督

「損傷は？」

士官

「各空母も小破乃至中破です」

ハルゼー提督

「損傷艦を中心に輪形陣で航行、本艦隊は撤退する」

茨城県上空

現在、茨城県上空には、陸海軍合同の迎撃部隊が編成されて飛んでいた、その数約100機、たった36機のB-25には、過剰防衛と言えるほどの迎撃の数であった、主な機体は、海軍の零戦、陣風、紫電、陸軍の疾風、飛燕、隼、鍾馗さらに音神5機が待機していた。音神を操っているのは、海軍、陸軍の中から厳選した、エースパイロット達、もしくは、なる予定の男たちであった、その中には、軍鶏とあだ名、されている、笹井醇一少尉もいた。

笹井

「いつもながら、この機体の乗り心地は最高だ」

笹井は音神のコックピットで行った、笹井の乗っている音神は、この時代で最初に作られた機体であり、オリジナルとは若干性能が落

ちていた、おもにステルス性能が、だが、レーダの性能が、悪いこの時代ではあまり関係ないだろうと、武は言っていた。

笹井

「おっと、敵さんが来たみたいだぞ、全機俺続け！」

音神のレーダーが、敵の機影を映す

音神が轟音を立てて、あっという間に飛んでいく、後方にいた零戦以下の機体も速度を上げて音神の後についていく。

笹井

「居たぞ、全機攻撃開始！！」

笹井気が速度をさらに上げ、米軍機B - 25にすれ違いざまに、機銃掃射をする、

ズウウウウ

この攻撃によって、7機のB - 25が爆散、米軍機は大混乱にをちいった

米兵1

「敵機発見！！」

ズウウウウ

米兵2

「後続の10番機、12、13、14、15、16、18機爆散！」

ドーリットル

「各機弾幕を密にしろ！敵機を近づけるな！」

米兵3

「速い！」

米兵1

「3番機、爆散！」

米兵2

「前方から敵機接近！」

ドーリットル

「何！・・・多すぎる」

海軍陸軍の混合迎撃隊が今到着し、各機が迎撃に入った

ドーリットル

「糞！残った機は超低空で、進め！行くぞ！」

ドーリットル爆撃隊は超低空で東京を目指した

笹井

「おっと、敵さん低空でこちらの攻撃をまこうというのか、残念だがそれは無理だな」

なぜならドーリットル爆撃隊の先には、陸軍の防空部隊が待機していた、主武装は、一式対空戦車、一式戦車の砲塔を外し、その砲塔を高射砲に変えただけの、簡単な構造だが、高射砲は、完全自動装填装置と対空電探との連動により、射撃速度、命中率、両方とっても、現時点で世界最高の高射砲であった、

陸兵1

「2時の方向敵機接近！！数20！！」

部隊長

「全車、対空戦用意！日ごろの訓練の成果見せてやれ」

全員

『了解!!』

一式対空戦車の高射砲の口径は75mm有効射程は6300mである

陸兵2

「敵機射程圏内に入りました!」

部隊長

「各車自由射撃、撃つて——!!」

ドン ドンドン ドン

米兵1

「機長!前方敵部隊!」

ドーリットル

「なんだと!」

グッワッ

ドーリットル機は大きくバランスを崩し

ズッガン

墜落した

陸兵3

「敵機墜落!」

部隊長

「火は出てないな、よし、救助に向かえ、丁重にな」

陸兵 4

「了解」

このやり取りの間でも、高射砲は火を噴き、戦闘機は、敵機に群がり、攻撃を続けた、米軍にとっては地獄であつたであろう、高度を上げれば、音神、低く飛べば、一式対空戦車、がいたのだから、

笹井

「敵機全機撃墜を確認・・・これより帰還する」

迎撃部隊は風のように帰還した。

陸軍病院

ここでは、ドーリットル空襲での、捕虜が治療を受けていた、その中には、指揮官ジミー・ドーリットル中佐も含まれていた。

看護兵

「どうですかご気分は？」

ドーリットル

「君たちは、馬鹿なのかね？捕虜にこんなにいい待遇をして、これはもう捕虜の扱いではない、私はゲストみたいなものだ」

看護兵

「いいえ、これが我が帝国の方針の一つです、中佐も怪我が完治したら、母国に送られるでしょう」

ドーリットル

「我々は、捕虜ではないのかね」

看護兵

「はい、我が大日本帝国は基本的に捕虜をとらないのでドーリットル」

「・・・なんて国だ・・・ハッハッハッ」

太平洋洋上

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、帝都防衛に成功しました」

翔平

「うん、作戦道理だな」

播磨

「堀井参謀もよくここまで予測できたわね」

翔平

「ふっ、あいつは昔からこういうことが得意だったからな」

播磨

「そういえばそうね」

翔平

「そういうことだ・・・全艦針路変更トラック島に向かう」

啓太

「宜候！！全艦針路変更！」

翔平

「さて、次の準備をしますか」

第一五話 日本本土初空襲（後書き）

作者

「大変遅れて申し訳ありません」

播磨

「本当にね、今回は間が空きすぎじゃないかしら」

常陸

「本当ですよね」

作者

「すいません、反省しています、許してください」

十六夜

「いいえ、許しません」

作者

「出た〜〜！ギヤアア〜〜」

播磨

「・・・」

常陸

「ご意見ご感想お待ちしております」

第一六話 トラック諸島に入港

4月25日

太平洋洋上

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 長官執務室

翔平

「なんなんだよ！入港する時のこの書類の量はコンチクショウ！
！」

入港するときや、帰港の時は大抵書類が多い、主に補給関連で

翔平

「はあゝ疲れたゝ、なゝ紀伊ゝ休憩していいかゝ」

紀伊

「駄目です、後二時間もすれば、トラックに入港する予定ですから」

翔平

「あゝ、やってやろうじゃないか！！」

何かに取りつかれたように、ハイペースで書類に目を通し片づけていく、翔平

45分後

翔平

「ふっ、終わったぜ・・・」

ボタン

疲労によって倒れる翔平、

紀伊

「ちよつ長〱官〱大丈夫ですか!？」

翔平

「大丈夫だ!問題ない!紀伊、俺ちよつと疲れたから寝る、オヤス
ミ」

紀伊

「こんな所で寝てはだめです!長官!ちゃんとベッドで寝てください
い!」

翔平

「スウ〱、スウ〱」

ちなみに今翔平の体勢は紀伊の膝を枕にしている体制であつた、こんなところをもし誰かに見られたら・・・

コンコン

播磨

「翔平入るわよ・・・え!？」

常陸

「失礼します」

あつもう時すでに遅し翔平の命運はいかに!?

播磨

「翔〱平〱何やっているのかしら?」

翔平

「う!なんだ!・・・播磨さんそのだらだら漏れている殺気はなん

ですか?!」

ただなぬ、殺気に翔平は飛び起きる

常陸

「これは!さっそく各艦魂に緊急電を!」

紀伊

「・・・」

顔を明かしながら黙っている、紀伊

播磨

「翔平・・・覚悟はいいかしら?」

と言いながら軍刀の鞘を抜く播磨

翔平

「よくない!なんでこんな・・・退避!!」

長官執務室を飛び出し、全速で退避する翔平、
その時、各艦魂が一斉に長官執務室に集合した

尾張

「紀伊!私を差し置いて、翔平に膝枕をしただと!!」

紀伊

「ええと・・・その・・・ですね・・・」

三笠

「言い訳は聞きたくありません紀伊」

普段は温厚な三笠も怖い

鳳翔

「さてどういふことか話してもらおうか・・・紀伊」

拳銃を向け脅す鳳翔

紀伊

「ひっっ」

ダッシュして長官執務室を飛び出す紀伊

鳳翔

「アッ！逃げた、追うぞ！！」

播磨

「待つて、半数は翔平を半数は紀伊を追って」

全員

『了解』

イージス戦艦播磨 艦内

翔平

「なんだよ、書類が片付いたと思ったら、播磨は怒っているし、俺何かやってしまったかな？」

艦魂達が怒っている理由も知らない、全くこの男は

翔平

「ハア、ハア・・・ちよつと思ひ出してみよう」

＼青年記憶探測中＼

翔平

「うん？何のやっていないよな、うん」

一人で納得する翔平

十六夜

「見つけましたよ、長官」

十六夜の手にはなぜかロープが

翔平

「え！なぜ十六夜が！」

十六夜

「確保！」

翔平

「だが！甘い！」

翔平は間一髪で避けるが

十六夜

「ふっ」

十六夜が微笑んだ

天羽

「・・・確保・・・」

翔平

「しまった！囧か！？」

ロープで簀巻きにされる翔平

十六夜

「さあ、話してもらいましょう、長官皆の前で」

翔平

「何を話せばいいんだかさっぱりわからないんだが」

十六夜

「とぼけないでください！紀伊が長官に膝枕をしていたところを、播磨さんと常陸さんが見ているんです！」

翔平

「膝枕？（何言っているんだ、あの時俺は・・・回想中・・・）あつ！！」

十六夜

「思い出しましたか」

翔平

「いや、あれは、わざとじゃないし、その前に執務で疲れたから横になっただけであって、故意にやったわけではない、よって俺は悪くない！！」

その時翔平の後ろから播磨が現れた

播磨

「翔平、何一人で納得しているのかしら」

翔平

「いやその、ですね・・・」

播磨

「ふん、まあいいわ、皆が長官公室で待っているから、早く来て」

翔平

「・・・はい」

その後、懸命に訳を話し、皆には納得してもらえた翔平と紀伊であった

トラック諸島 泊地

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「機関停止、双錨泊」

第二連合艦隊は予定道理北東水道を通過しトラック諸島に入港した

啓太

「了解」

播磨

「写真で見るとではずいぶん違うのね」

翔平

「親父が魔改造したんだよ、ほらあそこ見てみたら」

播磨

「うん？あれはドックねえ、それも私が入りそうなくらいの」

翔平

「そうだ、建設するには苦労したと親父が言っていたぞ」

播磨

「へえ、そうなの」

トラック諸島の七曜諸島最大の島、水曜島に大型ドックを4、中型ドックを6作りさらに、ある程度自然を壊さないように、大型船が着岸できる岸壁を作った、これにより、トラック諸島の重要度はかなり高くなり、連合国も最重要拠点とされていた。

翔平

「啓太、全艦に回線を開いてくれ」

啓太

「了解・・・開きました」

翔平

「総員よく聞いてくれ、長い航海ご苦労であつた、今日から、しばらくは敵も攻めてこないだろう、よつて今日から三日間、宿直員以外は両舷上陸を許可する、総員よく休んで英気を養うように・・・以上！」

この放送が終わつた直後、各艦からは内火艇、カッター、が出て行つた

翔平

「うちのやつらは、やることが早いな」

播磨

「そうね」

翔平

「さあてと俺たちも休みますか」

第二連合艦隊全乗組員は、三日間の休日を堪能しまた戦場へと戻るのであつた。

第一六話 トラック諸島に入港（後書き）

作者

「さて、ストックも一応できたし更新だ」

播磨

「なぜストックなんて」

作者

「今週の木曜日から学期末テスト、学生にとって最大の難関、海戦に言い換えるなら、駆逐艦一隻で100隻以上の大艦隊と戦闘するような感じだからな」

播磨

「そゝなのか」

作者

「なんだよ気の抜けた返事は」

播磨

「じゃあ作者、しばらくは更新できないということかしら」

作者

「それは分らない、知らない」

播磨

「ストック出来たんでしょう」

作者

「正確に言つと書きかけ・・・」

播磨

「一回死ね～～バカ作者」

作者

「ギヤアアアアアア」

播磨

「ふっ、ご意見感想お待ちしております」

第一七話 珊瑚海海戦前編

5月7日

南太平洋洋上

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨

現在、第二連合艦隊は、MO攻略部隊の支援艦隊として、南太平洋上を目立つように進行中であつた、ちなみにMO攻略部隊の戦力は・

MO攻略部隊

司令官：井上成美中将 旗艦：戦艦丹波

戦艦

丹波 丹後

空母

龍驤 隼鷹 飛鷹 祥鳳 瑞鳳 龍鳳

重巡洋艦

青葉 加古 衣笠 古鷹

軽巡洋艦

長良 五十鈴 名取 由良 鬼怒 阿武隈

駆逐艦

吹雪 白雪 初雪 深雪 叢雲 東雲 薄雲 白雲 磯波 浦波

綾波 敷浪 朝霧 夕霧 天霧 狭霧 朧 曙

漣 潮

強襲揚陸艦

千歳 千代田 世田谷 文京 黒田
輸送艦

札幌型三隻 油槽艦二隻

航空機

戦闘機 零戦 陣風 100機

攻撃機 天山 流星 40機

爆撃機 彗星 60機

偵察機他 彩雲 雲洋 30機

ちなみに千歳型が強襲揚陸艦になっている理由は、甲標的母艦だったため艦内の格納スペースには余裕がありその格納スペースを上陸用舟艇に置き換えて艦尾にハッチを設けてさらに、少数の航空機を運用できるように飛行甲板を設置した艦に改造されていたまた、巡洋艦、駆逐艦も対空対潜兵装、駆逐艦に至っては、主砲をOTOメラ127mm連装速射砲に改めるなどの大改造を施した、ちなみに、軽巡洋艦は全艦155mm55口径3連装砲3基又は4基に改造されている、もちろん完全自動装填式だ。

以上の戦力をもって、ポートモレスビーを攻略しようとしていた、なおツラギ島は、2日に、攻略完了し、司令官の志摩清英少将は酋長たちを集め島の統制布告を出した、その代償として贈り物を寄付し、また酋長たちの要求を志摩司令官は受諾した、翌日には早々には医療テントの前に原住民の列ができていた、今まで占領してきた地域も、大日本帝国は、解放、建国のため支援などを行っている。

翔平

「さて、作者の長い説明も終わつたし、やらせていただきますか」

あっとうぞ

翔平

「対潜、対空警戒を厳重に！だが、けして許可するまで攻撃するなよ、本艦隊は困るんだから」

啓太

「宜候！」

水兵

「対空レーダーに感！数1、方位075、距離440キロ、データ解析結果米海軍艦載機ダグラスSBDドントレス」

翔平

「敵機が電波を出すまで落とすなよ」

葵

「了解」

米偵察機　ダグラスSBDドントレス

米パイロット

「うん、航跡だ」

米搭乗員

「お！本当だ、多いぞ！」

米パイロット

「高度600まで降りるぞ」

米搭乗員

「何時でもいいぞ」

米パイロット

「いくぞ」

SBDドントレスは艦種が何とか確認できるところまで降下した

米パイロット

「戦艦が6、空母が6おいこの陣容は?!」

米搭乗員

「ああ・・・間違いないこいつらは・・・第二連合艦隊!?!」

米パイロット

「何故こいつらがこの海域に?!」

米搭乗員

「分かん、先日まではトラックにいたはずだが・・・無電を打つぞ」

米パイロット

「早く打て」

第17任務部隊

第17任務部隊の戦力は空母ヨークタウンの代わりに、サラトガがその穴埋めに編入されていた、一応戦力を出しておく以下の通り

司令官：フランク・J・フレッチャー 米少将 旗艦：レキシントン

重巡洋艦

ミネアポリス ニューオーリンズ アストリア チェスター ポー
トランド

オーストラリア（HMAS） シカゴ
軽巡

ホバート（HMAS）

駆逐艦

パーキンス ウォークフェルプス デューウィ ファラガット エ
ールウィン

モナガン モリス アンダーソン ハンマン ラッセル シムス
ウオーデン

空母

サラトガ レキシントン

油槽船

ネオシヨー テイペカノー

水上機母艦

タンジール

航空機

戦闘機 F4F44機

爆撃機 SBD74機

攻撃機 TBD25機

このような史実とさほど変わらぬ戦力で、米艦隊第17任務部隊は、
日本艦隊を迎撃しようとしていた。

士官1

「提督！敵艦隊を発見しました」

フレッチャー提督

「陣容は？」

士官1

「偵察機からの報告によりますと、戦艦6、空母6、巡洋戦艦駆逐艦多数、その後方に輸送船団を確認とのことです」

フレッチャー提督

「なんだとその陣容は?!」

士官1

「はい、あの第二連合艦隊です！」

フレッチャー提督

「なぜだ！情報部は、まだトラックにいていると言っていたじゃないか！」

士官2

「分かりません、ですが敵はまだ我々に気づいていません、ここは攻撃機を出し先制攻撃をしましょう」

士官1

「そうです、先制攻撃をし、空母飛行甲板を発着艦不能にするのがいいと思います」

フレッチャー提督

「・・・よし分かった、攻撃隊発艦用意！」

40分後、攻撃用に機体が準備され発艦した、目指すは第二連合艦隊、連合国では、真珠湾を焼き払い、英独連合東洋艦隊、ドーリットル攻撃隊を撃破した、恐るべき艦隊だと認識されていた、攻撃隊

のパイロット達は、自分たちが初めて日本海軍の艦船を撃沈するかもしれないと、胸を高鳴らせていた。

米攻撃隊隊長

「全機よく聞け、今から俺たちが攻撃するのは、第二連合艦隊の旗艦戦艦播磨だ、ほかの艦には、目を向けるな、分かったか」

攻撃隊パイロット全員

『イエッサー』

米攻撃隊80機は第二連合艦隊に攻撃に向かった

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵

「CICより報告！対空レーダーに感！数80！方位210！距離450！速度約150ノット！本艦隊に接近中！」

翔平

「対空戦闘用意イ！鳳翔に連絡！音神発艦せよ！」

啓太

「宜候！対空戦闘用意イ！」

葵

「空母鳳翔に打電します！」

航空母艦鳳翔

空母鳳翔の飛行甲板ではすでに、20機の音神が待機していた、鳳翔の艦長は、東岡孝彦大佐である

孝彦

「発艦準備は」

水兵

「すでに完了しております」

孝彦

「よし！音神隊発艦せよ！」

鳳翔

「無事全機帰還を祈る」

鳳翔が敬礼をして音神を見送る

昇

「全機ついて来てるか！」

哲也

「もちろんです！」

昇

「よし！よく聞け、敵は80機これからその発分の40機を迎撃残り半分を第二連合艦隊が迎撃する」

哲也

「何故ですか？」

昇

「さあな俺にもよくわからん」

哲也

「なんですかそれ？」

昇

「さあ？おつと来たぞ」

音神の機上レーダーが反応する

哲也

「先に行つていいですか隊長」

昇

「ああ、行つて来い」

哲也

「はい！」

哲也はスロットルを全開にして、米攻撃隊に攻撃をかけようとしていた

哲也

「イッケエエエー」

音神のM60バルカン砲が火を噴く

哲也

「2機撃墜！」

米攻撃隊隊長

「なんだ！」

パイロット1

「あれは・・・ソニック!!」

パイロットの一人が音神を見て叫ぶ

パイロット2

「なんだと！」

米攻撃隊隊長

「落ち着け各機散開！」

パイロット3

「駄目だ、速すぎ・・・」

ゴウーン！

パイロット1

「糞！喰らえ！」

無我夢中で機銃を撃つが軽くかわされて

ズドン

F4Fは爆散した

米攻撃隊隊長

「見えたぞ、第二連合艦隊だ全機攻撃！」

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 CIC

水兵1

「敵機全機本艦に向かってきます！」

翔平

「全艦対空戦闘ッ！全火器使用自由ッ！」

砲雷長

「了解！127mm砲、射撃用意！」

水兵1

「射撃用意よし！」

砲雷長

「撃ちー方始め！」

水兵1

「撃ちー方始め！」

ドン！ドン！ドン！ドン！

CICからの信号が各速射砲に伝わり、射撃を開始する

水兵2

「敵機12機を撃墜残り5機は退却していきます」

翔平

「よし！各空母に連絡！攻撃機発艦」

啓太

「宜候！」

鳳翔、鳳凰、翔龍、瑞龍、萃鶴、勇鶴の6空母から10機ずつ蒼山と音神が発艦した、目指すは、第17任務部隊・・・

第一七話 珊瑚海海戦前編（後書き）

作者

「正直に言います、次の更新はいつになるか分かりません」

播磨

「へへ珍しく勉強するの」

作者

「そうです、これも休憩の間に投稿しています」

播磨

「そつなの」

作者

「そうです、ではこの辺で」

播磨

「ご意見ご感想お待ちしております」

第十八話 珊瑚海海戦中編

5月7日

南太平洋洋上

第17任務部隊

現在、第17任務部隊は、大混乱に陥っていた、攻撃部隊は壊滅し、対空レーダーが敵の編隊を確認したからだ、

フレッチャー提督

「全艦、対空戦闘用意！兵器使用自由！」

フレッチャー提督はいち早く防戦を下令した。

水兵1

「敵機襲来！」

見張りの水兵が敵機らしき機影を見つけたが、それは、蒼山が発射した98式空対艦ミサイルであつた、

フレッチャー提督

「こいつは無人か？」

フレッチャー提督は98式空対艦ミサイルを見て言った、人間が乗るにはあまりにも小さすぎたからだ

フレッチャー提督

「撃ち落とせッ!!」

士官1

「駄目です速すぎますッ!!」

ドォーン、ドォーン

ドン!ドン!ドン!ドン!

タンタンタンタン!

ドドドドドドドド!

重巡の主砲、両用砲、機銃、レキシントンの主砲までもが火を噴く

ズドォーン

レキシントンの巨大な艦体が大きく揺れた

フレッチャー提督

「ッ被害報告急げッ!!」

水兵2

「左舷艦中央に被弾!」

副長

「格納庫にて火災発生!機関室浸水!」

ズドォーン ドッカーン

海で爆発音が響いた

フレッチャー提督

「どうした?!」

水兵1

「重巡洋艦ミネアポリス、ニューオーリンズ被弾!! ミネアポリス大破! 炎上中! ニューオーリンズ・爆沈しました」

水兵3

「駆逐艦パーキンス、ウォーク、フェルプス、デューウィ、ファラガット、エールウィン、撃沈されました!」

水兵2

「空母サラトガ被弾! 火災発生!」

98式空対艦ミサイルは正確に米艦艇に命中しその使命を終えた

ゴオオオオオ ドッカーン

フレッチャー提督

「今度はなんだ!?!」

副長

「格納庫付近での誘爆です!」

フレッチャー提督

「消火はできそうか?」

副長

「最善を尽くしていますが・・・」

その時一人の水兵が艦橋に飛び込んできた

水兵4

「報告！機関室浸水増加！現在艦傾斜8°！」

この報告を聞いた途端、艦のダメージコントロールのトップである副長は青ざめた

副長

「提督・・・もう復旧は・・・」

フレッチャー提督

「・・・これより将旗をアストリアに移動する、無事な艦は各艦の乗員の救助を急げ！」

艦長

「イエス・サー！」

フレッチャー提督

「総員・・・退艦！」

ウイ——ウイ——ウイ——

艦内スピーカーから、退艦を知らせる、警報が鳴った

30分後、空母レキシントンは、沈まずに漂流物となっていた

空母サラトガ

「・・・お姉ちゃん」

飛行甲板には漂流するレキシントンを心配そうな目で見つめていた少女がいた。

その少女は空母サラトガの艦魂であるサラトガであった

サラトガ

「仇は必ず・・・と言っても私ももうだめか」

そのサラトガも艦首に98式空対艦ミサイルが命中していて火災は消火したが、浸水がひどく、現在も全力で排水作業中であったが、復旧の見込みは低かった。

副長

「艦長、機関室まで浸水しました、本艦はもう・・・」

艦長

「分かった、総員退艦」

副長

「イエッサー」

空母サラトガからも、乗員が退艦した

重巡洋艦アストリア

士官1

「提督、空母サラトガの乗員の退去が完了しました」

フレッチャー提督

「そうか・・・自沈はできそうか」

士官2

「はい、駆逐艦による魚雷でしたら」

フレッチャー提督

「救助が終わり次第、自沈処分せよ」

士官1

「イエッサー」

1時間後

士官2

「乗員の救助が完了しました」

1時間たっても空母レキシントン、サラトガはまだ浮いていた

フレッチャー提督

「レキシントンとサラトガの自沈の準備・・・」

そのとき水兵が何かに気づいた

水兵1

「ツ 敵艦隊視認、巡洋戦艦2 駆逐艦1 2 大型輸送艦多数、本艦隊に急速接近中！」

水兵2

「敵艦発砲！」

ズズウン　ズズウン　ズズウン

これは、巡洋戦艦天羽と十六夜の射撃であつた、米艦隊に接近中の艦隊は、天羽と十六夜を、引き抜き一時編入させた、第二支援艦隊だつた

フレッチャー提督

「つく、各艦艇に連絡！煙幕を展開し本艦隊は撤退する！」

士官1

「イエッサー」

巡洋戦艦十六夜　艦橋

水兵1

「敵艦隊撤退していきます」

雄哉

「なんだ張り合いがないな」

十六夜

「雄哉、まだあそこに空母がいるわ」

雄哉

「もうすでに、無人みたいだな」

十六夜

「一寸私見てくるわ」

雄哉

「ああ、頼んだぞ」

空母レキシントン

十六夜

「わあ、攻撃隊の人達やりすぎじゃないかしら」

十六夜は空母レキシントンの飛行甲板に移した
空母レキシントンの飛行甲板は大穴が空き、浸水により、機関室は
全滅もはや誰が見ても廃艦5分前という有様であった

レキシントン

「誰？」

十六夜

「私は、天羽型巡洋戦艦の4番艦十六夜」

レキシントン

「私はレキシントン型のネームシップ、レキシントン」

十六夜

「あなた大丈夫なの」

レキシントン

「大丈夫と言いたいけど、流石にもう無理かも」

十六夜

「大丈夫よ、諦めないで、すぐに神戸に入渠させるから」

レキシントン

「入渠？こんな海のと真ん中で、面白いことを言うのね、日本人は」

十六夜

「冗談ではないわ、ほら」

レキシントン

「あれは？」

レキシントンはドック艦神戸を見て絶句した

十六夜

「自走浮きドック神戸よ」

レキシントン

「あれが噂の」

帝国海軍が大型の浮きドックを所有していることは、航空機による目撃情報である程度は米軍も知っていた

十六夜

「安心して、帝国海軍の工作能力は世界一だから」

レキシントン

「そう・サラトガも入れてくれるの」

十六夜

「もちろんよ」

レキシントン

「よかった、これで」

十六夜

「これで？」

レキシントン

「少し眠れる」

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

一時間後、第二支援艦隊と第二連合艦隊は合流した

啓太

「長官、空母レキシントンとサラトガの捕獲に成功しました」

翔平

「そうか、では、本艦は、三笠、天羽、天月、十六夜、十五夜、秋月以下3隻と共にMO攻略部隊の支援に向かう、他の艦はトラック諸島に寄港せよ」

啓太

「了解、他艦に連絡します」

10分後

葵

「艦隊分離完了しました」

翔平

「よし、全艦最大戦速！MO攻略部隊と合流する」

播磨以下11隻の艦は機関を唸らせ、海面を切るように単縦陣で爆走した。

第十八話 珊瑚海海戦中編（後書き）

作者

「勉強の合間に書いていたら、いつの間にか限のいいところまで来てしまいました」

播磨

「作者、勉強する気あるの？」

作者

「もちろん、そんなものはねえよ」

播磨

「はあゝ・・・大丈夫かしらこんな作者で」

作者

「大丈夫じゃない！大問題だ！！（成績的に）」

播磨

「明日の教科は？」

作者

「数学A、情報A、リスニングの3教科」

播磨

「何時間勉強したの」

作者

「数学を中心に9時間ぐらいかな？」

播磨

「そうなの」

作者

「そうだ・・・さてそろそろ」

播磨

「そうね、ご意見感想お待ちしております」

第十九話 珊瑚海海戦後編

5月8日

第二連合艦隊、第一戦隊はMO攻略部隊に合流しポートモレスビー
攻略へと向かった

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵1

「対空レーダーに感！方位210距離200数1偵察機の模様、機
種はB-17フライングフォートレス」

イージス戦艦播磨のSPY-2対空レーダーが敵機影を捉える

啓太

「撃墜しますか」

翔平

「もちろん、艦橋よりCIC、一式対空ミサイル発射用意！」

CIC

砲雷長

「宜候！一式対空ミサイル発射用意！数1」

水兵2

「了解！・・・一式対空ミサイルの射程圏内に入りました」

砲雷長

「一式対空ミサイル発射用！意！弾数1！後部VLS発射用意！VLS発射用！意、イルミネーター連動！」リンク

砲雷長

「発射5秒前、4…3…2…1…発射」

グワツ　ズツシャアアア――

白い煙を噴き上げて発射される、一式対空ミサイル、

水兵3

「一式対空ミサイル着弾まで5秒…3…2…1…着弾！」

砲雷長

「命中！周辺に敵機影無し！」

艦橋

啓太

「敵機撃墜！」

翔平

「そうか、全艦このまま第一級戦闘配置のまま待機」

啓太

「了解！」

翔平

「よし、このままポートモレスビーまで直進だ！」

葵

「宜候！」

45分後

ポートモレスビー沖10キロ

MO攻略部隊と第二連合艦隊、第一戦隊はポートモレスビー沖10キロの海域にポートモレスビーを囲むように展開していた

啓太

「全艦射撃準備完了！」

翔平

「よし！全艦砲撃開始！」

カッ
ズッドオオーン

MO攻略部隊 旗艦 戦艦備前 艦橋

水兵1

「第二連合艦隊、砲撃を開始しました」

井上

「こちらも、全艦砲撃開始だ！」

砲術長

「了解！撃ち方用ゝ意ッ！」

ズツドオオ——ン

丹波、丹後に搭載されている41センチ砲が射撃を開始する

ズツドオ——ン

ドンドンドン

続いて、重巡洋艦、軽巡洋艦、駆逐艦も射撃を開始する

この艦砲射撃は1時間にも亘って続けられた

第二連合艦隊 旗艦 イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「撃ち方止めー！揚陸艦は陸戦隊と陸軍の揚陸を開始せよ！」

啓太

「了解、連絡します」

世田谷、文京、黒田の艦尾のハッチからLCACが発進する。

千歳、千代田からは、大発が発進する

LCACは25式戦車等の戦闘車両を海岸まで運ぶ
陸軍も一式中戦車、一式対空戦車等の戦闘車両の揚陸を大発で開始する

純平

「総員よく聞け！これより上陸するがくれぐれも己を過信するな、過信は油断につながる、良いか！決して己を過信するな！絶対生きて帰ってくるように、ここで死んでしまつては勘定も、合わないかな」

野村大佐が言つたら、全員が笑つた

純平

「よし、全車、オイルは行き渡つてているかッ！！」

全員

『はい！』

純平

「タービンは回っているかッ！！」

全員

『おおッ！』

純平

「弾はたっぷり持つたろうなッ！」

全員

『ばっちりですッ！！』

純平

「よおし・・・上陸開始！！」

野村率いる、陸戦隊はポートモレスビーに上陸を開始、橋頭堡を築

いた

橋頭堡も築いている間も米軍から散発的な砲撃はあったが、25式戦車の125mm滑空砲で、次々に撃破された、その隙にLCACは、母艦から海岸へとピストン輸送をして、25式戦車15両、20式自走砲20両、装甲車10両他武器弾薬の輸送を終えていた

陸兵1

「隊長！物資の揚陸がすべて終わりました」

野村

「よし、全車射撃をしつつ突撃！」

陸兵1

「了解」

20式戦車はエンジンを唸らせて突撃していった

陸兵1

「隊長！3時の方向に敵戦車ア！数3」

野村

「1号車から3号車応戦用意イ！」

陸兵2

「了解」

米軍が出してきたのは、M3軽戦車であった

陸兵3

「射撃準備よし」

野村

「撃てーッ！」

ドン

25式戦車から放たれた125mmの砲弾は正確にM3に命中し、
M3を粉々にした

米指揮官

「なんだあの戦車は・・・」

米陸兵1

「モンスターだ！」

米指揮官

「何をしている、速く撃たんか」

米陸兵1

「りよ、了解」

米指揮官

「ファイアーッ！」

ドン

ガン

米陸兵2

「弾かれた!!」

当たり前だ

25式戦車は、日本の誇る第4、5世代戦車だ、M3の37mm
戦車砲で効くわけがない

米指揮官

「じ、次弾装て・・・」

ズッドオオン

M3に125mm砲弾が命中した

その後、陸戦隊と陸軍は破竹の勢いで進行し、ポートモレスビーを
わずか2日で攻略した。

5月10日（日本時間）

アメリカ合衆国 首都ワシントンDC

ホワイトハウス

補佐官

「大統領閣下、ポートモレスビーが陥落しました」

ルーズベルト大統領

「なんだと、いくらなんでも早すぎる」

補佐官

「ですが、敵は新型戦車を実戦配備し、この戦車を使って我がM3軽戦車を蹴散らしたようで・・・」

ルーズベルト大統領

「なんだと、あの戦車後進国のジャップ共にそんな戦車が作れるわけわない」

キング大将

「ですが、大統領閣下、日本軍はジェット戦闘機始め誘導ロケット等の数々の新兵器を投入しています、さらに、8万トンクラスの戦艦ハリマクラス、さらに10万トンクラスの戦艦ヤマトを就航させています、残念ながら、我が海軍いえ連合国軍の戦艦では歯が立ちません」

マーシャル大将

「それらの兵器を用いて、日本軍はパールハーバを焼き、フィリピンを占領、さらに、シンガポールをはじめ東南アジアから我が連合軍は完全に駆逐されました」

ルーズベルト大統領

「む・・・問題はそのジェット戦闘機と誘導ロケットそして、ハリマとヤマト・・・」

キング大将

「はい、大統領閣下、それらの兵器を越す兵器を作らなければ、1年後にはハワイいえ、西海岸も占領されかねません」

ルーズベルト大統領

「分かった、戦闘機については、チャーチルとヒトラーに相談しよう、海軍工廠には空母と戦艦の増産を急ぐように連絡しよう、それ

から、ヤマトに対抗できる戦艦を設計させよう・・・キング大将、我々は開戦以来負け続けた、何とかジャップの裏をかく作戦を立てよ」

キング大将

「了解しました」

その日午後ルーズベルト大統領は、英国首相チャーチルと話した、航空機の技術交流強化について・・・

第十九話 珊瑚海海戦後編（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第二十話 暫しの休息

5月15日

帝国海軍 呉海軍工廠

現在、呉海軍基地では、珊瑚海海戦で捕獲した、サラトガ、レキシントンの改造修理中であつた、そのドックの横では、第二連合艦隊の旗艦イージス戦艦播磨、三笠が2年に一度の、機関等の定期点検が行われていた、定期点検の期間は5日間とされていた、その間、第二連合艦隊の旗艦はイージス戦艦紀伊になっていた。

イージス戦艦紀伊 長官室

翔平

「・・・っあ、間違えた」

翔平は仕事であつた

コン コン

翔平

「どうぞ」

山本

「林君、失礼するよ」

第一連合艦隊司令長官山本五十六大将与宇垣纏少将が入ってきた

翔平

「山本長官、宇垣参謀長も、どうしたのですか突然」

山本

「いや、次の作戦の最終の打ち合わせをやるうと思ってな」

翔平

「そんな事でしたら、此方から行きましたのに、あつどうぞかけてください」

山本

「山本

「うん、林君いよいよ、M I作戦改が実行されるときは来た、我々が史実で大敗北した海戦を乗り越える時がな」

翔平

「はい、その作戦のために、すでに第一潜水機動艦隊がPに向かっています」

宇垣

「それに最新鋭の空母大鳳型2隻さらに空母雲龍型4隻もすでに就役、現在完熟訓も終了し、現在第二機動部隊に編入され、陸奥湾で待機中です」

第二機動部隊・・・空母大鳳型2隻、空母雲龍型4隻、戦艦、上総、下総、豊前、豊後、重巡最上型6隻、軽巡阿賀野型10隻、駆逐艦30隻で編成された艦隊の事である

翔平

「それと、実は、英国、独逸に動きがあります」

山本

「どんな、動きだ」

翔平

「英国はH部隊を太平洋に回航させるつもりです、それと独逸は大量のUボートを東シナ海に送り込むつもりです」

宇垣

「H部隊ですか、確か地中海に展開されていた部隊ですな」

翔平

「そうです」

山本

「このタイミングで、ミッドウエーに出てくるか」

翔平

「たぶん出てきます、その時は戦艦部隊に出てもらいます」

宇垣

「そうすると艦船の油の消費量が膨大な量になるぞ、第二連合艦隊はいいとして、他の艦は重油で動く、内地の燃料備蓄が底をついてしまうぞ」

翔平

「その所は問題ないでしょう、南方からの燃料輸送は順調ですし、内地の燃料備蓄は十分あります、それに、満州国からも極秘に大量の原油が輸入されてますしね」

満州では、史実の大慶油田を1939年に発見し、連合国には極秘で、掘削施設、生産施設等の設備を建設、今年に4月やつと生産が始まった、大油田である、これにより満州国の港湾施設も大規模なものに拡張した。

山本

「それは俺も聞いている、完全なる独立と、軍整備の手助けと引き換えに、だろう」

翔平

「はい、もうすでに、輸出用の駆逐艦5隻と、海防艦10隻、さらに防空用の零戦21型100機が輸出されています」

このように亜細亜の国々では、独立を果たした国の要請があれば、大日本帝国は、資源等との引き換えで、艦船、戦闘機等を譲渡している、もちろん、ソナー、レーダー等の電子機器と主砲は、劣化版だが、この時代の、連合国のと、比べるとまだ日本製の方が性能的に上であつた

山本

「素早いな」

翔平

「いえ、全部私がやった事じゃありませんから」

山本

「これで問題は一つ解決したな、後は艦隊の位置だが」

翔平

「小沢中将の第一機動部隊は第一連合艦隊と事実通りの航路でお願い

います」

山本

「林君、君達はどうするんだ？」

翔平

「我々は、そうですね、南回りに、連合軍艦隊を挟み撃ちにしましよう」

山本

「林君、やれるのかね、」

翔平

「もちろんです、山本長官」

山本

「そうか、では次はダッチハーバーを攻撃する艦隊だが」

宇垣

「それは、第二機動部隊でいいと思います、ダッチハーバーには、敵の有力な戦力は確認されていませんし」

翔平

「そうですね、それがいいでしょう」

山本

「でもそうすると本土の守りが」

翔平

「そこは、本土防衛航空隊に任せましょう」

本土防衛航空隊とは、文字通り、航空隊であり、主な機体は、一式陸攻改、銀河、日本初の4発機、深山を中心に編成されており、本土に侵攻してきた敵艦隊に攻撃する部隊だ。

山本

「そうだったな」

翔平

「そうですよ、それにまだ、戦艦他巡洋艦駆逐艦30隻以上を本土に残しておきますから、大丈夫ですよ」

山本

「ではこれで本土の防衛も強固になったわけだ」

翔平

「はい、しばらくの間は大丈夫でしょう、でも米国の工業力を甘く見てはいけません」

山本

「そうだな、こっちはその分、策で勝たねばならないな」

翔平

「はい」

山本

「では次に・・・」

この作戦会議は、1時間続き、より綿密に作戦が立てられた

第二十話 暫しの休息（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

第二十一話 バトル・オブ・ミッドウェー (前編)

5月27日 (海軍記念日) 午前五時

広島湾 柱島泊地

広島湾柱島から、第一、第二連合艦隊と第一機動艦隊が出撃した、同じころ、陸奥湾からも第二機動艦隊が出撃した、艦隊は史実どおりの進路をとり、哨戒機または哨戒ヘリを随時飛ばしていた、ここで艦隊の編成を説明しよう。

第一連合艦隊

司令長官：山本五十六大将 旗艦：戦艦大和

戦艦

大和 武蔵 長門 陸奥 伊勢 日向 扶桑 山城

空母

龍驤 隼鷹 飛鷹 祥鳳 瑞鳳 龍鳳

重巡洋艦

高雄 愛宕 摩耶 鳥海 青葉 加古

防空軽巡洋艦

阿賀野型12隻

駆逐艦

松型32隻

補給艦

一等補給艦5隻

第二連合艦隊

司令長官：林翔平大将 旗艦：イージス戦艦播磨

戦艦

播磨 三笠 紀伊 尾張 常陸 駿河

空母

鳳翔 鳳凰 翔龍 瑞龍 萃鶴 勇鶴

巡洋戦艦

天羽 天月 十六夜 十五夜 石狩 十勝

駆逐艦

秋月型20隻

補給艦

札幌型3隻

第一機動艦隊

司令長官：小沢治三郎中将 旗艦：赤城

戦艦

金剛 比叡 榛名 霧島

空母

赤城 加賀 蒼龍 飛龍 翔鶴 瑞鶴

重巡洋艦

利根 筑摩

防空軽巡洋艦

阿賀野型12隻

駆逐艦

松型32隻

補給艦

一等補給艦5隻

第二機動艦隊

司令長官：山口多聞少将 旗艦：空母大鳳

戦艦

上総 下総 豊前 豊後

空母

大鳳 雷鳳 雲龍 嵐龍 雷龍 虹龍

重巡洋艦

最上 三隈

防空軽巡洋艦

阿賀野型12隻

駆逐艦

松型32隻

補給艦

一等補給艦5隻

第二支援艦隊

司令長官：小田切理 旗艦：大型自走浮きドック神戸

巡洋戦艦

石垣 佐渡

防空軽巡洋艦

阿賀野型6隻

駆逐艦

秋月型15隻 松型30隻

自走浮きドック

神戸 横浜 大阪 名古屋、

強襲揚陸艦

新宿 中央 文京 台東

輸送艦

札幌型5隻

総参加艦艇 292隻

総参加航空機 1500機以上

これを見ての通り、帝國海軍の総力を結集した作戦であり、帝國海軍がこの作戦に負けられない、意気込みが反映されていた、さらに、極秘に角田覚治少将率いる、第一潜水機動艦隊がPつまりパナマ運河に進撃中だ。

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵

「今外洋に出ました」

翔平

「よし全艦、針路変更、マーシャル諸島へ機関第二戦速、両舷一杯」

水兵

「よゝそろゝ」

翔平

「参謀長、対潜警戒を厳重に」

啓太

「了解！」

第二連合艦隊は、第一連合艦隊、第一機動艦隊、第二支援艦隊と離れ、大きく南に回り、マーシャル諸島近海から針路をミッドウェー島に変更して進撃する予定であつた。

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵

「第二連合艦隊離れます！」

山本

「よし、本艦隊はこのまま、ミッドウェー島に進撃する」

宇垣

「了解」

山本

「それと、この電文を大本営に打つといてくれ」

宇垣

「了解」

第一連合艦隊、旗艦大和から、大本営に向けて電文が打たれた、

発、第一連合艦隊、旗艦大和 宛、大本営

第一連合艦隊八、AF攻略二出撃ス

という短い電文であつたが、この電文は米軍の諜報部に感知されて

いた。

6月5日 ミッドウェー近海

第一機動艦隊 旗艦空母赤城 艦橋

士官¹

「総航空機発艦用意イ！」

空母赤城の飛行甲板では、すでに、攻撃隊の発進準備を終えていた

小沢

「第一次攻撃隊発艦はじめッ！」

飛行甲板に待機していた、第一次攻撃隊の零戦、陣風、彗星、天山が爆音を響かせて発艦していく。

続いて、加賀、飛龍、蒼龍、翔鶴、瑞鶴からも攻撃隊が発艦していく、

第一次攻撃隊の総数は300機、

蒼空へ荒鷲が翔けていく

その荒鷲の中には、30機ほどの、双発機、銀河改も含まれていた、銀河改は、大型正規空母翔鶴型、又は大鳳型で運用することを前提とした機体であり、射出機によって、発艦する、もちろん機体の強度も、強化されている。

小沢

「アメさんびつくりするだろうな」

草鹿

「まさか、米軍も双発機が飛んでくるとは思はないでしょう」

小沢

「それもそつだ、電探員、対空電探から目を離すな！」

水兵 1

「了解」

ミッドウェー島、米守備隊

『空襲警報発令！空襲警報発令！』

ミッドウェー島の米守備隊は、迎撃準備を調経つつあった

米兵 1

「来いよ、ジャップ！」

米兵 2

「俺が真つ先に落としてやる！」

米対空陣地部隊長

「来たぞ！手厚く歓迎してやれ！」

隊長が言った途端、対空陣地から、対空砲火が上がる

先陣を切った、銀河改30機が、陣地に25番爆弾を投下していく。

米兵1

「おい、何故双発機が！」

米兵2

「知るか！」

米対空陣地部隊長

「喋ってないで、どんどん撃って！」

その時はるか遠くから轟音が響いた

米兵2

「なんだ！」

轟音の正体は・・・

米兵3

「ソニックだ！」

第二連合艦隊の音神と蒼山合計40機が到着した

米対空陣地部隊長

「撃ってー！弾幕を張れ！」

音神、蒼山は、爆弾を滑走路、対空陣地に投下したのと同じように引き揚げた

その後、第一次攻撃隊も投弾を終えて母艦に帰っていった。

第一機動艦隊 旗艦空母赤城 艦橋

士官1

「第一次攻撃隊の収容急げ！」

小沢

「収容終わり次第、防空戦闘機を全部出せ！」

草鹿

「了解」

30分後

草鹿

「第一次攻撃隊収容完了！」

水兵1

「電探に感！敵機来襲ッ！！数約200機ッ！！」

小沢

「米軍は手持ちの空母を持ってきたみたいだ」

草鹿

「そうですね」

水兵2

「ちょっと待ってください、別方向からも、反応があります」

小沢

「なに！」

水兵2

「数約100機ッ！！速度約290ノット！！」

草鹿

「290ノット！違いではないのか！」

水兵2

「いえ、確かに、290ノットです間違いありません」

小沢

「なら、きっとあれだろう」

草鹿

「あれとは？」

小沢

「多分、英海軍のシーファイアだろう」

草鹿

「ですが、戦闘機ですよ」

小沢

「戦闘機でも物は使いようだ、乱戦になったら」

草鹿

「あっ」

小沢

「その隙について、米軍が攻撃をかける」

草鹿

「こうしてはいられません」

小沢

「ああ、速く迎撃機を上げるんだ！」

赤城と加賀から零戦、陣風が発艦する。赤城と加賀は防空指揮所で敬礼して見送る。

赤城

「気をつけて・・・」

加賀

「頑張ってくれ・・・」

一時間後

水兵3

「右舷前方、敵雷撃機接近！」

士官1

「右舷対空砲座撃ち方始めッ！！」

水兵 4

「一、二番高角砲、射撃開始！」

ドン ドン ドン ドン

赤城の高角砲が火を吹く

水兵 5

「1番機関砲射撃用意よし！」

水兵 6

「2番準備よし」

士官 2

「各銃座自由射撃！」

水兵 5・6

『了解！』

バババババババ

米雷撃機デバスターが爆散する

水兵 5

「敵機撃墜イ！」

士官 2

「臨戦態勢を解くな」

水兵5

「了解」

その時

水兵1

「敵機イー直上！！急降下アー！！」

上空から、米急降下爆撃機ドントレスが降下してきた！

青木艦長

「面々舵一杯ッ！」

操舵手

「よゝそろゝ」

赤城の艦体が針路を急速に変える

水兵2

「敵機投弾！」

青木艦長

「くっ総員衝撃に備えろ！！」

ズッガアアアアン

ズッガアアアアン

ズッガアアアアン

青木艦長

「ッ被害報告ッ！急げッ！！」

士官1

「飛行甲板に直撃弾！数3！飛行甲板は使用不能です！」

水兵2

「飛行甲板にて火災発生！現在消火作業中です！」

青木艦長

「機関室ッ！報告急げ！！」

青木艦長が高声電話に向かって叫ぶ

すると

機関長

「こちら機関室、機関6機とも異常なし！」

と返ってきた

小沢

「おい！赤城しっかりしろ！」

赤城

「お、小沢、私は・・・大丈夫よ・・・」

小沢

「そうか、火災は甲板だけだ、沈む心配はない」

その時

水兵1

「加賀、翔鶴、上空に急降下アアア!!」

加賀と翔鶴に米急降下爆撃機ドーントレスが逆落としに来た!!

第二十一話 バトル・オブ・ミッドウェー (前編) (後書き)

ご意見感想お待ちしております。

第二十二話 バトル・オブ・ミッドウェー (中編)

6月5日

第一機動艦隊

空母 加賀

水兵 1

「敵機イー直上!!急降下アー!!」

岡田艦長

「取ッ舵一杯!!」

操舵員

「よッそろッ」

ドン ドン ドン ドンッ!!

ダダダダダダッ!!

高角砲、対空機銃が敵機に向かって火を噴く

水兵 2

「敵機投弾!!」

岡田艦長

「機関一杯!総員衝撃に備えろッ!!」

加賀は機関を唸らせ、加速するが・・・

ズッガアアアアン

ズッガアアアアン

ズッガアアアアン

ズッガアアアアン

被弾した、さらに

ズッガアアアアアン

機銃弾が命中し、操縦不能になったドーントレスが1機

飛行甲板の後部昇降機付近に激突した

岡田艦長

「ひ、被害報告！」

水兵1

「飛行甲板に直撃弾3 飛行甲板は使用不能です」

水兵2

「後部昇降機付近に敵爆撃機が激突！付近にて火災発生！」

岡田艦長

「消火急げッ！！消火が済み次第、飛行甲板の養生を開始せよ！」

士官2

「了解！」

空母 翔鶴

水兵3

「左舷上空、敵機急降下アア！！」

有馬艦長

「機関最大戦速、面へ舵一杯！」

操舵手

「よゝそろゝ」

水兵3

「敵機投弾ッ！間に合いませんッ！」

有馬艦長

「つく、総員衝撃に備えろッ！！」

ズッガアアアアン

ズッガアアアアン

有馬艦長

「被害報告！！」

水兵 4

「飛行甲板後方に直撃弾されど、火災なし！被害軽微！！」

翔鶴型空母は史実とは違い、飛行甲板を装甲化、急降下爆撃対策を図っている

有馬艦長

「そうか、翔鶴も大丈夫ですか」

翔鶴

「ちよつと痛かったけどこのくらい平気よ」

有馬艦長

「それはよかった」

水兵 3

「旗艦赤城から信号！<敵艦隊へ向けて攻撃隊を準備せよ>です」

有馬艦長

「そうですか・・・彗星、天山発進準備！」

士官 3

「了解」

格納庫から彗星、天山と護衛の零戦と陣風、計90機があげられる。

??

「有馬艦長」

有馬艦長

「何でしょうか、野中大尉」

野中大尉、陸攻操縦の腕を買われ、翔鶴の銀河改隊の隊長をしていた

野中

「我々も出撃許可を!!」

有馬艦長

「ですが、銀河改は、先ほどのミッドウェー空襲で被弾機が多く修理しないと使えない気が多いとか」

野中

「いえ、先ほどの機体とは別に、15機の銀河改が既に攻撃準備を終えて、命令待ちです」

有馬艦長

「なっ!」

野中

「艦長!出撃許可を!」

有馬艦長

「・・・分かりました、銀河改発進準備!」

野中

「ありがとうございます」

有馬艦長

「野中大尉、必ず帰還してください」

野中

「了解、全機連れて帰りますよ」

飛行甲板では既に、天山、彗星と護衛の零戦、陣風が発進準備を整えていた、

士官3

「銀河改を飛行甲板に！」

後部の昇降機から銀河改が飛行甲板にあげられる

水兵5

「天山、一番機発艦せよ」

天山が風を切って発艦していく

翔鶴に続いて、瑞鶴、蒼龍、飛龍からの攻撃隊があげられる。

30分後

水兵5

「零戦、陣風、全機発艦しました」

士官3

「よし！次、銀河改発艦準備イ！」

水兵5

「よゝそろゝ」

銀河改がカタパルト発艦のため、艦首に運ばれる

水兵 6

「射出機連結よし」

水兵 5

「射出機圧力一杯！」

士官 4

「銀河改、発艦せよ！！」

ズッシャアア

射出機から銀河改が大空へ飛び立つ

第一連合艦隊 旗艦

戦艦 大和

水兵 7

「赤城、加賀被弾！火災発生！」

山本

「やられたか」

宇垣

「でも、消火はできそうです」

士官 5

「赤城、加賀から報告！両空母とも火災あれど、沈没の心配はなし

安心されたし、だそうです」

山本

「そうか」

水兵7

「敵機襲来！」

高柳艦長

「対空戦闘用意！」

山本

「敵機の機種は」

水兵7

「ちょっと待ってください・・・機種判明、英攻撃機ソードフィッシュ！」

山本

「やはり」

宇垣

「この近くに英空母部隊もいると」

山本

「その可能性が高いだろう」

宇垣

「なら、索敵機の機数を増やしましょう」

山本

「いや、もうすぐ連絡が来るだろう」

宇垣

「そうですか？」

宇垣が首をかしげていると

水兵 8

「報告！」

水兵が艦橋に飛び込んできた

水兵 8

「第二連合艦隊より報告！を発見、貴艦隊より北西400キロの地点に英空母部隊を発見！」

山本

「うゝん、近いな」

宇垣

「攻撃機を出しますか」

山本

「いやその地点なら」

山本が海図を指す

宇垣

「っあ」

山本

「攻撃隊の救難用に出してあった、第二戦隊がいる」

第一連合艦隊は、攻撃隊の救難、誘導用に戦艦伊勢を旗艦とする第二戦隊を北西300キロの海域に展開させていた

宇垣

「今すぐに、第二戦隊に連絡します」

宇垣参謀長が艦橋から飛び出して言った

高柳艦長

「主砲発射準備」

砲術長

「主砲三式弾装填！」

水兵9

「装填完了！」

砲術長

「方位、右2度修正！撃ち方用ゝ意！」

高柳艦長

「大和行くぞ」

大和

「はい！」

高柳艦長・大和

『撃つ〜〜!!』

ズツドオオオオ——ン

大和から放たれた三式弾は、ソードフィッシュの10メートル手前で炸裂し、ソードフィッシュを全機撃墜した。

水兵8

「電探感なし」

山本

「油断するな、警戒態勢で待機」

宇垣

「了解」

第16任務部隊 旗艦

空母 エンタープライズ

米士官1

「攻撃隊より報告！敵大型空母2隻炎上しているとのことですよ」

スプルーアンス提督

「そうか！よくやってくれた」

スプルーアンスが嬉しそうに言った

「これも、英海軍との共同戦線のおかげだな」

参謀達も皆嬉しそうだ

ここで米海軍と英海軍の艦隊編成を説明しよう

第16任務部隊

司令官：レイモンド・A・スプルーアンス米少将 旗艦：エンタープライズ

重巡洋艦

ペンサコーラ ソルトレイクシティ ノーザンプトン ルイビル ヒューストン

オーガスタ ニューオーリンズ アストリア ミネアポリス

軽巡洋艦

アトランタ ジュノー サンディエゴ セントルイス ヘレナブルックリン フィラデルフィア

空母

エンタープライズ ヨークタウン ホーネット ワस्प レンジヤー

駆逐艦

ニブラック リヴァモア エバール プランケット ケアニー グウィン メレディス グレイソン モンセン ウールゼイ ラドロ エディソン エリクソン ウィルクス ニコルソン スワンソン イングラハム ブリストル エリソン ハンブルトン ロッドマン エモンズ

給油艦

マリアス マナティー

航空機

合計 430機

さらにこの部隊とは別に、ウィリアム・パイ中將が率いる、旧式戦艦7隻もミッドウェー島より150キロの地点にいる。

では次に英海軍の艦隊を説明しよう

英国太平洋艦隊

司令官：エドワード・サイフレット中將 旗艦：イラストリアス

戦艦

クイーン・エリザベス ウォースパイト ヴァリアント

重巡洋艦

ヨーク エクセター

軽巡洋艦

アルゴノート ボナヴェンチャー カリブデイス クレオパトラ

空母

イラストリアス フォーミダブル ヴィクトリアス ハーミーズ

駆逐艦

ミルン マラータ マスケティーア ミュルミドン マッ

チレス ミーティア マーン マーティン ラフォーレイ

ランス グルカ

航空機

合計 128機

英国太平洋艦隊には、戦艦が配備されているが、空母との速力差があるため、現在、パイ中將が率いる、艦隊に、臨時編入中だ

スプールアンス提督

「だが、まだ空母の数は歴然だ、これを機に一気に叩くぞ、第二次攻撃隊発艦準備……」

そのとき、艦橋に水兵が飛び込んできた

米水兵 1

「レーダー室より報告！敵機来襲！数約200機！！」

スプールアンス提督

「なんだと……急いで防空戦闘機を出せッ！！」

スプールアンス提督が焦りながら指示を出す。

スプールアンス提督

「こんな所で一隻でも空母を失えば……この戦争……」

さらにスプールアンス提督に追い打ちをかけるような、電文が飛び込んだ

米士官 1

「提督！英国太平洋艦隊より緊急電です！」

スプールアンス提督

「どうしたんだ」

米士官 1

「はっ 読みます。 < 我、 敵艦隊の攻撃を受ける。 敵艦隊は新型戦艦 4 隻を含む強力な水上打撃艦隊。 至急応援を求む >。 以上です」

スプールアンズ提督

「なんだと！」

第二十二話 バトル・オブ・ミッドウェー (中編) (後書き)

ご意見ご感想お待ちしております。

第二十三話 バトル・オブ・ミッドウェー (後編)

ミッドウェー沖

第一連合艦隊

第二戦隊 旗艦 戦艦伊勢 艦橋

水兵1

「対水上電探に感！敵艦隊！空母3、重巡2、軽巡4駆逐艦多数！
まもなく主砲の射程圏内に入ります」

この第二戦隊を率いているのは、松田千秋少将

松田

「主砲戦用意！全艦最大戦速！」

士官1

「よゝそろゝ」

武田艦長

「砲術長！主砲射撃準備はできているか？！」

砲術長

「もちろんです艦長！すでに全砲塔には、徹甲弾が装填済みです」

武田艦長

「よし、距離3万5千で射撃を開始する」

砲術長

「了解」

英国太平洋艦隊

旗艦 空母 イラストリアス 艦橋

英水兵 1

「前方約3万8千に艦影！視認！敵艦隊です」

英士官 1

「なんだと！何故気づかなかった、レーダーは？」

慌てる英国艦隊の司令部

英水兵 2

「レーダー室より報告！戦艦らしき艦影を発見しました！」

サイフレット提督

「つく、全艦180度回頭、駆逐艦隊に煙幕を張らせる！」

英国艦隊は一斉に回頭する

英水兵 1

「敵艦隊発砲！来ます！」

距離が3万5千メートルになり、第二戦隊の旗艦伊勢が発砲、続いて日向、扶桑、山城も射撃を開始した、

サイフレット提督

「大丈夫だ、まともなレーダーも持っていない、ジャップが初弾であてるわけg・・・」

ズシュウウウウンッ！！

ズシュウウウウンッ！！

ズシュウウウウンッ！！

英水兵1

「夾叉されました！」

サイフレット提督

「落ち着け！まぐれに決まっている、ジャップg・・・」

ズツドオオオオオオンッ！！

サイフレット提督

「どうしたッ！」

英水兵1

「空母ハーミーズ・・・轟沈」

戦艦日向が放った、6発の徹甲弾のうち、一発がハーミーズの飛行甲板を突き破り、機関室で役目を終えた徹甲弾が、ハーミーズの竜骨を押し折った、その結果、ハーミーズは、くの字に折れ、1分もかからずその姿を深い海に沈めた。

??

「そ・・・そんな、ハーミーズ姉さま！」

目の前で沈み逝く、ハーミーズの名を叫ぶ、イラストリアス

イラストリアス

「・・・許さない・・・絶対許さないわよ」

その時、

伊勢が第二射を放った

第一連合艦隊

第二戦隊 旗艦 戦艦伊勢 艦橋

水兵1

「敵空母撃沈！」

砲術長

「やるなあ、日向の連中」

武田艦長

「感心している場合ではないぞ砲術長、日向の連中に後れを取るな」

砲術長

「了解、第二射用意イ！」

砲塔長1

「1番主砲、装填完了」

艦内電話を通じ一番主砲塔から装填完了の連絡が入る

砲塔長2

「同じく2番主砲装填終わりッ!!」

砲術長

「第二射用意!完了!」

武田艦長

「撃ッッッ!!」

ズッドオオオッン

水兵1

「着弾・・・今!」

水兵2

「敵空母、艦橋に命中弾確認!敵空母速力低下」

水兵3

「敵巡洋艦こちらに向かってきますッ!」

武田艦長

「目標変更、敵巡洋艦に照準!」

砲術長

「了解!」

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

米士官 1

「英国太平洋艦隊旗艦イラストリアスからの通信が途絶しました」

米水兵 1

「敵機、来ますッ!!」

スプールアンス提督

「くッ、各銃座自由射撃開始! 全兵器使用自由!」

米艦隊旗艦エンタープライズが対空砲火を撃ち上げる、それを合図に重巡、軽巡、駆逐艦も、必死に弾幕を張る、

米水兵 2

「左舷より敵機、雷撃体勢!」

米士官 1

「何としても撃ち落とせ!」

米水兵 3

「駄目だ、上からも来やがったッ!!」

急降下爆撃機彗星 2機が、エンタープライズに襲いかかった

エンタープライズ

「来るなッ!! ジャップッ!!」

エンタープライズが叫びながら、セイバーで彗星を切ろうとする

それに伴い、対空砲火が彗星に向けられる

だが、

彗星はそれに臆することなく、

急降下を敢行する

米水兵1

「敵機投弾！回避を！！」

艦長

「面〱舵！」

米操舵手

「アイ・サー」

操舵手が舵輪を懸命に回す

だが、

ズガーン

ズガーン

250キロ爆弾2発が、エンタープライズの飛行甲板、中央と後部に命中した

エンタープライズ

「グハアアッ！！」

エンタープライズが吐血する。軍服が血だらけになる。

エンタープライズ

「くっ、このぐらいで・・・」

セイバーを杖のようにして、何とか立つすると・・・

彼女の目に映ったものがあつた

後方で必死に対空戦闘を行っている

空母ホーネットに

忌々しい、日の丸をつけた双発機が

襲いかかろうとしていた

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「ほう、艦爆隊の連中やるじゃないか」

野中

「よし、最後尾のヨークタウン型からだ！」

『了解』

無線から、銀河改全機の搭乗員が答える

銀河改の発動機、誉一二型が唸る、

野中

「まだだぞ・・・」

猛烈な対空砲火を潜り抜けて

野村大尉機が雷撃体勢に入る

野中

「いまだ！投下アア！！」

ズツシャア

銀河改から九一式航空魚雷改2が投下された

九一式航空魚雷改2は真っ直ぐ、突き進み

空母ホーネットの艦尾に命中した

野中

「やったぞ、命中だ」

銀河改搭乗員1

「艦尾なら、推進器か舵のどちらかに被害を与えているはずですよ」

野中

「全機攻撃は終わったか」

銀河改搭乗員2

「はい、終わったようです」

野中

「よし、後は、第二連合艦隊に任せる、全機帰還する」

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

米士官1

「敵機が引き揚げます」

スプールアンズ提督

「全艦の被害を報告せよ」

米士官2

「了解、空母ヨークタウン、ホーネット中破、ワスプ、レンジャーは大破しています」

艦長

「本艦は飛行甲板後部に爆弾が命中し、発艦はできませんが、着艦はできません」

スプールアンズ提督

「・・・英国艦隊は？」

米士官 1

「現在、巡洋艦ヨークから撤退するとの無電を傍受しました」

スプールアンス提督

「ヨークだと、旗艦のイラストリアスはどうしたんだ」

米士官 2

「はい、報告だと、敵戦艦からの砲撃を艦橋に受けて・・・」

スプールアンス提督

「・・・そうか・・・本艦隊はこれより撤退する、戦艦部隊にも打電せよ」

米士官 1

「了解」

米水兵 1

「敵機来襲！」

第17任務部隊に第二次攻撃隊が襲来した

スプールアンス提督

「まだ来るか・・・対空戦闘用意！」

米士官 2

「アイ・サー」

第二次攻撃隊

第二次攻撃隊には、第二連合艦隊の音神、蒼山そして、何故か電空が一機含まれていた

その電空に搭乗していたのは・・・

翔平

「おっ、山本長官見えてきましたよ」

山本五十六

「おっ本当だ、機長もう少し降りられないか？」

第一第二連合艦隊の長官であつた。

伊藤整一

「何言っているんですか、山本長官」

伊藤整一中将も乗っていた

翔平

「もう少し高度を下げないとよく見えないじゃないか」

機長

「林長官まで、これ以上高度を下げたら間違いなく、対空砲火にやられますよ」

翔平

「だ、そうですよ、山本長官」

山本五十六

「それは残念だ」

翔平

「大丈夫ですよ、なにせ着艦を敢行するのですから」

山本五十六

「そうだったな」

機長

「林長官、音神隊が突撃命令を待っています」

翔平

「よし全機突撃！」

機長

「了解」

音神 山口大尉機

昇

「命令が来たぞ、全機突撃、アメさんを脅かしてやれ」

哲也

「了解、では先に行きます」

昇

「おお、行つて来い」

哲也

「では、行つてきます！」

おい、どこかに買い物に行くみたいな会話だな

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

米水兵1

「敵機一機突っ込んでくる、速い！」

スプールアンス提督

「何としても撃ち落とせッ！これ以上攻撃されたらパールハーバに帰れなくなるぞ！」

音神が超音速でエンタープライズの艦橋横一メートルの地点を通過する

すると

バリッ

艦橋の防弾ガラスが全部割れた

スプールアンス提督

「わっ、何が起こったんだ！」

米士官2

「分かりません、敵機が高速で通過したらいきなり・・・」

スプールアンス提督

「・・・まさか・・・奴らは音速を超えているのか？」

そつだ、と言わんばかりに、音神が急降下や急旋回を繰り返す

それから30分間、音神、蒼山は米艦隊の周りを高速で飛び回り

米艦隊、将兵の精神を削った

スプールアンス提督

「なぜだ、何故奴らは、一思いに攻撃しないのだ！」

米士官1

「分かりません、でも確かなのは、我々は日本軍から逃げられない
と言つ事です」

その時さらに米艦隊に報告が舞い込んだ

米水兵3

「レーダー室から報告敵艦隊探知！大艦隊ですッ！！」

スプールアンス提督

「・・・」

スプールアンス提督は黙り込んでしまった

制空権は皆無、さらに、強力な敵艦隊が襲来したら

米水兵1

「敵双発機が接近中！」

スプールアンス提督

「撃ち落とせ」

米水兵2

「それが攻撃をかける様子が・・・」

スプールアンス提督

「なんだと・・・」

スプールアンス提督は、艦橋の割れた窓から、問題の双発機を見る

スプールアンス提督

「・・・」

確かに、攻撃をかける気配はなさそうだが、脚を出しているし、何より速度が遅い

スプールアンス提督

「・・・何をするきだ？」

もちろん接近中の機体は、電空だ

知つての通り、電空つまりV-22オスプレイはテイルローター機でありヘリコプターのように、着陸、離陸ができる。

電空機内

機長

「長官、着艦しますよ」

翔平・山本

『たのんだ』

機長

「了解！」

伊藤整一

「それにしてもどうして私をわざわざ軍司令部から呼び寄せたのですか」

山本五十六

「敵将、スプールアンズと友好があるだろう？」

伊藤整一

「はい、駐米武官時代に」

山本五十六

「うん、今回スプールアンズ少将との交渉には君が必要だと思ったから呼んだんだ」

伊藤整一

「そうですか」

機長

「行きますよ」

翔平

「頼んだ」

機長

「テイルト変更・・・90度!!」

電空の発動機が90度になる

機長

「着艦ッ!!」

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

スプールアンス提督

「なッ!!」

スプールアンス提督は、奇怪な双発機が、飛行甲板上空に近づき、上空で静止するのを見て驚愕した、

米士官1

「空中で静止している・・・」

米水兵1

「おい、見る!着艦するきだ」

米将兵も同じく驚愕していた

スプールアンス提督

「・・・私は甲板に出る」

スプールアンスは艦橋から出ようとする

米士官2

「提督！お待ちください！危険です！」

士官が止めようとする

スプールアンス提督

「ふっ・・・大丈夫さ、感だが、旧友が語りに来たような気がするね」

スプールアンス提督は艦橋から出て行った

米士官3

「提督！」

後から、士官の一人が水兵を数人伴なってついていく

電空機内

機長

「全着艦作業終了！！」

山本五十六

「お見事！」

翔平

「では行きますか」

伊藤整一

「はい」

翔平たちが電空から降りると・・・

翔平

「う・・・」

銃剣を差した小銃に囲まれた

山本五十六

「やっぱり、銃口に囲まれるのは、いやだな」

伊藤整一

「そうですね・・・アッ！」

伊藤整一中将は見知った顔を見つけた

それは、駐米武官だったところに知り合った友人であった

伊藤整一

「レイモンド」

米将兵の中から一人の将校が出てくる

スプールアンス提督

「セ、セイイチ、どうしてここに」

伊藤整一

「交渉にさ」

山本五十六

「そうです、我々は交渉に来たのです」

スプールアンス提督

「・・・士官室にお連れしろ」

米士官3

「ア、アイ・サー」

空母 エンタープライズ

士官室

スプールアンス提督

「それにしても・・・アドミラル・ヤマモトを始め、日本海軍の首脳陣が何の用ですか？」

山本五十六

「率直に言いますと・・・降伏を勧告に来ました」

そう山本が言うと、米首脳陣が一斉に笑い出した

スプールアンス提督

「ハハハハ・・・出来る、分けないでしょう！我々は制海権こそ皆無ですが、多数の巡洋艦、駆逐艦に守られている」

翔平

「ですが、私の艦隊が今あなた方の艦隊を包囲中です、私の命令ひとつで、この艦隊を海の藻屑と消えます」

スプールアンス提督

「ん？失礼ながら貴官は？」

スプールアンス提督は、大将の階級章を付けている、ズバ抜いて若い将校に疑問を持った

翔平

「あつ、失礼自分は第二連合艦隊司令長官林翔平です」

スプールアンス提督

「なっ！なら包囲している艦隊も」

翔平

「第二連合艦隊です」

スプールアンス提督

「・・・」

山本五十六

「提督、我々は出来れば、米国とも戦いたくないんです、我々は一刻も早い、世界平和を求めています、戦争をやりたいがっているのは一部の特進階級だけです」

スプールアンス提督

「・・・確かに、だが・・・」

翔平

「スプールアンズ提督、戦争は無意味な争いですが、国民が愛する祖国のためにと、信じて、一つしかない命を国にささげるのです、しかし往々にして国家の指導者とその指導者を支持する特権階層が国民を戦争に駆り立てるのです、スプールアンズ提督、彼らの利益のために、何故若者が命を捨てなければならないのでしょうか？と、私はそう思います」

スプールアンズ提督

「・・・分かった、してその条件は？」

山本五十六

「空母ヨークタウンクラス3隻、こちらは、貴艦隊が帰還するまで、手を出しません」

翔平

「それと、私の艦隊から、病院船を出しましょう」

スプールアンズ提督

「分かりました」

その後スプールアンズ提督は、艦内放送を使って事情を伝えた、山本五十六初め、翔平、伊藤も滑らかな英語で彼らに訴えた・・・

乗組員たちは、最初は驚き疑ったがやがて理解した

戦争など誰も望んでいないのだから

戦争をやりたいがっているのは一部の特権階級だけなのである

その後、ヨークタウン、エンタープライズ、ホーネットの三隻から、乗組員が病院船橋立、厳島に、移りハワイへと向かった

翔平

「ふゝ、死ぬかと思った」

翔平はエンタープライズ飛行甲板にへたり込んだ

山本五十六

「林君、そんなに疲れたのか」

翔平

「山本長官は、疲れないんですか、主に精神的に」

山本五十六

「こんなことで疲れていたら先が持たんぞ、林君」

翔平

「そうでしたね、山本長官」

その時、電空から機長が飛び出してきた

機長

「長〱官！」

翔平

「そつした機長？」

機長

「吉報です！第二戦隊からの報告が来ました、英艦隊の捕獲に成功しました」

山本五十六

「作戦通りだな」

伊藤整一

「はい」

翔平

「では、戻りましょうか」

山本五十六

「そうだな、では機長」

機長

「はい、責任をもって、大和までお送りしましょう」

翔平

「機長頼んだぞ」

機長

「はい、林長官、ではまた迎えに来ます」

翔平

「待っているぞ」

翔平は、エンタープライズの飛行甲板から、飛び立つ電空を見送ると、

エンタープライズの艦橋に足を進めた

翔平

「（さっきから、誰かにつけられている気がする・・・）」

翔平はそんなことを感じながら艦橋に向かった

空母 エンタープライズ 艦橋

翔平

「ここが艦橋か、実に機能的にできているな・・・おい、さっきからコソコソ後をつけるのは止めてくれないか」

翔平が言うと、影から長い銀髪の少女が出てきた

エンタープライズ

「何故わかった？」

翔平

「感だ」

エンタープライズ

「感だと・・・」

翔平

「そうだ、ところでこの艦の艦魂が俺に何の用か？」

エンタープライズ

「お前は、アメリカ合衆国をどう思っている」

翔平

「ん？アメリカ？今のか」

エンタープライズ

「そうだ、今の大統領をどう思う」

翔平

「ルーズベルト大統領か・・・日本を戦争に引きずり込んだ張本人」

エンタープライズ

「やっぱりそうか・・・アメリカ自体はどう思っている？」

翔平

「アメリカ自体は好きだぞ、日本の良きパートナーでもあるしな」

エンタープライズ

「そうか・・・うん？一寸待て！なんだ、日本の良きパートナーで
もって」

翔平

「その話は、呉に帰ってからだ」

エンタープライズ

「無事に、私達を連れて帰れると？」

翔平

「もちろん、連れて帰るさ」

エンタープライズ
「雷撃されるぞ」

翔平
「何にだ？」

翔平が言った時、まさにタイミングよく

S H - 6 0 K が 3 0 機

飛び立った

エンタープライズ
「なんだあの機体は？」

翔平
「対潜ヘリ、S H - 6 0 K この時代の潜水艦では、あれからは逃げられない」

エンタープライズ
「この時代？」

翔平
「おっと、口が滑った」

エンタープライズ
「話せ、この時代とはなんだ、やっぱりお前たちは・・・」

エンタープライズは翔平の胸ぐらを、掴み問いただす

翔平

「後で話す」

エンタープライズ

「本当だな」

翔平

「もちろん、約束しよう」

エンタープライズ

「分かった」

翔平

「おつと迎えが来たようだ、今日の夜、播磨の長官室に来てくれ」

翔平はそういうと、艦橋から出て飛行甲板に向かった

第二連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 長官室

翔平

「さて現在の状況は？」

啓太

「現在、第一連合艦隊がミッドウェー島に艦砲射撃を実行中です、艦砲射撃が終わり次第、一木旅団がミッドウェー島に上陸する予定です」

一木旅団、本来一木支隊と呼ばれた、旅団は、現在、大日本帝国陸軍の標準装備とされている、三式自動小銃が三八式歩兵銃の代わりに配備されている

また5両の一式戦車、一式対空戦車を始め、諸車両で機械化を図っている

翔平

「作戦通りか・・・英国空母は」

葵

「はい、英国空母は、空母イラストリアス以下3隻を拿捕し、修理のため神戸に入渠しました」

翔平

「英国空母の拿捕は予想外だったな」

葵

「そうですね」

武

「でもこれで改装の仕事が増えるわけだ」

武が嬉しそうに答える

翔平

「頼むから、使う側の方も考えてくれよ」

武

「任しとけ」

翔平

「さて・・・こんなもんか」

啓太

「おう、これで大体の報告は済んだ」

その時、長官室のドアがノックされた

翔平

「どうぞ」

エンタープライズ

「失礼する」

翔平

「来たか・・・うん、後ろの二人は、ヨークタウンとホーネットか？」

エンタープライズ

「そうだ」

翔平

「そうか、じゃあ、改めて、日本海軍へようこそ、俺が当艦隊の司令長官林翔平だ」

播磨

「この艦の艦魂、播磨よ、宜しく」

エンタープライズ

「あつ・・・私はエンタープライズ」

エンタープライズは微妙な表情を浮かべながら答える

ヨークタウン

「こちらこそよろしく、私はヨークタウンよ」

頭に包帯を巻いている、長身の少女が答える

ホーネット

「私はホーネット、宜しく！」

松葉杖を突きながらも、元気に答えるホーネット

翔平

「宜しく、では、単刀直入に話そう、俺ら第二連合艦隊は、未来の日本海軍だ」

エンタープライズ

「やはり、何故この時代に来たんだ」

ヨークタウン

「ちょ、一寸、エンター、そんな話をまともに信じるなんて、どこでこけて頭を打った？」

エンタープライズ

「いや、ヨーク姉さん、私は正常だ、でも姉さんあんな航空機を見たら、そう思ってもおかしくないだろう」

ホーネット

「確かにそうだね」

翔平

「では、これから恒例の映画を見せる、啓太！」

啓太

「ほい」

照明器具が消され、液晶テレビがつく

一時間後

翔平

「どうだった？」

ヨークタウン

「何というか・・・」

翔平

「おっやっぱりその反応か・・・鳳翔」

エンタープライズ

「鳳翔？世界で初めて、航空母艦として設計された艦の艦魂？」

翔平

「いや、そっちではなくて・・・」

鳳翔

「呼んだか？」

翔平

「早いな、一寸、ヨークタウン達の話し相手になってくれ」

鳳翔

「うっ、何故私がそんなことを・・・」

翔平

「頼むよ、同じアメリカ艦だろ」

鳳翔

「・・・分かった」

ヨークタウン

「あの、長官、彼女は？」

翔平

「元アメリカ空母の鳳翔」

エンタープライズ

「元？」

翔平

「そうさ、まあくわしい話は鳳翔から聞いてくれ」

ヨークタウン

「分かったわ」

ヨークタウンたちは鳳翔に連れられて、長官室を出て行った

武

「翔平報告したいことがあるんだが」

翔平

「ん？どうしたんだ」

武

「この間、機関のメンテをしただろ」

翔平

「ああ、二年に一度のメンテだろ」

武

「そうなんだが、この時代に来て3回のメンテをしただろ」

翔平

「ああ、そうだな」

武

「実はな、部品が全く消耗していないんだ」

翔平

「・・・ハア？」

翔平は、人生最大級の、間の抜けた返事をした

武

「純水素タービンエンジンは、設計上では中のタービンを二年間に一度交換しなければ、爆発する危険もある、だが、過去三度交換してきたが全く消耗していない、それだけではない、多少の海水をかぶっているはずの、主砲塔、両用砲、機関砲までもが、全く腐食し

ていない、さらに、この艦隊の全艦を精密に検査したところ同様の現象が起きている」

この話を聞いてさらに、清水参謀がしゃべりだす

葵

「長官一寸私にも気になることが」

翔平

「なんだ」

葵

「この間、健康診断がありましたよね」

翔平

「あつたな」

第二連合艦隊の将兵は、病院船橋立、松島、厳島の3艦で半年に一度健康診断を受けている

葵

「実は、過去に来てから、全ての将兵の身長が伸びていないんです」

翔平

「はい？ いったい、何が起こったんだ」

播磨

「分からないわ」

??

「教えて、あげましょうか？」

突然長官室に声が響いた

翔平

「誰だ！？」

翔平が叫ぶと、突然辺りが真っ白になった。

第二十三話 バトル・オブ・ミッドウェー (後編) (後書き)

天嶽

「遅くなりましたすみません」

播磨

「なにしていたの作者」

天嶽

「パソコンが新しくなってから初期設定とか、リカバリディスクの作成とか、いろいろと」

播磨

「つで、今回はものすごく微妙なところで終わったけど」

天嶽

「今、鋭意執筆中です、あともう少し時間を」

播磨

「GWが終わるまでにできるでしょうね」

天嶽

「最善を尽くします」

播磨

「よろしい」

天嶽

「(ほとんど脅しだよ、主砲を突き付けてくるなんて)」

播磨

「では読者の皆様、ご意見ご感想お待ちしております」

第二十四話 三貴子との会談

第二連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 長官室 (？)

謎の声によって、謎の空間に飛ばされた翔平たち

翔平

「いつたい、何が起こったんだ」

播磨

「分からないわ」

武

「おい、誰かいるぞ」

武は、三つの人影らしきものを見た

翔平

「誰だ？」

??

「そんなに警戒するでない」

啓太

「警戒しない方がおかしい」

??

「うつ、それも、もつともな話だ」

翔平

「だから誰だって聞いているだろ」

建速須佐之男命

「おっと、スマン、俺は建速須佐之男命」

播磨

「っえ！」

月夜見尊

「私は、月夜見尊」

天照大神

「妾は天照大神じゃ」

なんと、翔平たちの前に三貴子が現れた

翔平

「三貴子が何の用ですか」

建速須佐之男命

「知りたいだろう、なぜ、艦の腐食が進まないか」

月読見尊

「そして、なぜ成長が止まっているのかを」

天照大神

「それは妾達が、諸君らの、時空間を歪めたからじゃ」

武

「時空間を歪めた？」

天照大神

「そうじゃ、諸君たちをこの時間へと飛ばし、飛ばす時に、時空間を歪め、諸君たちの艦の時間は、止まっているのじゃ」

翔平

「へえ」

建速須佐之男命

「まあ、それと同時に前らの、体も成長はしていない」

武

「それは一部の人には面白い効果だな」

翔平

「おい、何言ってるんだよ親父」

バツシ

武

「痛ッ」

葵

「何故私達はこの時代に飛ばされたのでしょうか」

天照大神

「それは・・・なんだっけ？」

ステェン

天照以外の全員がすっこけた

建速須佐之男命

「おい、しっかりしてくれよ、姉さん」

月夜見尊

「はあ、シツカリしてくださいよ」

天照大神

「ふむ、では、説明するぞ」

翔平

「はい」

天照大神

「諸君らをこの時代に送ったのは、日の本いや、世界を破滅から救ってもらったためじゃ」

武

「破滅？」

建速須佐之男命

「そうだ、西暦2026年の8月15日に第三次世界大戦が勃発する」

月夜見尊

「原因は、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国の暴走」

天照大神

「戦争が激化するにつれて、暴走した中国は、核ミサイルの使用したのじゃ」

月夜見尊

「これにより、日本国は壊滅、アメリカ合衆国始め欧州も同じく壊滅した」

建速須佐之男命

「この報復処置として、アメリカ合衆国、ロシア連邦は、中国に核ミサイルを使用」

天照大神

「人類は滅びたのじゃ」

翔平

「そんな・・・」

武

「会社の利益の9割をつぎ込んで作った艦隊も無駄だったて事か」

建速須佐之男命

「無駄ではないぞ」

啓太

「なぜ」

月夜見尊

「この艦隊があったからこそ、歴史を変えることを思いつき、実行

したからな」

天照大神

「そう言う事じゃ」

播磨

「そうなの」

葵

「私達はこれから何をすれば」

月夜見尊

「今までやってきたとおり歴史を変えてください」

建速須佐之男命

「特に、原子爆弾だけは闇に葬ってほしい」

翔平

「それは、開発をやめさせ、開発をやるところは徹底的につぶせばいいんですね」

天照大神

「そうじゃ、あつ、ちなみに、諸君らの時間が再び動き出すのは西暦2025年の4月1日じゃ」

月夜見尊

「但し、時間が止まっても、成長、腐食が止まっていっただけで、艦船は攻撃を承ければ損傷するし、人間も怪我をする」

建速須佐之男命

「そこだけは注意してくれ」

翔平

「分かった」

天照大神

「では、世界の運命は諸君らの双肩にかかっている、後は任したぞ」

翔平

「任してください」

翔平が元気よく返事をする、三貴子は微笑み

消えて行った

翔平

「っは！」

翔平が気が付くと、艦底から重厚なエンジン音が響き渡っていた

武

「なんだったんだ」

翔平

「少なくとも夢ではないだろう」

啓太

「今後の作戦をさらに練り直すことが必要だな」

葵

「そうですね」

播磨

「私は皆にこのことを話してくる」

翔平

「正確に伝えてくれよ」

播磨

「分かったわ」

播磨が転移していった

翔平

「さて、これからどうするか」

武

「簡単だろ、まずロスアラモス研究所を潰す」

翔平

「それはいいが、技術的にも厳しいぞ」

啓太

「やっぱり富嶽が完成するまでは爆撃は不可能」

葵

「少なくとも時間があと半年必要です」

翔平

「うーん、そうするしかないな」

その時、一人の士官が長官室に入ってきた

士官1

「失礼します」

翔平

「どうした」

士官1

「第一潜水機動艦隊から入電、龍は眠った 以上です」

翔平

「うん、分かった」

士官1

「失礼しました」

士官が出て行った

翔平

「どうやら、パナマ運河封鎖に成功したようだな」

武

「そうだな、無理して設計したかいがあるってもんだ」

その後、ミッドウェイ攻略作戦も終了し第一連合艦隊はトラックに、第二連合艦隊は無事横須賀に入港した。

ヨークタウン級三隻は、横須賀のドックに入れられて改造されるこ

とになっていた。

第二十四話 三貴子との会談（後書き）

天嶽

「更新しました」

播磨

「期日通りだけど、短くない」

天嶽

「はい、ここで、三貴子とは何かを説明します、三貴子とは記紀神話で黄泉の国から帰ってきたイザナギが黄泉の汚れを落としたときに最後に生まれ落ちた三柱の神々のことである。イザナギ自身が自らの生んだ諸神の中で最も貴いとしたところからこの名が生まれた。さんきし・さんきしん三貴神とも呼ばます」

播磨

「へえこういうことなのね、作者、アレ？作者・・・逃げたわね」

大和

「作者なら、さっき向こうに行きましたよ」

播磨

「ありがとうございます」

大和

「ご意見ご感想お待ちしております」

第二十五話 見えない未来

7月12日

帝国海軍 柱島泊地

第二連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨

現在、第二連合艦隊は内地に帰還し、乗組員休養と破損個所の修理を行っていた

翔平

「でっ、親父なんだこの図面は」

武

「レキシントンの改造図面」

翔平

「もうほとんど、面影が残ってないんですけど」

翔平が見た図面は、ほとんど空母という面影を残していなかった

武

「おう、レキシントンの艦体を利用した、航空戦艦だ」

翔平

「・・・条約で巡洋戦艦から航空母艦になった艦を、さらに改造して航空戦艦に？」

武

「そつだ、改造も進んでいる」

翔平

「俺に黙って」

武

「本とは言えば、航空隊のミサイル攻撃で機関室が全滅したから、取り替えて、その時に両艦とも、飛行甲板と艦橋を取っ払ってしまつて、それでこの改造案が出たんだ」

翔平

「そゝなのか」

武

「やめい！多分そのネタは一部の人しかわからん」

翔平

「スマン、それでこの図面か・・・しかも、主砲が51cm砲か・・・」

「

武

「俺のがこの世に送り出した艦で、最高ッと言っても過言ではない航空戦艦だ！！」

翔平

「ほつ、搭載機数は？」

武

「艦尾、艦首を延長して、さらに、バルジも増設したから・・・だいたい90機つてところか」

翔平

「ふっ、」

武

「使えそうだろう」

翔平

「ああ、充分すぎる程な」

武

「そうだろう」

常陸

「長官!!」

常陸が長官室に転移してきた

翔平

「なんだ、常陸」

その時、長官七の扉が勢いよく開き、啓太と葵が入ってきた

啓太・葵

『長官!!』

翔平

「どうした?!」

常陸・啓太・葵

『ソ連が連合国に降伏しました!!』

翔平・武

『な、なんだって!!』

翔平

「詳しい話を」

啓太

「はい、これは、ナチスドイツとアメリカのラジオ放送を傍受したのですが、7月11日にドイツ空軍がオムスクを攻撃した際に機銃掃射で死亡したそうです」

翔平

「ちよつと待て、今ソ連の最前線はどこだ？」

葵

「最前線はスベルドロフスクというところですが、今はその前線に居たロシア軍將兵が、降伏し、崩壊が始まっています」

啓太

「つい先ほど、軍令部はこれからの対策を改めると言つ事で、明日会議を開くそうです」

翔平

「そうか、山本長官も来るのか」

常陸

「無線連絡では、つい先ほど、トラックから、サイパン経由で東京に向かったそうです」

翔平

「よし、すぐに、帝都に向かうぞ、啓太、資料の準備を」

啓太

「了解」

翔平

「親父も来るか？」

武

「おう、頼む、今後の造船スケジュールを艦政本部の戻って大幅に見直さなければならぬ」

翔平

「頼むぜ、海軍技術中将殿」

武

「おう」

その夜、翔平たちは、電空で帝都東京、軍令部に向かった。

7月13日

帝都 海軍軍令部（通称：赤レンガ）

武

「帝都にも高層ビルが増えてきたな」

翔平

「そうだな、・・・どこかの誰かさんが、技術支援と都市の再開発を強く推したからだろう」

武

「そうだっけ」

実際に今の大日本帝国は百尺規制を容積地区制度に改正し、多くの高層ビルが建築段階に入り、道路も震災、空襲に備えて、整備を行っていた

翔平

「そうだ、あつ、山本長官」

山本五十六

「やあ、林君、もう来てたのか」

翔平

「はい、昨夜到着しました」

山本五十六

「そうか、こっちは、ついさっきだ」

翔平

「どうでしたか、連山の乗り心地は」

山本五十六

「うん、爆撃機としては、速かったよ」

武

「そうですか」

翔平

「では、行きましょうか」

山本五十六

「そうだな」

そうして会議が始まった

翔平

「今の帝国の最前線は西はインドラングーン、東はミッドウエーです、少なくとも半年後には、英印軍を駆逐し、インドを開放しなければいけません、さらには、インドの開放が終了次第、ハワイ諸島を攻略し、ハワイから爆撃機を飛ばして、ロスアラモス研究所を破壊します、その後は、ここを攻略して、ここに向かいます」

山本五十六

「さらに、ソ連が崩壊したため、本土防空と日本海側の防衛も重要になってきます」

東條英機

「うーん、陸軍は戦力的にかなり余裕があるが・・・問題は補給だ」

山本五十六

「その点は、海軍が責任をもって輸送船団を保護し、物資を通どけます」

その後陸軍との協議や、いろいろ話し合ったが、そこは割愛させていただきます。

翔平

「うん、親父どこに行こうとしているんだ」

武

「本田宗一郎さんと豊田喜一郎さんに会いに行く」

翔平

「本田・・・豊田・・・ホンダ・・・、トヨタ・・・、あの自動車メーカーの」

武

「創設者に」

翔平

「なぜ！」

武

「これからの自動車業界の事を話しに」

翔平

「・・・帰りは、自分で帰ってこいよ」

武

「ああ、新幹線で・・・って、この時代には新幹線はまだないんだ
～～！」

翔平

「なに、悶えてるんだよ」

武

「畜生、絶対に1950年には新幹線を作ってやる」

翔平

「何を考えてるんだよ」

武

「俺の野望だ」

何かの野望に燃える武

翔平

「とにかく、汽車か、輸送機で呉まで帰ってくるんだな」

武

「分かった」

翔平

「先に戻っているからな」

武

「おう」

翔平はそう言って武と別れた

弘明

「長官」

翔平

「おお、弘明久しぶりだな」

弘明

「はい、お久しぶりです」

読者の皆様は覚えているだろうか、

翔平が護衛艦こんごうの艦長をしている頃から、砲雷長をやっていた堀井弘明今の階級は中将

翔平

「どうだ軍令部は」

弘明

「机仕事ばかりで、海が恋しいです」

翔平

「そうか、でも、堀井参謀、貴方には作戦立案と交渉力をもっているこれからも頼んだよ」

弘明

「分かりました、どんな頑固者でも必ず説得して見せますから」

翔平

「頼んだぞ、お前ならできる」

弘明

「プレッシャーを掛けないでください」

翔平

「で、俺に何か用でもあるのか」

弘明

「そうですよ、え」と立ち話もなんですから」

翔平

「そうだな」

とある一室

翔平

「さて、どんな話かな」

翔平は弘明の案内で軍令部のとある一室にいる

弘明

「長官はご存知ですよ、先遣偵察隊の事を」

翔平

「もちろん」

先遣偵察隊とは、敵本土のジャーナリストに成りすまし、敵の情報を収集するための、特殊部隊だ、だが戦闘はしない、

弘明

「その偵察隊から連絡が入ったのですが・・・」

翔平

「よく電波が届いたな」

弘明

「はい、波号情報潜水艦を始め、何か所も経由されていますから」

翔平

「うんで、どんな話だ」

弘明

「はい、現在、米国では、戦艦、空母の建造が急ピッチで進んでいるようで、早ければ、来年の末頃には全艦が戦力化になるとのことです」

翔平

「なんだ、予想していたじゃないか」

弘明

「それが予想よりも遥かに多いんですよ」

翔平

「具体的には」

弘明

「これが偵察隊からの報告書です」

翔平は報告書に目を通した

報告書にはこう書かれてあった

米国の工業は今非常に活発化せり、航空機企業、自動車企業の各工場が24時間のフル操業で、戦車、戦闘機を始め、兵器が増産中、さらに、各造船所、工廠では、戦艦、空母、他大小補助艦艇が、建造中、戦艦の数は少なくとも20隻以上、ノースカロライナ級2隻、サウスダコタ級4隻、アイオワ級6隻、モンタナ級6隻さらに新型戦艦X級を8隻、起工す、空母もエセックス級を中心に、ボーク級、カサブランカ級、合わせて30隻以上・・・

翔平

「・・・米国の国庫は大丈夫か!!」

弘明

「大丈夫ではないと思います」

翔平

「ですよね、21世紀でこんなことやってたら、政権が5回ぐらい吹っ飛ぶぞ」

弘明

「なにか笑えません」

翔平

「そつだよな」

弘明

「で次に、大和田が欧州の音号無線を解読していますが、欧州でも海軍の再建が行われているみたいです、くわしい内容はまだ入ってきませんが」

翔平

「そうか、新しい情報が入ったら、連絡してくれ」

弘明

「了解」

その後、翔平は弘明と別れて、電空で呉に戻った

第二十五話 見えない未来（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

第二十六話 インド洋波高し

11月11日

帝国海軍 柱島泊地

第二連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨

会議室

会議室には翔平を始めとする、首脳陣が集まっていた

翔平

「さて今日集まってくれたわけだが、2週間後、第一機動艦隊がインド攻略作戦のため出撃する、それに伴い我が艦隊からも艦艇を数隻派遣する」

啓太

「派遣する艦艇は？」

翔平

「まず、太平洋の防衛のために主力の戦艦を出すわけにはいかない、そこで、第一戦隊から、巡洋戦艦4隻と第一駆逐戦隊の駆逐艦8隻、それと第一航空戦隊から空母一隻と輸送艦3隻と第一支援艦隊を出す」

葵

「それで艦隊の指揮は」

翔平

「俺がする」

全員

『はい！？』

翔平

「だって暇じゃん」

葵

「……そんな理由で艦隊を留守にしないでください！！」

翔平

「……そこでだ、俺が留守にしている間、清水中将と栗須中将に本隊を任せる」

翔平は葵の反論を無視した！？

啓太・葵

『はいイ！？』

翔平

「異論は認めないぞ、もう決めたことだ」

啓太・葵

『（身勝手すぎる！！）』

ここで啓太と葵の思考がシンクロした

翔平

「それと、分艦隊がインド洋に出撃すると同時に第二連合艦隊本隊はマールシャル諸島に移動、そこにて索敵、情報収集を行う、以上、何か質問は？」

葵

「何故艦隊を分けるんですか」

翔平

「うん、インド洋に主力艦隊を集中していたら、もしもの時の本土にもしものことがあったらと思つてな、山本長官と会議をしていたら艦隊を分けることで一致したんだ」

啓太

「その訳なら納得する」

翔平

「だろ、しばらくの間、二人に任せるけど頼んだぞ」

啓太・葵

『はい』

こうして会議が終わった

11月25日

帝国海軍 柱島泊地

第二連合艦隊

巡洋戦艦 十六夜 甲板

雄哉

「ようこそ、十六夜へ、お待ちしておりました長官」

翔平

「山崎艦長しばらく世話になるぞ」

雄哉

「いえ、こちらこそ」

翔平

「では・・・全艦出撃準備」

雄哉

「ようそろ」

翔平

「播磨、俺がいない間皆を頼んだ、ケンカ等がないように」

播磨

「分かってるわ」

翔平

「太平洋は今後しばらくは平穏だと思うが・・・もしものことがあったら、皆をまとめてくれ、栗須中将、清水中将、播磨」

啓太・葵・播磨

『はい』

翔平

「では、しばらく頼んだぞ」

啓太

「任せてください」

こうして翔平は、第二連合艦隊本隊と別れて、巡洋戦艦十六夜に将旗を移した

イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

翔平

「全艦出撃準備は」

雄哉

「全艦準備完了」

翔平

「全艦出撃」

十六夜を旗艦とする第二連合艦隊印攻略艦隊は第一支援艦隊と共に、第二連合艦隊本隊に見送られて、柱島泊地を離れた

その後、沖縄沖で、第一機動艦隊と合流した。

作戦の参加戦力は・・・

第二連合艦隊 印攻略艦隊

司令長官：林翔平大将 旗艦：イージス巡洋戦艦十六夜

巡洋戦艦

天羽 天月 十六夜 十五夜

空母

鳳翔

駆逐艦

秋月型8隻

補給艦

札幌型3隻

第一機動艦隊

司令長官：小沢治三郎中将 旗艦：赤城

戦艦

金剛 比叡 榛名 霧島

空母

赤城 加賀 蒼龍 飛龍 翔鶴 瑞鶴

重巡洋艦

利根 筑摩 足柄 羽黒

防空軽巡洋艦

阿賀野型12隻

駆逐艦

松型32隻

補給艦

一等補給艦5隻

第一支援艦隊

司令長官：山田能貴 旗艦：大型自走浮きドック呉

巡洋戦艦

三宅 八丈

軽空母

神鷹 海鷹

防空軽巡洋艦

阿賀野型10隻

駆逐艦

秋月型15隻 松型20隻

自走浮きドック

呉 佐世保 横須賀 舞鶴 大湊 苫小牧

強襲揚陸艦

墨田 江東 品川 目黒 世田谷 仲野

輸送艦

札幌型15隻

総参加艦艇

155隻

総参加航空機

800機以上

11月29日

(現地時間:18:45)

マラッカ海峡

インド攻略艦隊は、マラッカ海峡を通過し海峡の出口に差し掛かっていた

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イーリス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

翔平

「ここからが本番だ、山崎艦長、対潜、対空警戒を厳に！」

雄哉

「ようそろ」

その時艦内電話が鳴り響く

雄哉

「こちら艦橋」

水兵1

「CIC、艦橋、ソナーに感！敵潜です！」

雄哉

「長官、早速です」

翔平

「そのようだな、全艦対潜戦闘！！」

雄哉

「艦首VLS解放、五式対潜ミサイル発射用意弾数1」

水兵2

「了解、艦首VLS、五式対潜ミサイル、弾数1、データ入力完了、発射準備完了！」

雄哉

「発射！！」

グワツ　ズツシャアアア――

十六夜の艦首VLSから、五式対潜ミサイルが発射された

第一機動艦隊

旗艦　航空母艦　赤城　防空指揮所

赤城

「もうすぐ、マラッカ海峡を出てインド洋に入るわよ、加賀、皆に注意するように伝えて」

加賀

「分かった」

小沢治三郎

「おいおい、今からそんなに強張ってたら持たないぞ」

赤城

「小沢、暢気なことを・・・」

ズツシャアアア――

加賀

「被弾したかッー!!」

赤城

「・・・違っわ、増進弾よ」

小沢治三郎

「早速か、敵潜でも見つけたんだろう」

赤城

「はあ、その敵潜は気の毒ね」

小沢治三郎

「ああ、必ず命中すると言ってたな」

加賀

「・・・」

独逸海軍 潜水艦

U - 237

独ソナー員

「推進器音、多数、4時方向、距離約2万5千、速度25ノット」

U - 237 艦長

「潜望鏡深度へ、無線アンテナ露頂」

独水兵1

「ヤヴォール!!」

U - 237

「見つけたよ、日本艦隊・・・」

U - 237 は艦隊の艦種を確認するため潜望鏡深度に浮上した

U - 237 艦長

「これは・・・」

U-237の艦長が目にしたのは、

大日本帝国が誇る一大機動艦隊であつた

U-237艦長

「・・・友軍基地へ緊急電、速度25ノットでマラッカ海峡を通過中の日本機動艦隊を発見、編成は空母7、戦艦4、巡洋戦艦4、他大小巡洋艦、駆逐艦多数、だ、急げ!!」

独水兵2

「ヤヴオール!!」

独ソナー員

「突発音!魚雷です!!接近中!」

U-237艦長

「なんだと、急速潜航!面舵一杯!!機関一杯だ!!」

独ソナー員

「駄目です、間に合いません、距離100806040...」

U-237

「駄目、避けられない・・・後は頼んだよ・・・姉妹達・・・」

カッ

グワッ

ズッドオオオオオン

U - 237 に五式対潜ミサイルが命中した途端、

U - 237 の外殻を砕き

U - 237 はその艦体を暗い海に沈めた

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イーリス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵2

「敵潜の圧漬音を確認、撃沈です」

翔平

「この先には、Uボート等がうようよ居るだろう」

雄哉

「哨戒機を発艦させますか」

翔平

「そうしよう、各艦に通達、SH - 60K、全機発艦、哨戒に当たれ」

水兵3

「了解」

哨戒に対潜弾を腹いっぱい抱えた、SH - 60Kが30機、飛び立った

アッズ環礁 イギリス海軍基地

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン 艦橋

英士官1

「提督！ドイツ潜水艦U - 237から、敵艦隊発見との報告です！
」

ジェームズ・サマヴィル提督

「なんだと！規模は？」

英士官1

「はい、報告によりますと、空母7、戦艦4、巡洋戦艦4、他大小巡洋艦、駆逐艦多数、大機動艦隊です」

ジェームズ・サマヴィル提督

「大艦隊だな・・・我々だけで防ぎ切れるか」

サマヴィル提督は艦橋の窓から外を見た

彼の眼下には

多数の戦艦、空母、巡洋艦、駆逐艦が停泊していた

英参謀1

「提督、敵の機動艦隊の後方には、必ず輸送艦隊がいるはずですが、この艦隊に攻撃をし、敵艦隊の輸送路を破壊するのはどうでしょう

か」

ジェームズ・サマヴィル提督

「うーん」

サマヴィル提督は唸りこんだ

そんな海賊まがいなことを行いたくなかったからだ

英参謀2

「提督、もう一つ方法があります、敵の艦隊は艦隊速力25ノットと高速です、この高速巡航を可能とする、日本海軍の戦艦は、コンゴウクラスのみです」

ジェームズ・サマヴィル提督

「ちよつと待ちたまえ、日本海軍はハリマクラスと新鋭のヤマトクラスが就役しているぞ」

英参謀2

「はい、ですが、情報部からの報告では、ハリマクラス、ヤマトクラスの両艦は、27ノットが限界だそうです」

もちろんこの事はブラフであり、連合軍が真実を知るのもう少し後の事だ

ジェームズ・サマヴィル提督

「それで？」

英参謀2

「我々東洋艦隊の主力戦艦はこのネルソンクラスが2隻、後はRク

ラスが5隻です、敵がコンゴウクラスなら、主砲は14インチ、ネルソンは16インチ、Rクラスは15インチ、後は、敵の巡洋戦艦ですが、これは今日日本海軍が保有している、テンワクラス、テンワクラスの主砲口径は12インチ、火力では日本艦隊を凌駕していません、ですから、敵艦隊に夜戦を挑み、レーダー管制射撃で敵艦隊を撃破するのはどうでしょうか」

金剛型はすでに41センチつまり16インチに主砲が改められており、連合国側はこのことを知らない

ジェームズ・サマヴィル提督

「・・・よしそれで、行こう」

英参謀1

「それでしたら、提督、出撃準備を」

ジェームズ・サマヴィル提督

「うむ、全艦出撃準備・・・日本艦隊の攻撃予測は？」

英参謀1

「セイロン島の泊地攻撃の可能性が一番高いかと」

ジェームズ・サマヴィル提督

「・・・分かった」

英海軍東洋艦隊は、明日の出撃に備え準備に入った

同艦 予備士官室

戦艦ネルソンの予備士官室では、英海軍の艦魂達が集まっていた

ネルソン

「ロドニー、状況を教えてください」

ロドニー

「はい、姉さま、本日、1845頃、ドイツ潜水艦U-237が日本艦隊と接敵しました」

ネルソン

「艦隊の規模は？」

リヴェンジ

「はい、空母7、戦艦4、巡洋戦艦4、他大小巡洋艦、駆逐艦多数を引き連れた大機動艦隊だ」

ロドニー

「艦隊司令のサマヴィル提督は日本艦隊を砲撃戦で戦うと言っていたけれど、敵は空母を中心とした艦隊、大丈夫かしら」

リヴェンジ

「大丈夫だ、作戦行動中の戦艦が航空攻撃で沈められたことは、今まで一度もない、それに砲撃戦だったら我が方が有利だ」

この時点で、帝国海軍は航空攻撃でまだ戦艦を沈めていない

ネルソン

「火力では有利ですか・・・」

ロドニー

「どうかしたの、姉さま」

ネルソン

「・・・いえ、何でもありません」

ネルソンは言い知れぬ不安感を抱いた

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イーリス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「長官、播磨から電文が来ています」

翔平

「ほう、見せてくれ」

雄哉

「はい」

翔平

「ありがとうございます」

翔平は紙に目を通すと、微笑した

翔平

「皆もこちらの様子が気になるようだな」

雄哉

「何と返信しますか」

翔平

「そつだな・・・インド洋波高し、これでいい、平文でいいぞ」

雄哉

「了解」

第二十六話 インド洋波高し（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第二十七話 インド攻略作戦 前編（前書き）

お久しぶりです。一カ月の放置申し訳ございません。

第二十七話 インド攻略作戦 前編

12月1日（未明）

インド洋

第二連合艦隊

空母 鳳翔

現在空母鳳翔では、音神、15機が発艦準備を行っていた

水兵1

「音神一番機、準備完了」

機銃弾とミサイルと大型増層を装備した音神が次々に甲板にあげられる

士官1

「全機発艦準備完了」

孝彦

「旗艦十六夜と赤城に報告」

水兵2

「了解」

鳳翔から、発艦準備完了との信号が、赤城、十六夜に打たれる

しばらくして

水兵 2

「旗艦十六夜より、発艦命令来ました」

孝彦

「音神 1 番機発艦用意イ！」

士官 1

「態勢完了の機より直ちに発艦せよ」

水兵 1

「宜候！一番、二番、射出位置へ」

水兵 3

「チヨイ前、チヨイ前、よし！！」

水兵 4

「一番機、射出準備よし！最終確認！！」

水兵 5

「一番、ヨロオシ！！」

水兵 1

「一番機、射出！」

パチ シャアアアア ゴウ

電磁カタパルトにより、音神が軽々と空に飛び立つ

水兵 2

「次、二番機、発艦せよ」

こうして音神、15機は蒼空へと舞い上がった

第一機動艦隊

空母 翔鶴

空母翔鶴も同じく、銀河改の発艦準備をしていた

銀河改には、大型増層が取り付けられていた

ちなみに、銀河改は爆弾搭載量2t、高度5000m時速600キロでの航続距離は5200キロさらに大型の増層を2本装着すると、航続距離は7000キロまで伸びる

水兵6

「旗艦赤城より信号、《攻撃隊発艦せよ》以上です」

有馬艦長

「銀河改、発艦せよ」

銀河改が射出機により強制的に加速し、飛び立つ

銀河改は音神と一旦合流し、そして三方向に分かれる、一隊はデリーを、もう一隊はマドラス、そしてもう一隊が目指すのは・・・

ボンベイ(8:30)

インドの中心都市、ボンベイ、

此処には英軍の基地も多数存在すると、同時に人口が200万を超える

ボンベイの市民の間では、インド洋で日本軍が現れたことにより、期待と不安で興奮していた

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「前方二千、見えたぞ、英国王ジョージ？世の来訪を記念して建てられた、大英帝国支配の象徴、インド門だ、全機攻撃準備」

『了解』

無線から、銀河改全機の搭乗員が答える

野中

「うお、」

野中大尉が操縦する銀河改を音神が追い越した

野中

「流石、墳進機だ、あつという間に追い越されちゃった」

そついいながら、5機の銀河改は翼を大きく振りながら、都市中心部に向かった

ボンベイ 市街地

ボンベイ市民1

「翼にレッド・サン！」

ボンベイ市民2

「間違いない・・・日本軍だ」

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「そろそろだろう、全機、ばら撒け!!」

『了解』

その直後、銀河改5機は爆弾層を開き

ビルをばらまき始めた

そのビルには、こう書いてあった

親愛なるインド国民よ、今まさに立ち上がる時が来た、諸君たちの手で、白人を追い出し、自分たちの手で、独立し、国を作る時が、我が大日本帝国始め、亜細亜各国はインドの独立を強く望み、その独立を全面的に支援する用意がある、そして、英軍をインドから追いだした暁には、大日本帝国は天皇陛下の名のもとに、完全なる独

立を約束する。

と書かれていた

この文章は、デリー、マドラスでも撒かれ、その直後にはラジオでも流された

野中

「全機、終わったか」

『はい』

野中

「よし、帰還する」

銀河改と音神は翼を翻し、母艦へと颯爽と飛んで行った

英東洋艦隊 (11:45)

旗艦 戦艦 ネルソン

英東洋艦隊は、日本艦隊攻撃のため、全速で日本艦隊の後を追っていた

此处で英東洋艦隊の編成を説明しよう。

英東洋艦隊

司令官：ジェームズ・サマヴィル中将 旗艦：ネルソン

戦艦

ネルソン　ロドニー　リヴェンジ　レゾリューション　ラミリーズ
ロイヤル・サブリン　ロイヤル・オーク
重巡洋艦

ロンドン　デヴォンシャー

軽巡洋艦

ダイドー　フィービ　ボナヴェンチャー　ナイアド
空母

アーク・ロイヤル、グローリアス、イーグル

駆逐艦

オンスロー　オフア　オンスロート　オリビ　オブデュレート　オ
ビディエント　オパチューン　オーウェル

航空機

合計136機

ジェームズ・サマヴィル提督

「なに、サボタージュだど!?!」

英参謀1

「はい、ボンベイ、マドラス、デリーで、大規模なサボタージュが
行われています」

ジェームズ・サマヴィル提督

「日本軍に先手を取られたか・・・」

英参謀2

「このまま撤退するのも視野に入れるべきかと」

ジェームズ・サマヴィル提督

「そんなことをしたら、今度こそ、ロイヤルネイビーの権威が地に
落ちるぞ」

英参謀1

「でしたら」

ジエームズ・サマヴィル提督

「このまま、全力で日本艦隊を追い、撃破する、我々に残された道はもはやこれだけだ、艦長、機関一杯、壊れても構わん、出せるだけ出せ」

艦長

「アイ・サー、機関室、機関一杯だ!!」

ネルソンの艦長が伝声管に叫ぶと

機関長

「無茶です、これ以上圧力を上げたら、爆発します!」

艦長

「いいからやるんだ、機関長」

機関長

「・・・機関一杯!」

艦長

「ありがとう、機関長」

機関長

「帰港したら、真っ先にドック入りですよ」

艦長

「分かった」

英水兵1

「レーダに感！偵察機の模様」

ジェームズ・サマヴィル提督

「直援機に連絡」

英士官1

「アイ・アイ・サー」

幻夜 機内

英東洋艦隊に接近したのは、索敵に出ていた、鳳翔から飛び立った、
幻夜2号機であった

幻夜2号機は、レーダーに多数の艦影を確認したため、識別のため、
目視できる高度まで降下していた

機長

「見つけた！英東洋艦隊！！」

副操縦士

「機長やりましたね」

機長

「ああ、旗艦十六夜に位置連絡急げ」

電探員

「了解・・・機長！下方から敵機！」

機長

「おっと、出迎えた」

副操縦士

「はっ、厚い歓迎ですね！」

機長

「よし、逃げるぞ、三十六計逃げるが勝ちだ」

幻夜2号機は雲の中に入り、迎撃機を撒いた

第一機動艦隊（11：50）

旗艦 空母 赤城 艦橋

水兵7

「十六夜より発行信号【敵英東洋艦隊発見！】」

小沢治三郎

「全空母に次ぐ第一次攻撃隊発艦準備！翔鶴、瑞鶴は銀河改の発艦準備」

士官1

「了解、翔鶴、瑞鶴に連絡」

空母 翔鶴（12：20）

飛行甲板

野中

「おい、急いでくれ」

野中大尉が搭乗する銀河改は燃料と魚雷の搭載作業をしていた

水兵6

「あと3分で終了します」

野中

「おお、でっかい獲物が待っている」

第一次攻撃隊、総数220機が発艦を開始した

英東洋艦隊 (13:15)

旗艦 戦艦 ネルソン

英東洋艦隊旗艦ネルソンには、張り詰めた空気が漂っていた、

敵の偵察機に発見されて、何時敵が来てもおかしくない状況に立たされたからだ

その時

英水兵1

「レーダー室より報告！敵大編隊を探知、数200以上！」

ジェームズ・サマヴィル提督

「っ！ありたっけのインターセプターを上げる！格納庫の隅でほこりかぶっている機体もだ、パイロットがいなければ、コックでも乗せろ、厳しいのが来るぞ！」

英参謀1

「了解！」

英空母、3隻・・・アーク・ロイヤル、グロリアス、イーグルから、シーファイアが迎撃のために翔け上がる、その数、わずか、48機、10機の音神に護衛されている、第一攻撃隊を止めるのは、不可能であった・・・いや、音神が護衛していなくても、止めるのは無理だろう、なぜなら、第一機動艦隊の熟練パイロット達が、零戦、陣風を操り、攻撃隊を迎撃機から守っているんだから。

鳳翔制空隊 音神

山口昇中佐機

昇

「さて、全機そろそろ、敵の迎撃機が来るころだ、敵は、おそらく、シーファイア、高性能機だ、注意するんだぞ」

昇がそういうと、インカムから笑い声が聞こえた

哲也

『隊長、幾ら高性能だっけていても、レシプロ機でしょう、この音神と自分たちの腕さえあれば敵なしですよ』

昇

「ハハハハッ、そうだな、でも油断するなよ」

哲也

『了解!』

昇

「来たようだ、全機、行くぞ!」

『おお!』

英東洋艦隊 (13:25)

旗艦 戦艦 ネルソン

ジェームズ・サマヴィル提督

「なんだ、あの機体は・・・」

サマヴィル提督は音神の機動性と速度を見て唖然としていた

その間にも、音神が暴れ、英軍のシーファイアをジュラルミンの塊に変えていく

ジェームズ・サマヴィル提督

「日本軍は何時の間に、あんな高性能機を開発したんだ!」

英参謀1

「米海軍からの報告にあった、ソニックでしょうか?」

英参謀2

「あれは、戦場によくある与太話ではなかったのか・・・」

ジェームズ・サマヴィル提督

「幾ら高性能とはいえ、数は少ない、対空戦闘始め！隙を作るな！」

サマヴィル提督が言い終わると同時に、ネルソンの全火器が火を噴くそれに合わせて、残りの全艦も対空砲火を打ち上げる

ネルソン

「なんですかあは・・・」

ネルソンが防空指揮所で目にしたものは・・・

20機の蒼山が発射した98式空対艦ミサイルだった・・・

英水兵1

「左舷より高速飛行物体接近！」

艦長

「撃ち落とせッ！」

ネルソンの対空砲が向けられるが、アクティブ/パッシブ複合誘導方式の98式空対艦ミサイルは、対空砲火をもつともせず突き進み、ネルソンの艦橋後部に命中し、周辺の高角砲、機銃座を吹き飛ばした

英士官1

「左舷高角砲、機銃座全滅！」

艦長

「ダメージコントロール急げ！」

他の戦艦も同様に、対空砲を吹き飛ばされ、対空砲火に隙ができた

その隙に、攻撃隊が突撃する

英水兵2

「左舷より雷撃機！数3！」

艦長

「取舵一杯！」

ネルソンは巨大な艦体を左に回頭させるが・・・

英水兵3

「敵機！魚雷投下！来ますッ！！」

艦長

「くそっ・・・間に合わない」

天山から投下された、魚雷は真っ直ぐ突き進みネルソンに突き刺さった

ズッドオオオオオオン

ズッドオオオオオン

ネルソンに2本の魚雷が命中した

ネルソン

「ガッハッ！・・・話には聞いてましたが・・・日本の魚雷がここまで高威力とは・・・」

艦長

「被害報告！」

艦長が大声で叫ぶ

英士官 1

「左舷に魚雷命中！浸水発生！」

英水兵 4

「機関室に若干の浸水確認！現在排水作業中！」

艦長

「機関は無事か！」

機関長

「はい、機関全基正常、まだ行けます」

英水兵 1

「後続のロイヤル・オークに攻撃が集中しています」

ジエームズ・サマヴィル提督

「何！？」

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「よし、隙ができた、また感謝しないとな・・・最後尾にいる、戦

艦をいただくぞ！第一部隊全機ついてこい」

『はいッ！！』

野中大尉率いる銀河改五機は、英戦艦、ロイヤル・オークに攻撃を開始した

野中

「距離3000・・・2500・・・2000・・・1500・・・今だ！投下！」

雷撃手

「はい！！」

ザッバツ

ザッバツ

銀河改は搭載していた九一式航空魚雷改2が突き進む

隊長機が投下したのについて、後続の4機が魚雷を投下する

合計5本の魚雷がロイヤル・オークに向かって突き進む

戦艦ロイヤル・オーク

英水兵5

「敵機魚雷投下！」

艦長

「回避！取舵一杯！」

英水兵 6

「取舵一杯！急げ！」

操舵手が懸命に舵輪を回す

艦長

「（頼む曲がってくれ、ロイヤル・オーク）」

艦長が祈るが、それも空しく

ズッドオオオオオオン

ズッドオオオオオオン

ズッドオオオオオオン

ズッドオオオオオン

ロイヤル・オークに4本命中、

浸水により左舷側到大傾斜する

英水兵 5

「左舷に魚雷命中、数4！」

艦長

「右舷、注水タンクに注水！急げ！」

副長

「アイ・アイ・サー」

英水兵6

「上空より急降下アア!!」

艦長

「何!!」

傷ついたロイヤル・オークに、彗星艦上爆撃機が襲い掛かった

艦長

「回避! 転舵急げ!」

彗星は、対空砲火をもとせず、500キロ爆弾を投下する

その爆弾のうち一発がロイヤル・オークの第二主砲塔側面を貫通し爆発した

ズツドオオオオン

英水兵6

「第二主砲塔付近に命中弾!」

英士官2

「第二主砲塔、弾薬庫付近にて火災発生!」

副長

「消火急げ!」

水兵たちは懸命に消火活動するが

英水兵 7

「発電機室、機関室に浸水！発電できません！」

艦長

「なんだと！ポンプも動かないのか？」

英水兵 7

「はい」

英水兵 8

「浸水さらに増大！現在傾斜角18度！」

艦長

「うぐぐ、副長・・・総員退艦」

副長

「はい？」

艦長

「総員退艦だ！急げ、伝令走れ！」

副長

「アイ・サー」

英東洋艦隊 (14:40)

旗艦 戦艦 ネルソン

英水兵 1

「ロイヤル・オークが総員退艦命令を出しました」

英士官 1

「日本機帰還します」

ジェームズ・サマヴィル提督

「被害を報告せよ」

英参謀 1

「はい、戦艦ロイヤル・オーク大破、航行不能、空母イーグル沈没、駆逐艦オンズロー、オフア、オンスロート、沈没、他戦闘艦艇は被弾していますが、戦闘航行には支障ありません」

ジェームズ・サマヴィル提督

「救助を急げ」

英士官 1

「了解」

ジェームズ・サマヴィル提督

「うむ、日本艦隊の位地は？」

英参謀 2

「Uボートの連絡によりますと、現在はこのあたりかと」

ジェームズ・サマヴィル提督

「近いな、飛ばせば、接敵まで2時間の距離か」

英参謀 1

「そうします、提督」

ジェームズ・サマヴィル提督

「・・・よし、戦闘に差し支えない艦艇は全艦全速で日本艦隊を追撃する、他の艦艇と空母は、アッズ環礁に帰還せよ」

英参謀 1

「了解、各艦に伝えます」

ジェームズ・サマヴィル提督

「ロイヤル・オークの曳航は出来そうか？」

英参謀 2

「あの状態では」

英参謀が艦橋の窓から後方を見る

そこには、大破し左舷へ傾いているロイヤル・オークが見えた

ジェームズ・サマヴィル提督

「うむ、努力してくれ、駆逐艦オパチューンとオーウェルに命令、戦艦ロイヤル・オークをアッズまで曳航せよ」

英士官 1

「了解」

ジェームズ・サマヴィル提督

「残りの艦艇は本艦に続け！目標日本艦隊」

英東洋艦隊は救助艦艇と損傷艦を残して、日本艦隊に全速で向かった

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イーリス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「長官、どうやら東洋艦隊は、我々に砲撃戦を挑むようです」

翔平

「ほう、どうする十六夜」

十六夜

「何故私に聞くんですか」

翔平

「いや、旗艦だから」

十六夜

「意味が分かりません」

翔平

「はっはっはっ、そうか、よしなら、空母鳳翔は駆逐艦6隻を連れて後方の第一支援艦隊と合流、小沢さんにも連絡」

雄哉

「了解」

第一機動艦隊

旗艦 空母 赤城 艦橋

小沢治三郎

「第二連合艦隊は砲戦をする気か・・・よし、金剛、比叡、榛名、霧島及び足柄 羽黒、阿賀野、矢矧、駆逐艦12隻は第二連合艦隊に続け、残りは空母を中心に輪形陣を組み南方に退避」

草鹿

「了解！」

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イーリス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「第一機動艦隊、本隊離れます」

水兵7

「第一機動艦隊、旗艦赤城より発行信号【貴艦隊の奮闘を期待する】
以上です」

翔平

「よし、全艦回頭、単縦陣を組め、迎え撃つぞ！」

雄哉

「了解！」

太平洋戦争、四度目となる砲戦が始まろうとしていた・・・

第二十七話 インド攻略作戦 前編（後書き）

ご意見感想、お待ちしております。

第二十八話 インド攻略作戦 中編

12月1日（16：50）
インド洋

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「哨戒中の幻夜より入電、【現在敵艦隊との距離約250キロ、敵艦隊の旗艦はネルソン級と思われる】以上です」

翔平

「よし、敵はビック7か、十六夜、お前はともビック7と縁があるみたいだな」

十六夜

「ふふつ、嫌な縁ですね」

翔平

「そうか？山崎艦長、増速30ノットだ、全艦にも通達」

雄哉

「了解！速度30！」

水兵2

「宜候！」

第一機動艦隊

第三戦隊 旗艦 戦艦金剛 艦橋

水兵3

「十六夜より信号【速度30ノットへ、増速せよ】以上です」

近藤信竹

「艦長、増速、十六夜に続くんだ」

第三戦隊を率いるのは、近藤信竹中将

小柳艦長

「宜候！速力30！」

水兵4

「了解」

英東洋艦隊 (17:30)

旗艦 戦艦 ネルソン

水平線のかなたには太陽がその姿を隠そうとしていた時間帯であった

英東洋艦隊、旗艦ネルソンのレーダーが艦影らしき姿をとらえたのは・・・

英水兵1

「レーダー室より報告、敵艦隊らしき艦影を補足、距離6万メートル、速度30ノット、真っ直ぐこちらに向かっています」

ジェームズ・サマヴィル提督

「来たか、全艦砲戦用意！レーダー射撃で一気に仕留めろ」

艦長

「アイ・アイ・サー」

英士官1

「提督、哨戒中のショートサンダーランドより緊急入電です」

ジェームズ・サマヴィル提督

「どうしたんだ」

英士官1

「はい報告します【我、敵艦隊を発見、敵艦隊は貴艦隊より約60キロの地点を航行中、敵艦隊の編成は、テンワクラス巡洋戦艦4、巡洋艦4、大小駆逐艦多数、さらに識別表にはない新型戦艦を4隻確認、コンゴウクラス戦艦は確認できず、繰り返す、接近中の敵艦隊の主力戦艦はコンゴウクラスに非ず！！】以上です」

ジェームズ・サマヴィル提督

「馬鹿な！日本海軍は何時、新型戦艦を建造したんだ、少なくとも、日本の工業力にこんな短時間で戦艦を作れるわけがないだろ」

英士官1

「ですが、サンダーランドの情報ですと」

ジェームズ・サマヴィル提督

「・・・分かった、少なくとも、ネルソンとロドネーの2隻で敵新型戦艦4隻で・・・か、」

英参謀1

「提督、ここまで来たら後は、実行するのみです」

ジェームズ・サマヴィル提督

「そうだな・・・」

英水兵1

「現在敵艦隊との距離約5万！」

第二連合艦隊 印攻略艦隊 (17:40)

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「敵艦隊との距離、4万まもなく射程に入ります」

翔平

「距離3万6千で砲撃戦を開始する」

雄哉

「了解」

水兵2

「敵艦隊、右へ回頭を開始、丁字戦法に持ち込む気です！」

翔平

「面舵一杯！これより同航戦に入る」

雄哉

「了解！面〱舵！」

水兵3

「面〱舵、宜候！」

イージス巡洋戦艦 十六夜 CIC

水兵4

「現在、敵艦隊との距離、3万8千、全主砲、データ入力開始します」

砲術長

「うむ」

水兵4

「敵艦隊、速力20ノット・・・データ入力完了！」

砲術長

「主砲装填、弾種、零式徹甲弾」

零式徹甲弾とは、九一式徹甲弾をさらに改良したものだ

水兵4

「全主砲塔自動装填・・・装填完了！」

水兵5

「敵艦隊との距離、3万7千・・・」

英東洋艦隊（17：45）

旗艦 戦艦 ネルソン

英水兵1

「敵艦隊との距離、3万7千、先頭艦は巡洋戦艦テンワクラス、その後方に新型戦艦を確認」

ジエームズ・サマヴィル提督

「まず先頭の艦を潰す、主砲、撃ち方始め！目標敵先頭艦、ロドネーも続け」

砲術長

「アイ・サー、ファイヤー！」

ドオオオン

英水兵2

「・・・弾着、全弾、遠弾！」

砲術長

「落ち着いて狙え」

英水兵1

「敵艦隊発砲！」

艦長

「なんだと、馬鹿な、届くわけがない、敵艦がテンワクラスなら主砲は12インチのはず・・・」

ズシューウーーンッ！！

ズシューウーーンッ！！

ネルソン周辺に高い水柱が上がった、それは明らかに30センチ砲の威力を超えているというのは確かであった

英士官1

「夾叉されました」

ジェームズ。サマヴィル提督

「馬鹿な、この威力は・・・くっ、情報部の馬鹿共が、敵の偽情報を掴んで喜んでたのか」

砲術長

「主砲、装填完了」

艦長

「撃て、今度こそ命中させよ」

砲術長

「ファイア！」

ネルソン

「今度こそ・・・当てます」

ドオオオーン

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵 1

「敵艦発砲」

雄哉

「面舵 20、第三戦速」

水兵 1

「おもかくじ、20、よろそろ」

秀介

「第三戦速」

ズシュウウーーンッ！！

ズシュウウーーンッ！！

翔平

「夾叉か、艦長見事な操艦だ」

雄哉

「有難うございます」

十六夜

「落ち着いていますね長官」

翔平

「戦場では冷静さを失った方が負けだ」

水兵 2

「第三戦隊、砲撃を開始しました」

翔平

「そうか、砲戦を続行せよ」

雄哉

「了解」

第一機動艦隊

第三戦隊 旗艦 戦艦金剛 艦橋

水兵3

「着弾・・・今！」

水兵6

「命中弾2！初弾命中！」

金剛が放った41センチ徹甲弾は弧を描きながら、英戦艦、レゾリ
ューションに命中した

小柳艦長

「砲術長、よくやった、この調子で行くぞ」

砲術長

「恐縮です・・・第二射、用意！」

士官1

「全砲塔装填完了！」

砲術長

「第二射、撃つ——！」

ドオオオオン

金剛に続いて、比叡、榛名、霧島も第二射と砲撃を続けた

英東洋艦隊

戦艦 リヴェンジ

リヴェンジ

「っち、やるな、だがこのくらいで、私は沈まん！」

防空指揮所で、出血しながらも、サーベルを構えて、今撃ち合っている、金剛に向ける

英水兵 2

「第三番主砲塔に被弾、旋回不能！」

英士官 2

「目標ロスト、レーダー損傷！」

艦長

「光学標準に切り替える！」

砲術長

「アイ・サー」

英水兵 3

「てっ、敵艦発砲！」

艦長

「急速転舵！取舵！」

英操舵手

「アイ・サー」

操舵手が懸命に舵輪を回し、リヴェンジは艦首を急速に左に向ける

ズズウウウン

ズズウウウン

英水兵3

「艦首付近に至近弾！」

英水兵4

「艦首に若干の浸水確認！」

艦長

「排水作業急げ！」

英士官2

「アイ・サー」

慌ただしく水兵がリヴェンジの艦内を走り回り、懸命に応急修理をしていた時だった、

リヴェンジの艦橋に空気を切り裂くような、大爆発音が響いたのは

リヴェンジ

「なっ！！まさか・・・」

艦長

「どうした！！」

英水兵3

「嘘だろ・・・戦艦・・・ラミリーズ・・・轟・・・沈しました」

比叡と撃ち合ってた、ラミリーズの第二砲塔に比叡の放った、零式徹甲弾の一発が、ほぼ直角に天蓋を突き破った、零式徹甲弾は主砲直下弾薬庫にて使命を終えた、その直後、第二砲塔弾薬庫の発射を待っていた、数百発の砲弾が誘爆し、あっという間に轟沈した

艦長

「つく、砲術長！ラミリーズの仇だ！撃って、主砲が焼切れるまで撃って！」

砲術長

「イエッサー」

英水兵5

「主砲装填完了！」

砲術長

「ファイア！！」

リヴェンジ

「喰らえッ！！」

リヴェンジがサーベルを振り下ろすのと同時に

ドオオオオン

リヴェンジのまだ射撃可能の主砲三基が火を噴いた

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン 艦橋

ズガッガ——ン

英士官1

「う、右舷後部甲板に被弾！！右舷副砲全滅しましたッ！！」

十六夜が放った、零式徹甲弾がネルソンの右舷後部にある副砲塔に着弾し、副砲塔を薙ぎ払った

副長

「ダメージコントロール急げ！」

ネルソン

「・・・くっ、まだ、です、まだ・・・」

ジエームズ・サマヴィル提督

「砲術長、今度こそ当てろ！敵の先を読むんだ！！」

砲術長

「イエッサー！！」

ネルソン

「今度こそ、今度こそ！」

ドオオオオン

英水兵 1

「・・・命中!!」

水兵が叫んだとたん、艦橋が歓喜に包まれた

ジエームズ・サマヴィル提督

「やったか?!」

英水兵 2

「敵艦増速!・・・速い!」

ジエームズ・サマヴィル提督

「なんだと!!」

英水兵 6

「敵艦、速い! 駆逐艦並み、いや、それ以上です!!」

ネルソン

「!?!・・・今、一瞬敵艦の艦首が浮き上がったような・・・?」

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イーリス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「被害報告！」

水兵1

「ハッ！艦首第一砲塔付近に被弾！ですが被害らしき被害特にありません、各部機構、オールグリーン！！」

戦艦ネルソンの40・6cm徹甲弾は十六夜の艦首、第一砲塔付近に被弾したが、装甲が砲弾を弾き、被害は軽微であった
なぜなら、十六夜を始めとする、天羽型巡洋戦艦は、自艦の主砲、16式305mm60口径電磁投射砲が放つ徹甲弾の直撃に耐えられるように、設計し装甲されているからだ。

翔平

「十六夜、大丈夫か？」

十六夜

「平気です」

翔平

「そうか、艦長、そろそろやるぞ！増速！速度45ノット、取舵20、駆逐艦は現針路を維持、敵駆逐艦を各個撃破！」

雄哉

「了解、僚艦に通達！速度45ノット、取舵20！」

翔平

「さて、どう出る、英国海軍・・・」

翔平の表情が変わった・・・

その表情は、まるで、いたずらを仕掛けた子供のような表情であった・・・

第二十八話 インド攻略作戦 中編（後書き）

第二十九話 インド攻略作戦 後編

12月1日(19:10)

インド洋

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「敵主砲弾第二射の迎撃に成功!第三射来ますッ!!」

雄哉

「引き続き、速射砲、フアランクスをもって迎撃せよ」

巡洋戦艦十六夜は、その高い防空能力を最大限に発揮し敵戦艦主砲弾を叩き落としていた

水兵2

「敵戦艦との距離6千400!」

翔平

「敵戦艦後方、主砲の射角外から接近!副砲には、速射砲で対処だ」

雄哉

「了解、速度20ノット、針路戻せ!」

水兵1

「針路、戻します!」

十六夜と十五夜は英戦艦ネルソンを後方から二隻で挟む形で、航行を開始した

英東洋艦隊

戦艦 ロドニー 艦橋

英水兵 1

「敵巡洋戦艦、旗艦ネルソンに接近、距離 6 千!」

艦長

「ネルソンは何をやってるんだ、攻撃は?どうした」

英水兵 1

「主砲の射角外に入られた模様、副砲塔は完全に破壊されて射撃不能ですッ!」

艦長

「チッ、本級の、構造上の欠陥を利用して・・・」

英水兵 2

「ッ!! 本艦後方にも敵巡洋戦艦 2 隻! 高速で接近中、まもなく、主砲の射角外に入りますッ!!」

十六夜と同じ行動を天羽と天月も行っていた

艦長

「砲術長! 第二、第三主砲、斉射だ!」

砲術長

「イエッサーッ!!」

ロドニーの主砲が旋回し天羽に照準を合わせる

砲術長

「ファイアーッ!!」

ドオオオオン

ロドニーが徹甲弾6発を放った、この時、二隻の距離は、わずか6メートル、超弩級戦艦なら、超至近距離に相当する距離だ、戦艦ロドニーの、乗組員は全弾必中を確認していたが・・・

その6発の徹甲弾は天羽に真っ直ぐ飛び、その装甲を突き破ろうとしていたが

突如、空中で全弾が爆発した・・・

ロドニー

「う、嘘でしょ、砲弾を撃墜した?!」

人間より、身体能力が高い、艦魂のロドニーには、天羽の127mm速射砲が正確に、徹甲弾を撃墜したのが見えていた

英水兵1

「そんな・・・自爆した・・・」

艦長

「く、こんな時に・・・主砲第二射、急げ！」

砲術長

「だめです、敵艦、主砲射角外に・・・主砲射撃不能！」

艦長

「ならば、副砲で対処だ」

英士官1

「無理です、副砲は先の航空攻撃と砲撃で、全て射撃不能ですッ！
！」

艦長

「くっ・・・なら、前方の敵艦に目標変更！第一、第二主砲射撃準備！斉射だ！！」

砲術長

「イエッサー！」

英水兵3

「・・・！！待ってください！ネルソンが射線に入りますッ！！」

砲術長

「なんだと！！」

艦長

「っ！・・・まさか、奴らそれを狙って・・・」

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン

英水兵 4

「ダメです、完全に捕捉されています」

ネルソンの艦橋では、後方四千で追尾してくる、十六夜と十五夜を引き離すのに必死だった

艦長

「転舵面舵20!」

英水兵 5

「敵艦転舵、此方に針路を合わせてきます」

ジェームズ・サマヴィル提督

「く、駄目か・・・」

英士官 1

「提督、敵艦隊旗艦イザヨイより入電です【降伏せよ】・・・以上です」

艦橋に冷たい空気が流れた

ジェームズ・サマヴィル提督

「くッ・・・（降伏しかもう手がないのか・・・）」

英水兵 6

「提督！マドラスより緊急入電です【発：マドラス守備隊、宛：友軍艦隊、敵上陸部隊、海岸線に多数あり、夜間爆撃及び艦砲射撃にて被害甚大、大至急援護を求む】以上です」

ジェームズ・サマヴィル提督
「なっ！・・・嵌められたか」

この報告を聞き、英東洋艦隊、ジェームズ・サマヴィル提督は史実を悟った

ジェームズ・サマヴィル提督

「（くっ、三ヶ月前に、日本陸軍がカルカッタを占領している、ここでマドラスが墜ちれば、東インドが完全に、日本軍の手に落ちる、それを分かっているながら、くっ、恐らく、後方の艦隊は、我々を釣り出す筈だったのであるう・・・）・・・ふっ、我々はとんでもない相手を敵に回してしまったのかもしれないな」

英参謀1

「提督、」

ジェームズ・サマヴィル提督

「ああ、全艦に通達、戦闘旗を下ろせ、艦長、機関停止だ」

艦長

「・・・アイ・サー、機関停止」

ネルソンの推進軸は回転を止め、惰性で進み始めた

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「敵艦隊、速力低下」

水兵2

「敵艦隊より通信【我降伏の準備あり】以上です」

翔平

「よし、内火艇用意！艦長、武装解除だ、」

雄哉

「了解！舵中央、機関停止！内火艇用意！」

水兵3

「よくそろ！」

水兵4

「長官、第一機動艦隊、旗艦赤城より通信です」

翔平

「お、分かった、繋いでくれ」

水兵4

「了解」

翔平

「小沢さん、タイミングばっちりです有り難う御座います」

小沢治三郎

「【うむ、それはよかった、陸の様子はまだ散発的な抵抗があるらしいが、今、三宅と八丈が艦砲射撃で黙らせている、そっちはどうだ】」

翔平

「こちらは、現在英東洋艦隊が降伏し、これから武装解除に向かうところです」

小沢治三郎

「【・・・何隻敵から分捕ったら気が済むんだ】」

翔平

「来たるべき総力戦に備えて、短期間で改造が可能な主力艦船は多い方がいいです」

小沢治三郎

「【そうなのか、まあ、餅は餅屋で考えることが違うんだろうがな】」

「

翔平

「そうですね、技術屋には技術屋の考えがありますから」

小沢治三郎

「【そうだな・・・また連絡する、対潜警戒は厳重にな】」

翔平

「了解しました」

プツン

翔平

「対潜警戒を厳に、シーホーク発艦用意！」

雄哉

「了解、シーホーク対潜装備で発艦せよ！」

水兵 5

「了解」

翔平

「さて、降りるか、十六夜・・・うん？艦長、十六夜はどこに行っ
たんだ」

雄哉

「さっき、ふらりとどこかに行きました」

翔平

「・・・そうか、艦長行くぞ」

雄哉

「はい、お供します、副長後頼んだぞ」

副長

「了解、お任せください」

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン

英水兵 1

「日本艦隊、艦隊陣形変更を開始しました」

ジェームズ・サマヴィル提督

「・・・とても整った艦隊運動だ、（我々は東洋の猿と彼らを侮り

過ぎてたな）」

英水兵 2

「内火艇が三隻接近中、速い！」

巡洋戦艦十六夜から三隻の内火艇が波を切り、ネルソンに向かって
いた

ジェームズ・サマヴィル提督

「（確か、トーマスも日本海軍の大將と話したとか、ずいぶん若かつたそうだが）・・・ラッタルを下ろせ」

艦長

「イエッサー！」

ジェームズ・サマヴィル提督

「よし」

サマヴィル提督は艦橋の提督用の席から立ち、艦橋の出口に向かった

英参謀 1

「え！提督どちらに！？」

ジェームズ・サマヴィル提督

「甲板だ、貴官らもついてこい」

英参謀

「え、お待ちください、提督」

ジェームズ・サマヴィル提督は参謀達を引き連れて甲板に向かった

第二連合艦隊 印攻略艦隊

十六夜所属 内火艇一号

翔平

「艦尾の被害がひどいな」

雄哉

「蒼山隊の対艦ミサイルであらかた吹っ飛んだでしょう」

翔平

「はあゝまた、親父が喜びそうな、艦が手に入ったと言う事か・・・」

「

雄哉

「もうすでに、呉を旗艦とした第一支援艦隊がこちらに向かっていくとのことですよ」

翔平

「はあゝちょっと頭痛が（また、とんでもない性能の艦が・・・）」

水兵5

「接舷します」

翔平

「あ！・・・頼んだ」

水兵5

「了解」

雄哉

「もうすでに、近藤信竹中将指揮下の第三戦隊は武装解除を開始しているとのことです」

翔平

「流石だ、手際がいいな、よし、武装解除に向かう、準備はいいか」

水兵5

「接舷完了、多少揺れますが」

水兵6

「全員準備完了」

翔平

「よし行くぞ」

翔平は壮快にラッタル駆け上っていった

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン 甲板

ジェームズ・サマヴィル提督

「（大将の階級章・・・若いな）やはり、アドミラルハヤシか・・・」

ジェームズ・サマヴィル提督はラッタルを壮快に駆け上がってきた、帝国海軍第二種軍装に身を包んだ、将官を見てつぶやいた。

翔平

「私は、大日本帝国海軍、第二連合艦隊司令長官、林翔平大将です、貴官をジェームズ・サマヴィル提督と見受けませんが宜しいですか」

ジェームズ・サマヴィル提督

「確かに、私が英国王立海軍、東洋艦隊司令のジェームズ・サマヴィル中将だ、乗組員たちの保証は、日本海軍の事だから大丈夫とは思うが」

ジェームズ・サマヴィル提督は帝国陸海軍が今まで捕虜を母国に帰していることを知っている、このことは、将官だけでなく、下士官や兵たちにも知られており、日本の印象を変えつつある

翔平

「もちろんです、すでに拿捕した輸送船を何隻かをこちらに急行させています、それでも足りなければ、付近で救助作業中の病院船氷川丸及び松島を出して、最寄りの中立国まで送りましょう」

ジェームズ・サマヴィル提督

「うむ、それを聞いて安心した」

その時海の彼方から輸送船の汽笛が聞こえた

翔平

「おっと、輸送船が来たようですね、では、駆逐艦、巡洋艦以外の乗組員に下艦を命じてください」

ジェームズ・サマヴィル提督

「分かった、貴官の厚意に感謝する」

翔平

「いえ、私は責務を果たしているだけです」

ジェームズ・サマヴィル提督

「戦った相手が貴官であったことを神に感謝するよ、ではまたお会いしましょう」

翔平

「はい、提督、できれば平和な時に・・・」

20分後、英戦艦乗組員はやってきた輸送船に乗船し、最寄りの中
立国等に送られた

一方その頃・・・マドラス

此処では、英陸軍と海軍陸戦隊及び帝国陸軍が激しい攻防戦を開始
していた

純平

「このまま、防衛線突き破るぞ！陸軍さんの一撃は付いて来てる
か？」

陸兵1

「はい、付いて来てます！」

純平

「そうか」

純平は、指揮能力向上型の25式戦車2型から陸戦隊の指揮を行っていた

陸兵1

「隊長！11時の方向に敵戦車ア！数4、チャーチルです！」

野村

「5号車から9号車応戦用意イ！」

陸兵2

「了解」

陸兵3

「射撃準備よし」

野村

「射撃開始！」

ドン ドン ドン ドン

25式戦車から放たれた125mmの砲弾は正確にチャーチル歩兵戦車に命中し、チャーチル歩兵戦車をスクラップに変えた

ガァァ——ン！！

純平が乗車していた、25式戦車に今まで受けたことがない衝撃を受けた

純平

「どうした！」

陸兵 1

「全面装甲に敵砲弾命中、装甲が弾き返しました！被害なし！」

陸兵 2

「2時の方向に、新たな敵戦車、距離1000、数2！・・・あれはティーガー！？」

純平

「ハッ、連合軍最強戦車のお出ましか、よし正面から受けてやろうじゃないか」

陸兵 3

「了解！」

陸兵 2

「射撃準備完了」

純平

「撃てーッ！」

ドン

英陸兵 1

「おい見ろ、独逸のタイガーだ！」

英陸兵 2

「よし、速いところ日本軍を押し戻そうぜ」

ティーガー？の登場により英軍の士気は少し上がったが

英陸兵 3

「よし、命中だ！」

ティーガーの撃った砲弾が25式戦車の側面に命中し撃破したと思
った英陸兵だが・・・

英陸兵 1

「う、嘘だろ・・・」

英陸兵 2

「化け物かあいつは・・・」

無傷で走り続けている、25式戦車を見て、畏怖した

ズッドオオン

ティーガーに125mm砲弾が命中した

英陸兵 3

「う、嘘だろ、あの無敵戦車が一撃で・・・」

こうして、独逸の援護も空しく、英軍は降伏し、わずか一日でマド
ラスは陥落した・・・

第二十九話 インド攻略作戦 後編（後書き）

天嶽

「遅れました、申し訳ありません」

播磨

「さあ、理由を話してもらいましょうか」

天嶽

「ちょっと風邪をこじらせまして・・・はい、さらに中間テストの真只中で・・・はい」

播磨

「だから、執筆が遅れたと」

天嶽

「はい、しかも、急いで書き上げたため、誤字脱字があるかも・・・」

播磨

「はあ、明日もテストなんですよ」

天嶽

「はい、古典と生物？・・・生物・・・自信がない・・・」

播磨

「早く、勉強なさい、今日は見逃してあげるから」

天嶽

「うそ！・・・じゃあ勉強します・・・」

播磨

「ご意見ご感想お待ちしています」

第三十話 保有戦艦ヲ改造セヨ

1943年2月1日

大日本帝国 帝都 東京
海軍軍令部

インド攻略作戦が無事終了し第二連合艦隊 印攻略艦隊は、日本に
帰還し、本隊と合流していた、ちなみにインド洋防衛は、新たに新
設された、第八艦隊が受け持っている

ちなみに第八艦隊の編成は・・・

第八艦隊

司令長官：三川軍一中将 旗艦：戦艦豊前

戦艦

豊前 豊後 対馬

大型空母

霊龍 幻龍 慧龍

軽空母

霊鷹

重巡洋艦

八海 雲仙 鉢伏 斜里

防空軽巡洋艦

阿賀野型4隻

駆逐艦

松型12隻

補給艦

根室 知床

航空機

295機

全て35ノットを超える高速艦隊である、母港は占領されたコロンボ港を使用している

作戦が終了し、軍令部に報告に来ていた、翔平は、弘明に話があると言われて、個室に入った

翔平

「で、何か分かったことはあったのか、堀井中将・・・てか、なんで親父もいるんだよ」

弘明

「ああ、済みません、先ほど見かけましたので呼びました」

武

「艦政本部にネルソン級とR級の改造図面を提出してきたところだ、その後軍令部に来たんだ」

翔平

「ほう、真面な改造だろうな」

武

「多分な」

翔平

「おい」

弘明

「あの〴〵そろそろ話を始めていいですか」

翔平・武

「「ああ、スマンいいぞ」」

弘明

「（親子だな、息ピッタリ）では、これは、先遣偵察隊からの最新の報告書です」

翔平

「おう、来たか、米海軍の新型戦艦のスペックが分かったのか？」

弘明

「はい、デジタル信号で暗号化されていますので、敵も気づいてはいないようです、今回は写真付です」

武

「ほう、やるな写真付とは」

弘明

「はい、彼らの仕事は一級品ですから」

翔平

「で何が分かったんだ今回は」

弘明

「モンタナ級に次ぐ、新型戦艦Xがあと半年で進水するそうです」

翔平

「ほう、艦名は分かるか？」

弘明

「一番艦は・・・ユナイテッド・ステーツだそうです」

武

「敵は合衆国か・・・ピッタリじゃねえか、大和のライバルにはよ
お」

翔平

「性能は分かるか？」

弘明

「先遣偵察隊から送られてきた報告書に記入されていました、どう
ぞ」

米海軍新型戦艦ユナイテッド・ステーツ

全長381m 基準排水量120,500t

全幅42.3m 満載排水量182,200t

速度27.42ノット

主砲 Mk.8 19インチ50口径砲 三連装 4基

両用砲 Mk.12 5インチ38口径砲 連装 12基

機関砲 40mmボフォース機関砲 四連装 20基

20mmエリコンSS機関砲 単装 60丁

同型艦

ユナイテッド・ステーツ アメリカ コンステレーション コン
ステーション

ロードアイランド アーカンソー カリフォルニア ワイオミング

翔平

「じゅ・・・１９インチ？・・・４８センチか」

弘明

「旧式戦艦の弩級戦艦を解体し、そのスクラップも流用されている
そうです」

武

「しかも、８隻と来たか・・・ちなみに他の艦は？」

弘明

「アイオワ級は史実通りの高速戦艦として、唯モンタナ級は４６セ
ンチ砲を搭載しているそうです」

武

「スペックは分かるか？」

弘明

「はい」

米海軍新型戦艦モンタナ

全長 327 m	基準排水量 100,500 t
全幅 38 m	満載排水量 162,000 t

速度28・02ノット

主砲	Mk・7	18インチ50口径砲	三連装	4基
両用砲	Mk・12	5インチ38口径砲	連装	10基
機関砲	40mmボフォース機関砲		四連装	20基
	20mmエリコンSS機関砲		単装	60丁

同型艦

モンタナ オハイオ メイン ニューハンプシャー ルイジアナ
バーモント

弘明

「米国はパナマ運河が破壊されたことにより、再建する際大規模な拡張工事が行われたようでした、最大で全長450m全幅85mの艦船は通行可能だそうです」

武

「そうか、それにしても、物量が、つれえな・・・ユナイテッド・ステーツとモンタナに対抗できるのは、大和型4隻、播磨型6隻、長門型2隻・・・計12隻、51cm砲36門、46cm砲18門、播磨のレールガンは通常の装薬式に直すと威力はだいたい・・・62cm砲だから、これが54門、対して向こう側はユナイテッド・ステーツ型8隻、モンタナ型6隻・・・計14隻48cm砲96門、46cm砲72門・・・今まで米海軍の標準口径が16インチと予想して、改造してきたからな・・・如何する、今から改造するにしても、そう簡単に46cmを搭載する事はできんし、トマホークを複製して、飽和攻撃でもやるか・・・」

翔平

「やめーい、本気でやりそうだから怖いな」

武

「ほぼ冗談だ、でも今保有している戦艦だけじゃきついな・・・よし、改造しよう」

弘明

「簡単じゃないんじゃないですか?！」

武

「簡単ではないけど、できないとは言っていない!!--もうすでに大和の改造案は出来ている!」

翔平

「予想していただろ!」

武

「気のせいだ」

バンと武が机の上に図面を置く

戦艦大和

全長 42.5 m 基準排水量 165,500 t

全幅 61.5 m 満載排水量 235,200 t

速度 35.4 ノット

主砲 零式 60 口径 510 mm 砲 三連装 4 基

副砲 三式 60 口径 203 mm 砲 三連装 2 基

両用砲 OTOMメララ 127 mm 速射砲 連装 12 基

OTOMメララ 76 mm 速射砲 単装 8 基

機関砲 25mmフランクスCIWS 連装 4基

機銃 40mm対空機銃 4連装 40基

機銃 25mm対空機銃 3連装 20基

ミサイル Mk57VLS80セル 2基

一式対空ミサイル、五式対潜ミサイル
八式対艦ミサイル

艦載機

V-22 オスプレイ 2機

SH-60K 3機

最大搭載機数 8機

同型艦

大和 武蔵 信濃 三河

武

「主砲を一基増設し、さらに墳進弾垂直発射機を強化！対空火力強化のためOTOMメララ76mm速射砲も装備しさらに、最大の変更点は、両舷のバラストタンクを要とした独特の防御機構によって、半潜状態になることが可能なことだ、これを利用することにより、防御上でメリットがかなりあるはずだ、さらに水流噴射推進装置を使用しての急加速と、球状艦首に装備されたバウスラスタ―、艦尾の水中安定翼によって通常的大型艦では考えられない回避運動をとる事が可能、現在の我々の最先端技術を詰め込んだ、史上最大最強の戦艦だ！！」

弘明

「・・・・・・」

翔平

「あきれてものが言えん」

武

「よし、さつそく大和型を全艦ドックに入れて作業する手配と、鋼材を手配してその後から、全戦艦の設計図を引きなおして・・・そういえば、明日、呉で新型航空戦艦が就役する」

翔平

「レキシントンの改造が終わったのか？」

武

「ああ、それと明日正式に命名されるが・・・新しい艦名は『関ヶ原』だ」

第三十話 保有戦艦ヲ改造セヨ（後書き）

御意見御感想お待ちしています

第三十一話 作戦準備期間

2月2日

大日本帝國海軍 呉海軍工廠
第六船渠

呉海軍工廠は、日本最大の海軍工廠であり、現在、修理用のドックを含めて十の船渠を持つ巨大工廠だ、もちろん周辺は対空高射砲陣地、局地戦闘機用滑走路等の防衛設備も充実している

今日此处、呉海軍工廠で二隻の艦船の改造が終了し、凡そ五か月ぶりに、その船体を海に浮かべようとしていた

巨大な船体を持ち、中央に巨大な砲塔と城郭を思わせる黒鉄の艦橋、そして、それら構造物を挟むようにして、設置されたV字飛行甲板、基準排水量12万トン、全長390m、全幅68m、最大搭載機数90機、零式60口径510mm砲3連装を3基搭載する、世界最強の航空戦艦、関ヶ原、桶狭間・・・元米海軍航空母艦レキシントンとサラトガの姿であった

航空戦艦 関ヶ原 艦橋

翔平

「どうだ、関ヶ原、桶狭間、気分は」

関ヶ原

「気分はいいけど、気持ちが複雑ね、」

桶狭間

「そうね」

翔平

「祖国と戦うことか？」

関ヶ原

「いえ、私はもう大日本帝国海軍の航空戦艦関ヶ原よ、そんな抵抗はないわ、複雑なのは、自分の多忙な艦歴よ」

桶狭間

「あたしもまさか、航空戦艦に改造されるなんて思ってもみなかったわ」

翔平

「ああ、なるほど」

翔平は納得した

レキシントンとサラトガは元は巡洋戦艦として建造されていたが、条約により航空母艦に改造、さらに、拿捕されて、機関室等の全面修理交換が必要なため、艦体全体を改造し航空戦艦に生まれ変わったのだ

関ヶ原

「生まれた時はこんな多忙な人生？になるなんて思わなかったもの」

翔平

「まあ、俺も歴史を変えるなんて思っていなかったけどな・・・ま

あ、桶狭間共々頑張ってくれ」

関ヶ原

「任せてください」

桶狭間

「言われなくても分かっているわ」

翔平

「頼んだぞ」

翔平はそう言って艦橋から出て行った

関ヶ原、桶狭間の両艦は主力艦と言う事で第一連合艦隊、第六戦隊に配備されるがその前に、完熟訓練のため、2ヶ月間日本海で新型重巡洋艦、霊仙型の五番、六番艦、九重と斜里と駆逐艦松型6隻と共に艦隊運動訓練等が行われる予定だ

翔平は関ヶ原から内火艇に移り、関ヶ原と入れ違いに船渠に入渠する、世界最強最大級の戦艦に目を向けた

翔平

「親父め、さっそく改装する気か・・・」

そう、昨日の話し合いの後、武はすぐ艦政本部に戻り設計図を提出、その足で工作艦宗谷に戻り、資材を発注し、さらに各戦艦の図面を引き直し作業にかかった

第六船渠には大和が入渠し、その隣の第七船渠には武蔵が入渠、さ

らに信濃、三河は九州大分の大神海軍工廠に移動し明日の2月3日に入渠の予定が立てられている

翔平は大和の入渠する船渠を見る、すぐその隣には第五船渠がある、第五船渠では米空母ホーネットの改装中、資材加工工場、小組立工場を挟んで、第四船渠ではエンタープライズ、その隣第三船渠ではヨークタウンの改装作業中を行っている真つ最中であつた

大和

「翔平さん、お久しぶりです」

翔平

「おお、大和か久々だな」

大和

「ええ、私達はずっとトラックでしたから」

翔平

「そうか、山本長官はお見えになるか？」

大和

「はい、今は旗艦を扶桑に移して指揮をとっています」

翔平

「そうか分かつた有難う」

大和

「どういたしまして、出はこの辺で」

翔平

「ああ」

こうして翔平は旗艦である播磨に戻った

第二連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 長官執務室

翔平

「やはりこの部屋が一番落ち着くな」

翔平が執務室でくつろいでいると

啓太

「入るで、翔ちゃん」

翔平

「おお、啓太が、入れ」

啓太が入ってきた

啓太

「ほい、これがここ三ヶ月、第二連合艦隊、本隊の活動報告書や」

翔平

「うん、分かった、見せてくれ」

翔平は活動報告書を受け取り目を通す

翔平

「南太平洋の戦局はどうだ」

啓太

「静かなもんや、豪州を中立にさせたことが効いているんやろか」

翔平

「ああ、第一連合艦隊が去年の暮れに行った作戦だろ、無茶するよな、山本長官も」

第一連合艦隊は去年の暮つまり12月末に豪州シドニーに姿を見せつけ、豪州政府を威嚇し、単独講和に着かせることに成功した、これにより連合軍側は南太平洋における制海権、制空権をほぼ失い、さらに豪州と言う中継基地を失った

翔平

「さて、次は、いよいよ、ハワイか・・・」

山本五十六

「その通りだ、林君」

翔平

「！！山本長官いったいいつから」

山本五十六

「ついさっきだ」

翔平

「こちらから行きましたのに」

山本五十六

「いや、今司令部は仮住まいへの引っ越しに忙しいんだ、来られたらむしろ困る」

武

「おい、翔平、図面ができたぞ」

さらに目の下にクマを作っていた武が入っていた

翔平

「・・・また徹夜しただろう、まったく、母さんがいないといつもこれだ」

武

「大丈夫だ自分の健康管理ぐらいはできている、あつ山本長官、いらしていたんですね」

山本五十六

「ああ、ところでもう図面が引けたのか」

武

「はい、今いる設計技師を総動員させましたから」

山本五十六

「不備はないだろうな」

武

「もちろんです、つい先ほど、牧野呉海軍工廠造船部設計主任にも話してきたけど大丈夫だ」

翔平

「親父は、性格はこんなのですが、艦船の事だけに關しては一級品の仕事をします」

武

「なんだその言い草は、一応軍事関連は極めているつもりだぞ」

山本五十六

「ゴホン、まあ、信用できる仕事をしていることは今までの事でわかつている」

翔平

「親父は図面を持ってきたんだろ、見せてくれないか」

武

「ああ、検討した結果、比較的短期間に改造が可能な戦艦のみ改造することにかまつた」

山本五十六

「ほう、何隻あるんだ」

武

「検討した結果ですが、大和型4隻、長門型2隻、日本艦はこれのみです、伊勢、扶桑、金剛型はこれ以上改造するとバランスが悪化し、復元力を大幅に低下させます、次に英戦艦ネルソン型・・・若狭型2隻、元独戦艦ビスマルク・・・丹波型2隻を改装します、計10隻です」

では、性能表をこの機会に書いておく

戦艦長門

全長 38.5 m 基準排水量 125.500 t
全幅 55.5 m 満載排水量 182.800 t
速度 35ノット

主砲 零式 60口径 510 mm 砲 3 連装 3 基

副砲 三式 60口径 203 mm 砲 3 連装 2 基

両用砲 OTOMEX 127 mm 速射砲 連装 8 基

OTOMEX 76 mm 速射砲 単装 4 基

機関砲 25 mm フランクス CIWS 連装 4 基

40 mm 対空機銃 4 連装 3 4 基

機銃 25 mm 対空機銃 3 連装 1 8 基

ミサイル Mk 57 VLS 80 セル 1 基

一式対空ミサイル、五式対潜ミサイル

八式対艦ミサイル

艦載機

SH-60K 1 機

最大搭載機数 3 機

同型艦

長門 陸奥

戦艦若狭

全長 36.5 m 基準排水量 116.500 t

全幅 51.2 m 満載排水量 171.200 t

速度 35ノット

主砲	零式60口径510mm砲	3連装	3基
副砲	三式60口径203mm砲	3連装	2基
両用砲	OTOメララ127mm速射砲	連装	8基
	OTOメララ76mm速射砲	単装	4基
機関砲	25mmフランクスCIWS	連装	4基
	40mm対空機銃	4連装	34基
機銃	25mm対空機銃	3連装	18基
ミサイル	Mk57VLS80セル		1基
	一式対空ミサイル、五式対潜ミサイル		
	八式対艦ミサイル		

艦載機

SH-60K 1機

最大搭載機数 3機

同型艦

若狭 伯耆

戦艦丹波

全長37.2m	基準排水量121.500t
全幅54.5m	満載排水量195.200t
速度38ノット	

主砲	零式60口径510mm砲	3連装	3基
副砲	三式60口径203mm砲	3連装	2基
両用砲	OTOメララ127mm速射砲	連装	8基
	OTOメララ76mm速射砲	単装	4基
機関砲	25mmフランクスCIWS	連装	4基

機銃	40mm対空機銃	4連装	34基
ミサイル	25mm対空機銃	3連装	18基
	Mk57VLS80セル		1基

一式対空ミサイル、五式対潜ミサイル
八式対艦ミサイル

艦載機

SH-60K 2機

V-22 電空 2機

最大搭載機数 5機

同型艦

丹波 丹後

翔平

「意外と少ないな、全部改造するかと思った」

武

「資材の発注が間に合わないのと、時間がかかるんだ、大和型の改装終了は3か月後を予定している、長門型、ネルソン型、丹波型は完全機械化がされている、ドック艦呉型、及び神戸型でやっていく、これにより改装期間は約1か月から2か月と言ったところだ、大和も本当はドック艦で改造をしたかったんだが、呉型をもってしても大和は入らないからな」

山本五十六

「分かった」

武

「では、自分はこれで」

武は設計図を丸めて、部屋を出て行った

山本五十六

「それで、この作戦所に目をしておいでくれないか」

翔平

「いよいよ、ハワイ攻略ですか」

山本五十六

「そうだ、関ヶ原、桶狭間の完熟訓練が終了し次第、作戦準備期間に入る」

翔平

「投入兵力は、どのくらいですか」

山本五十六

「現在ハワイ、真珠湾には碌な艦隊はおらんらしいが、ハワイ諸島は要塞化が進められているらしい、得に航空兵力が中心だそうだ」

啓太

「と言う事は、次は航空兵力が中心で？」

山本五十六

「そうだ、第一機動艦隊、第二機動艦隊は現在訓練に余念がないらしい、小沢と山口が、航空兵に発破をかけているみたいだな」

翔平

「そう言えば、新しく、第三機動艦隊が編成されたとか」

山本五十六

「いま、第一連合艦隊が内地に帰還したからな、その埋め合わせとして、マーシャルに配備されたそうだ」

翔平

「第三機動艦隊の乗員の10%が女性と聞きましたけど・・・軍令部がよく動きましたね」

海軍軍令部では、第二連合艦隊では女性が10%占めている事実を目を向けて、その代表である、参謀の清水葵中将に話を聞き、5年ほど前から女性兵学校を設立した

山本五十六

「最近の軍令部もずいぶん変わってきたからな」

翔平

「時代のせいですよ、時代の」

播磨

「二人とも急に老け込まない!」

翔平

「おお、播磨か」

山本五十六

「私はいい歳なんだけどな」

翔平

「なにを言っているんですか、長官にはまだ現役でいてもらわない

と」

山本五十六

「はははは、冗談だ、では作戦計画書に目を通してくれ、ではまた」

翔平

「はい、了解しました」

そう言って山本は退室した

啓太

「さて、これからどうするん？」

翔平

「取りあえず、報告書と計画書に目を通す、二人とも取り敢えず静かにするか、出て行ってくれ」

啓太

「じゃあ、俺は艦内巡検でもしますか」

播磨

「私は、鳳翔の所に行ってくる」

翔平

「おう、分かった」

翔平は執務机に座り、報告書に目を通し始めた。

第三十一話 作戦準備期間（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8595n/>

新生連合艦隊

2011年11月16日14時26分発行